

---

# 太陽は沈まない～結城綺羅ver.～

美波可奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽は沈まない〜結城綺羅ver.〜

### 【Nコード】

N2602J

### 【作者名】

美波可奈

### 【あらすじ】

俺がどうやって利加さんを捕まえるか。  
利加さんがどうやって逃げるかの軌跡。

あなたが残したもの 1 (前書き)

太陽は沈まないを先に読むことをお勧めします。

## あなたが残したもの 1

ふざけんじゃねえとか。

走馬灯のように駆け巡ったよ。

俺の頭の中。混乱したし。

だけど此処はひとまず引いて次の手を考えなくちゃこいつは手に入りようがないって。

それだけは判ってた。

まあ利加さんが人一倍意地っ張りで人一倍気にし過ぎて。

人一倍何も望まないって知ってるし？

まあ俺の想定内だったんだけど。

ただ想定外の出来事だったのは。

勝手に催眠療法所とか？いうところに行ったことだった。

バイタリテイもないくせに行動的だったんだなって気づいて。

そうさせたのは自分だと気づいて愕然としたんだ。

確かに俺は昨日女とイチャついてたよ。

だけどね。それは昔からの腐れ縁の延長にすぎなかったんだ。

俺は言ったことあると思うけど。

俺のライブには2世が多いから。

キスなんかあいさつ程度なんだ。

だから俺がキスを嫌うわけ。  
自分からしたことなんか無いんだ。

利加さんにはしたくてして。  
叩かれることが多いんだけど。

「あなたのこと大嫌いですっ！！  
初めて会った時から苦手でした。」

そう言われたとき俺は案外ダメージ受けたんだよ？

だけど俺は決めた獲物は逃がさないんだ。  
一回引かないと泣きそうだったから。

逃げようなんて許さない。  
あんたは俺が面倒見てやるって決めたんだ。

俺を振るなんて許さない。  
あんたが俺のこと好きだって知ってるから。

あんたが涙を流さないなんて許さない。  
俺の前でだけ泣けばいいんだ。

「…綺羅。不気味なんだけど。」  
俺は淳也にそう言われて不気味な笑みを浮かべたんだ。

あなたが残したもの 1 (後書き)

しつこいぐらいに続きます。

## あなたが残したもの 2

「なあ。利加さんって包丁とか持って自殺するとか思う？」  
俺が問うと淳也は眉根を寄せて。  
翼はお茶を嘔き出した。

「はあ？」

「何言っちゃってんの？綺羅？」

「いやマジな話。

利加さんって自殺するって思う？」

「…そんなわけないだろうが。

あの人は超絶人のこと考えるんだぞ？

あり得ないって。」

「ってか自殺しようとしても自分の死体はどうしようだとか綺羅に  
迷惑がかかるだとか色んなこと思うんじゃないかねえ？

あの人そういう人じゃん？

ウブすぎんだよね？」

淳也がそう言っつて翼が付け加えた。

「でもそんな初心なところがサド的思考の綺羅さんは堪らないんだろ  
？」

「今どき女だつてあんなにウブじゃないもんな？」

ぎゃははと笑つて翼が言った。

「だって利加さん。」

綺羅が狙ってるから俺らも手出しはしないけど手つかなかったら一回ぐらい頼んでも良いぐらい何かそるんだもんね？」

「そうそう。下半身直撃〜〜みたいなの？」

俺はそれを聞いて。

ちよつとムカついた。

自分が聞いたくせに何だけど。

「利加さん。辞めるって。」

苦しいから俺らの付き人辞めるって昨日言ってたんだ。」

「綺羅。それマジで？」

だったら俺らの付き人は誰になるわけ？」

「和久田は……。」

「バカ。和久田は俺の嫁だろうが！！」

何で嫁連れて歩かなくちゃならん！！」

そうそう。そういえば和久田と淳也は結婚した。

利加さんが親身になって動いてたらしい。

それを聞いた時利加さんらしいなと笑えたんだ。

「ってか綺羅の会社もう少し男でも女でもいいから利加さんみたいなんないいの？」

翼が言う。

「俺も賛成。何だかんだ言っても仕事良く判ってくれるのってやっぱり利加さんだもんね。」

和久田はやかましすぎだもんね。（ガックリ）」

「何？淳也。」

もう嫁の尻に敷かれてんのか？」

淳也のバカ話を聞きながら俺は考えていたことがあって。

利加さんを少し自由にしてあげようって思ってたんだ。

昨日の様子からするときっとすぐにでも辞表を出して。

きつと俺の前から消えるのは早いだろうと大体予想がつくんだ。

「綺羅？どうした？」

翼が俺に聞いてきた。

「俺さ。」

立ち上がった。

「…利加さんを少し自由にしてあげようって思ってるんだ。」

「えっ？超絶執着質の綺羅が？」

「うるさいよ。淳也。（怒）」

「なにになになに？綺羅。」

もう一回言ってる？」

「…だから利加さんを自由にしてあげようって思ってるんだけど。」

俺も下界につてか利加さんが行くであろう場所を情報網を使わないで見つけてみたいって思うんだけど？」

「何？それはネットや電話使わないで利加さんが行く場所探すってこと？」

「それで提案なんだけど。」

「うん。」

翼と淳也が俺を見た。

「テレビの活動は今まで通り。

ライブも今まで通り。

「けど少し違うのは学校や施設まわりしてみたいって思うんだけど?」

「面白そうじゃん?

「どうするってわけ?」

「利加さんは大体多分だけこの町は出ないと思うんだよね。

「だって育った町を捨てるほどあの人は情緒が無い訳がないから。

「だから範囲としては学校25か所と施設20か所で。」

俺は具体的な数字を出して淳也と翼に提案してみたんだ。

因みに俺結城綺羅は芸名で。  
本名は斎藤綺羅という。

利加さんにも別に突っ込まれなかったから言わなかったんだけど。  
俺ってば結構鬼畜で性格破綻者だと付き合ってた女に言われた。それも代々。

それで振られる。

ってかそれは良いんだけど。(いいのか?)

まあ自分の人生を二十歳になる寸前で語るには丁度いいかなって思ったわけで。

俺の自叙伝は Wait for you の泉野真理と利加さんでドラマやったんだけど。

ただそれは前半は本当に利加さんの自叙伝みたいで。

俺は見たときびっくりしたね。

だってあの人あんな面で結構修羅場くぐってんだもん。  
だから惚れたんだけど。

俺の自叙伝っていうより利加さん主体の自叙伝みたいなもんだっただから。

俺的には納得いってないわけ。

それは利加さんの「結城綺羅はミステリアスじゃないと」の一言で決まったんだけど。

ああ報われてない俺って可哀想じゃない?(笑)

そんなわけで自己紹介を少し。

俺斎藤綺羅は何でこの名前なのかから始まるんだ。

うちの親父がつてか今の社長なんだけど俺に負けないうらいに女グセが悪くて。

でも好きになつたのは1人だけ。

俺の母親だった。

俺の母親は地味な人だったって兄さんもいうんだけど。

元々体が強くなかつたから俺を生むと同時に死んだっていう。

俺の親父は荒れたって。

随分と荒れて俺を憎んだって言ってた。

孕ましたのは親父だろうが！とどれだけ喧嘩したことが。

何かというと「由梨絵がいれば。」っていうんだ。

俺の母親は由梨絵と言ったらしい。

写真で見る母親は綺麗だった。

だから俺が綺麗って言われるのも判るだろ？

まあ俺は別にうれしくないんだけど。

そして俺は常用漢字には無い字で「綺羅」と名付けられた。

後で親父に聞いたら芸名っぽい名前だと後々困らないだろ？と意味不明なことを言われたんだ。

おかげで木偶の坊の親父は経営はものすごく良いんだけど。

他のことはさっぱりで。

俺は兄さんと同じ。

つまり親父の弟のところに預けられたんだ。

そこで富貴砂菜に出会ったんだ。  
あいつ綺麗だったよ。

ガキのくせに綺麗な表情で笑うんだ。  
控え目で目が見えないのもハンディだとは思わせない何かを持っていた。

俺はすごい富貴砂菜の顔が好きで。  
好みにど真ん中。

何も言うことが無いほどに好きだったんだ。

ただあいつ盲学校に行かないといけないらしくて。

俺はそれを知らないまま。

転校したって聞いた時は泣いた。

中坊にもなってたというのに。

それで俺は富貴砂菜を探すため。

高校入学と同時に芸能人になった。

俺様の美貌に世界はひれ伏したって言いたいところだけど。

現実はそのじゃなくて。

まあそこそこに人気はピンでもあったんだけど。

当時の眼鏡のマネージャーがこれだといつかピンでは消えていくし  
かなくなりますよ？とか言いやがって。

そんなわけで即席のバンドを組むことになったんだ。

バンド組むと不思議なことに人気は上がるってもんで。いやいやいや。マジでびっくりって感じ？

淳也と翼は名前で選ばれたんだ。

どっちも本名で芸名っばいそこそこ女受けする顔立ちのっていうので探したら。

翼は前のバンドでいざこざがあつて辞めた直後で。

淳也は元営業マンのバンドのボーカルを探してたつていうから。

結構そついう奴この業界は多いんじゃない？

んで結構気が合つちやったりしたりして。

多分根底で俺らは似てるんだろつなつて感じだつたんだ。

だつてチャラチャラしてて。

真剣になるのはライブの時ぐらいで。

女グセ悪くて。

でも女の趣味はかぶつてないからそれでケンカになることは無い。

唯一被つたのが利加さんだつたんだ。

利加さん狙いは自分だけだと思つてたら。

淳也は淳也で他で手を出そうとして怖くなつて止めたつて言つし。翼は翼で彼女持ちのくせに何か狙つてた？とか狙つてる？とか？

だから俺つてば案外必死だつたわけよ。

こと利加さんに対してだけは。

## 半生 2

利加さんを好きな理由。

それは何？つて聞かれても俺だつてよくは判らない。ただどなんか胸のあたりがざわめくんだ。

あの人の前に出ると。

利加さん初めて見た時は女じゃないの残念だとか。

それぐらいしか思わなかつたんだけど。

あんなに人のこと考える人俺は知らなかつたから。

マネージャーが利加さんになつたのは俺が女のマネージャーに手を出してそれが泥沼化して親父に怒られてだつたら男にしてやると写真見せられてその中から選んだのが綺麗な顔をした利加さんだつたんだ。

利加さんの初めて俺を見た時の顔は傑作だつた。

嫌な表情を露骨に表してまるで俺がこれから利加さんを食おうとしてるかのような表情だつた。

大体俺を見てみんな言うのは。

「綺麗な顔をしててカッコいい。」だとか。

「抱いてほしい。」だとか。

まあそんな感じで大体が恋愛感情のもつれで辞めていく。

俺だつて遊びだもん。

マネージャーとの真剣交際だなんてあり得ないから。

利加さんだけだった。

眉をひそめて嫌そうにしたのは。

そして挙げ句引き受けたその日に「僕は辞めます。僕には出来ません。」

そうはつきり言ったのも利加さんただ1人だった。

俺はそれでカチンと来たんだ。

初めは。

だって利加さん俺らの顔を近くで見られて嬉しいっしょ？

目の保養になるでしょ？

とか。

思ってたら全然違って。

「僕にはあなたたちを見て何かを思うことなんかあり得ないです。」  
「  
そう簡単に抜かしやがった。」

まあ男だから？

カッコいいとか言われたら気色悪いだけけど。

だけど俺の美貌にひれ伏さないだなんてあり得ない。

絶対こつち向かせてみせる。

そう俺は誓ったんだ。

元々人のことを自分の事より先に考えるような人間俺は大嫌いだった。

嘘くさくて献身的な様子？だとか言われようものなら虫唾が走る。

だから俺はこの唇で確か初めて会ったその日にか。  
忘れたけど。

愛を語ってみた。  
まやかして。

利加さんの耳元で語ってみただ。  
女ならイチコロの超低音ボイスで。

「俺利加さんの事好きだよ。」って。

女みたいに耳元真っ赤にしてうるたえる利加さんに俺は密かに「してやったり」って思ったんだ。  
露骨に嫌そうにする奴をどうやってこっち向かせるかなんか俺にとっては朝飯前だって思ったんだ。

それなのにそれ以上何もなかったんだ。  
あり得ないって。

確かにあのときは耳元真っ赤にして。  
利加さんこっち向いたと思ったのに。

向いたはいいいけど向いただけで。  
相変わらず色気も何もなかった。  
ってか色気期待する方がおかしいか。  
利加さん男だし。

俺だって判ってるんだけど利加さんって超絶絶対感度良いって確信持ったんだ。

しかも絶対受け。

自分からは絶対行動しない。  
常に受け身。

だから俺は。

利加さんを追いつめたくなる。

追いつめてこつちを無理やり向かせて。

どうするか探りたくなる。

…だから淳也に鬼畜だ。サドだといわれるんだろうけど。

でも淳也曰く。

淳也が利加さん嵌めた時は利加さん何も言わなかったって。

ただ耐えてたって。

抵抗もしなかったって言った。

「やれるもんならやってみたらいいでしょう!!」

利加さんらしくない言葉を吐いて。

睨まれたら最後まで出来なかったって翼と二人して異口同音に報告を受けたんだ。

俺はね。

嫌われれば嫌われるほどにそいつに執着を持つ性質がある。

まるで獰猛な猛禽類みたいに。

常に俺は利加さんを狙ってた。

あの人が眉をひそめて簡単に泣けば。  
或いは俺はこの感情を持たなかったかも知れない。  
それなのにあの人は滅多に涙を見せなかった。

それに。

俺が同棲させてもらってる時は（利加さんいわく単なる同居ですけど？）と言ってたけど、あの人の潔癖だから。  
仕事が終わって連れ立って帰って来ても一言も話さないんだ。

バスルームは共用だからじゃんけんで後先決めて。

あの人のホント女みたいに潔癖でさ。

俺がタオル一枚で出て行って。

携帯テレビを点けて座ってた。

こっちを見ようとしなくてただ言っただ。

「風邪ひかないでくださいね？」って。

そして俺は最初ちょっと期待してたんだ。

あれだけ嫌がる表情見せて。

本当はボーイッシュな女だからあんなに警戒してるんじゃないかとか。

なのに利加さん。

ご丁寧に服も持って入って。

しかも鍵まで掛けやがった。

ってかそれが礼儀なのかもしれないけど。

シャワー上がりの利加さんに俺はちょっと意地悪したくなって。

本当は追い出されても仕方ないようなセクハラをしたんだ。

「なあ。利加さん。」

「…はい。」

利加さんは頭をふきながら聞いてきた。

「男同士なのに何で服持ってるの？」

「しかも鍵まで掛けて。」

しつかりシカトされちったよ。

嫌そうな視線を向けて利加さんは無言だった。

俺はさらに寄って行って。

「…利加さんさ。何か意識しすぎなんじゃない？」

服まで持つて入るだなんて何か意識してる以外のなにものでもないと思うけど？」

「~~~~~!!!」

「俺さ。そんなにされると意地でもあんたの体見なくなるんだよね？」

「…何考えてるんです？」

呆れた声で利加さんが言った。

「う〜ん？今は利加さんあんなのことだけど？」

「~~~~~!!!」

「利加さんさ。本気で逃げなよ。」

俺がこうするの嫌ならさ。

中途半端なあんたが悪いんだよ？

どう考えてもあんな誘ってるようにしか思えないんだよな？」

タオル一枚の俺としっかり服を着込んだ利加さん。

不思議な光景だったと思う。

一步利加さんが下がるたび俺は一步近付く。

そのうち利加さんの後ろは壁でそれ以上行けなくなった。

そしてそそる眼差しで俺を見るんだ。

一生懸命俺を見上げる。

それは怖いけど視線上げてないとして表情だった。

まるで新雪みたいに俺好みにきつと利加さんは変えられるって確証を得たんだ。

俺が顔を寄せて。

利加さんの耳元に口づけたら利加さんは盛大に暴れたんだ。

「ひっ！！！」

多分食われるんじゃないかってぐらいにビクッてなって。

あんまり暴れるから俺はたまりかねて利加さんの両腕をねじり上げたんだ。

「…利加さん。肌綺麗じゃん？」

そう言ったら泣きそうな眼差しで俺を見上げるんだ。

何て言うの？

もうホント俺やられた感じ。

こんな好みの人間もう絶対会えないって思ったんだ。  
愛しいって言うか。  
何かこのまま壊してやりたいって言うか。

凶暴な感情と愛しい感情が相まって。

俺は利加さんをしっかりと抱きしめたんだ。

散々暴れてだけど。

暴れても敵わないと観念したららしく抵抗は弱まったんだ。

淳也の言葉でいえば。

下半身直撃くっつけて感じ？

男相手なのになぜか。

なぜかこんなにも反応してる俺ってば。

マジヤバいんじゃないの？とか思ったりして。

利加さんの嫌がる顔が俺をそそるから。

そう言いはしなかったけど。

でも確信があつたんだ。

利加さんは俺を嫌わないって。

凄い自信だと我ながら思うけど。

翼曰く。

「綺羅は節操無いから俺たちも同居させてもらおう。」

そう言つたんだ。

「えええ？マジで？」

俺と利加さんの愛の巣にお前ら邪魔しに来るの？」

俺はそれを聞いた時盛大に驚いてみた。

「綺羅お前大丈夫かよ？」

マジ利加さんにやられたつてわけ？」

淳也が驚きの眼差しで言つてきた。

もちろん利加さん抜きでの話だけど。

利加さんは当事者だけどころさだからこういつときは結束の固い俺らで決めるんだ。

「…利加さんって。お前参らせるってどんなふうに色気振り撒いたんだ？」

翼はさっぱり判らないと言う。

比較的俺寄りの思考の淳也は。

「でも利加さん言ってたぜ？」

綺羅とは完全にプライベートは分けてるって。

綺羅お前シャワーすら浴びてるとこ見たことないって？」

「…そうなんだよなあ。」

俺は大げさに肩を落として。

「利加さんその辺の女よりずっとガード固いんだ。」

「…ってかさ。綺羅ヤラシイから利加さん警戒すんの当たり前じゃないの？」

俺も人のこと言えないけどセクハラしまくってるんだろ？」

「まあねえ」

だってその辺の女よりガード固いって30手前にもなる男のくせにおかしいじゃん？」

なんか裏があるんじゃないかと思ってる。」

「何？利加さんって俺らとそう変わらないんじゃないの？」

「バカ。あの人は大卒のエリートちゃんだよ。」

確か俺らより10ぐらい上じゃないかと思うけど？」

「…それであのウブさなわけ？」

ヤバいんじゃないの？利加さんって。

きつと女抱いたことないな。あれは。」

「ああ。淳也もそう思う？」

俺もそう思うんだけど。」

翼はニヤリと笑って。

「…それで綺羅は今まで何してたわけ？」

2人っきりの愛の巣で今まで利加さんのことを手をこまねいて見てたわけ？」

俺はてつきりもう利加さんはヤツちゃったって思ってたんだけど  
?」

「だ〜か〜ら〜言ってるじゃん。」

手出そうと思ってもあの人ガード固すぎなんだって。

隙がないんだもんな。

シャワー入ったらその足で電気消して寝袋にくるまって寝ちゃう  
から。」

「結城綺羅ともあろうものが情けない…。」

「良いじゃん。今日決行すれば。」

「おいおい。翼。」

それは良いこと言うな。」

「綺羅がもちろん最初で俺らは手とか足とか抑えといてやるうか?」

そんな話をして利加さんとこに3人で帰ったんだ。

その日が利加さんを抱く絶好の記念日になるはずだった。

だけど。

利加さんは疲れた顔で俺たちの後から帰ってきて。

淳也や翼がいてもため息をつくだけで。

何も言わなかった。

言っても仕方がないと思ったのか。

それとも得意の諦めか。判らないけど。

そして利加さんはよほど疲れてたのか俺ら3人が騒いでもモノと  
もせず。

シャワーも浴びないで寝袋にくるまってしまったんだ。

ってか勝手に思ってたんだけど。

折角の初夜になるはずだったのに。

利加さんはその眼差しをその日は俺に向けることもなかったんだ。

朝は時間が無いからふざけるのもほどほどにしとかないと利加さんがキれる。

それも火山のようにキれるならまだ良いんだけど。

朝からふざけ過ぎてそのあと一週間ぐらい完全に無視された経験が俺にはあって。

つてかこの天下の結城綺羅を無視できるつて時点で俺の完敗なんだけど。

今日は朝っぱらから淳也がふざけ出した。

奴にしては珍しく朝弱いくせにぱっきり起きて。

着替えを済ませた利加さんの肩を掴んで。

言ったんだ。

以前の俺よろしく。

「なあ？利加さん。

何だつてそんなに警戒してんの？

着替えぐらい男同士だしここで着替えればいいじゃん？

つてかさ利加さん。そんなんしてたら俺ら意地でもあんたの体見たくなるんだよね。」

バカ淳也！！と止めたときには遅かった。

マグマのように利加さんは真っ赤な表情で。（それが結構そそるんだけど）

淳也の手を思いっきり振り払ったんだ。

「…朝っぱらから元気ですね？」

いつもにもまして静かな声は怒りを表してた。

「…今日はあなたたち9時入りなんですよ？」

何だってそんなに余裕なんですか？」

その言葉にカチンと来た翼が。

「…利加さんそれは無いんじゃない？」

淳也の言うことはもっともであんた警戒しすぎなんだよ。」

そこで気づいたのは俺相手じゃないと速攻で無視には入らないんだ。つてこと。

俺はそれに気づいて何だか面白くなくて。

「…利加さん。」

後ろから雪崩れてみた。

「ひっ！！何なんですか！！」

綺羅さんまで！！」

「何で俺が淳也と同じこと言った時速攻で無視に入ったくせに今は口きいちゃってんのよ？」

俺はあんたの専属タレントだぜ？

こいつらのマネージャーの前に。」

肩から手をまわして抱きしめてみる。

「何？綺羅と同じこと俺言ってるの？」

淳也が利加さんの前に回ってまた肩に手を回そうとした。

俗にいう羽交い絞めってやつ？

俺は後ろから利加さんを眺めてみた。

そしたら利加さんってばこれ以上ないってぐらいに首筋赤くなって

いて。

俺は吸い寄せられるように唇を寄せたんだ。

「ちよっ！！！何なんですか！！」

放してください！！！！」

利加さんは悲鳴に近い声を上げて。

きっともう口をきいてくれないだろうなあとか。

俺はうつすら思いながらも利加さんを抱きしめる手を離せなかった。

「利加さん感度良すぎ。」

俺が唇寄せるたびビクビクと震える。

ホントその辺の女よりウブだ。

せっかくキチンと結んだネクタイも淳也が外した。

ネクタイの抜く音すら卑猥で。

利加さんってば昨日シャワー浴びずに寝ちゃったくせに何だかせっけんの匂いがして。

俺は首筋から唇を離せなくなった。

「~~~~~！！！！」

もうやめっ！！！！」

利加さんは真っ赤になって立っていられなくなって。がくんと膝をついた。

俺はそこでようやく我に返って。

やっこの思いで利加さんにまわした手を放したんだ。

「俺。謝らないよ？」

利加さんあんたが悪いんだ。」

無視できないように予防線を張る。

可哀想だけど無視できないようにちゃんとこれが現実だと受け止めるように。

俺は言葉で追い打ちをかけた。

「利加さん。俺たちに迫られるのが嫌なら本気で逃げなきゃ。」

淳也と翼が口々に鬼畜だサドだと言ったけど。

俺は座り込んで真っ赤になった利加さんに言いたかった。

逃げるんなら徹底的に逃げなきゃ意味がないんだってこと伝えたかったんだ。

そして淳也が呟いた。

「…利加さん女だったらきつといい女だっただろうに。」

そうだね。俺もそう思うよ。

## 自信 1

その日は腹いせのように仕事が続けに入って。つてか昼のインタビューはこれ見よがしに利加さんが入れたに違いないと俺は思ってるんだけど。

夜も23時回るころにはぐったりだった。

どっちかっていうと昼間のライブ合わせのリハが一番楽で。みんなが休んでる休日の昼のライブが一番楽しかった。

昼のインタビューを取ってきた利加さんに俺が。

「利加さん。ちょっとあんた仕事とりすぎなんじゃないの？」  
そうケチをつけたら。

「…僕を本気にさせたあなたが悪いんじゃないですか？」  
そう返ってきた。

ほおおお〜。そうかい。

そう来るかい？  
俺はそう思ったんだ。

「…利加さんつてば大人げない！！」

俺らに敵わないからって仕事で対抗するつもり？

つてか疲れさせて悪ふざけさせないって魂胆だろう？」

俺がそう言つと淳也が。

「利加さん知らないの？」

こいつ朝っぱらからハイテンションだけど夜は夜でお盛んなわけ？  
どれだけ疲れてもそれは変わらないんだけど？」

そう言ったら。

利加さんってば真っ赤になって。  
俺を見つめたんだ。

何だよ。凶星かよ。

俺は何だか面白くなって。

今日は夜になったら絶対利加さんしとめるって思ったんだ。

23時回って。

やっと監督の終わりのサインが出て。

利加さんはいつも通り車を回す。

そして俺らを乗つけて帰るんだ。

綺羅さんの隣はじゃんけんで決める。

それは出し抜きとかに合わないため。

でもよく考えたら乗り気じゃない翼でさえも話に乗ってきてるって  
どうよ？

とか思ったりして。

今日は俺が勝ったから助手席に乗った。

そしたら利加さんが盛大なため息をついたんだ。

「何だよ。そのため息。」  
俺が問うと。

「…僕を試して綺羅さんたちは楽しいですか？」  
そう静かな声で言ったんだ。

「はあ〜？」

俺が素つ頓狂な声を上げると。

静かにと利加さんはちらつと後ろを向いた。

後部座席では淳也と翼が肩を寄せ合って寝てたんだ。  
静かな寝息が聞こえて。

「俺はあんたを試してんじゃないけど？」  
少し小声で言った。

「…試してるんじゃないければ何なんです？」  
あれは……完璧セクハラです!!」

「だから俺はあんたが好きだって言ってるんじゃない？」  
俺は続ける。

「そんなわけないでしょう？」  
あなたは僕なんか嫌いなはずだ。」

「何で？何でそう思うんだ？」  
そう問うと。

「…斎藤さんが言ってたけど。  
あなたは嫌いな人にこそ初対面で寄って行くんですってね？」  
俺は何だか射抜かれた気分がして。

「…兄さんの言ってること真に受けっちゃってるってわけ？  
本人がここにいて本人が好きだって言ってるのにあんたは信用し  
ないってわけだ？」

「…信用も何も。」

あつたもんじゃないでしょう？

あなたは…あっ！！！！」

俺は信号で止まった際に利加さんの肩を掴んで。

無理やりキスしたんだ。

めっちゃ濃厚なやつ。

それこそ冗談で済まないぐらいに。

俺をここまでムカつかせて。

でも愛しくて。

憎くて。

でも嫌いになれなくて。

そんなの利加さん以外いないって。

## 自信 2

でもね。正直失敗したって思ってるんだ。  
そのキスの後。

利加さんは完璧無視に入って。  
淳也たちがいるときはまだまじだけど。  
居なくなつた途端口を利かなくなる。

それすら愛しい俺って末期？とか思っただけど。

ねえ？こつち向いて。

あなたのこと話してよ。

俺はあなたのこと何も知らない。

そう思つて問いかけたとき。  
意外な事実が判つた。

あのあほなセクハラ部長と兄さんにどうして頭が上がらないか。

利加さんみたいに真面目ならとっくに出世してても良いぐらいなの  
に。  
なぜか新入社員みたいにいろんな雑用してるから。  
常々何でかなとは思つてたんだけど。

…僕は母親を好きだったんです。  
その言葉聞いたとき。  
きつとトラウマになってるんだってあほな俺でも判った。

一時的にでも自分は母親強殺容疑にかけられて。  
ってか本当は自分は母親を恋愛感情で好きだけだったのに。  
何もしてないのに。俺みたいに。

誤認逮捕されてその時に助けたのが兄さんたちだったって判って。  
俺は下唇をかんだんだ。

…あの人は本当に。  
利加さんは本当に。

俺は本当に兄さんより先に利加さんに会いたかった。  
そして助けてあげたかった。  
見返りは欲しいけど絶対的な信頼をほしかった。  
あんな兄さんを見つめる瞳で俺を見てほしかった。

そして驚いたのが。  
俺の原点とも言える富貴砂菜の従兄だったってことが判ったとき。  
俺が惹かれる理由が一気に判ったんだ。

俺は富貴砂菜が初恋の人で。  
それを探すため芸能人になっただけ。

正直聞かれてもいないのに初恋の人探してますだなんて俺のヴィジュアルからは似合わないし。

しかも18だけど汚れまくってる俺は。

もう「初めて」が誰だったかすら覚えてないぐらいだし。

それで富貴砂菜を好きだつて言えるかって言われたら絶対言えるわけがないって思えてならなかった。

記憶の中の富貴砂菜は儂くて愛らしくて。

可愛くて。守ってやりたくて。

ただそれだけだった。

富貴砂菜が利加さんに目の移植を頼んでたことを聞いて。

そして利加さんは了承したと聞いて。

そして利加さんに。

「兄さんは守るものももう何もないでしょう？」

「だったら私に瞳をください。」

泣きながら頼んだと聞いて。

俺は一気に冷めたんだ。

富貴砂菜がそんなふうにな人を傷つける人間だとは思わなかったから。

そしてきつとその時だつて何も言わずただ微笑んだであろう利加さんに。

俺の気持ちはますます傾いたんだ。

結局俺は富貴砂菜の風貌に惹かれただけだったんだつて思うと。

バカみたいだつて。  
好きだったんだ。顔だけは。

だけど人の人生壊してまで生きようとした富貴砂菜に呆れたんだ。

利加さんは深く傷ついて。

何かというと得意の諦めモードに入る。

だから判った。

根底がそれでそれを癒やすために俺はいるんだつて。

いくら耳元で囁いてもあの人は聞いてくれないけど。

## 静かな瞳 1

俺は今までにないぐらい自分のことも利加さんに判ってほしかったんだ。

だから絶対こっち向かせてやるって誓ったんだ。

あるときストーカーまがいの男に刺されそうになったとき。

俺は叫んだ。

珍しくマジだった。

どうしてそしてまさか。

利加さんが俺を身を呈して庇ってくれるだなんて思わないじゃん？  
それが俺のバカなところなんだけど。

あの人は何も言わない人だから。

…少し考えれば判ったかもしれないけど。

人のことに於いては底知れないパワーを発揮する。  
それが利加さんだったから。

利加さん男だなってそんなとき思うんだ。

いつもはへなちよこマネージャーって思ってるのに。

幸い寸でのところで命は助かったし。

俺はこんなにまで追いつめられるなら。

いっそのことカミングアウトしてしまった方が楽だと思って記者会見に臨んだんだ。

「俺は利加さんが好きです。

俺なんかを庇って今ICUにいます。

俺は：こんなにも切ない気持ちになったことなんかありません。」

演技をしてたつもりは無かったけど。

演技だとバッシングも受けたんだけど。

それを復帰した利加さんが見事に玉砕してくれた。

あの鉄面皮で。

鉄面皮。

辞書で引いてみたら。

恥を恥だと思わない人。

または面の皮が厚いこと。

およそ利加さんとは似つかわしくない単語だったんだけど。

マスコミ曰く。

利加さんみたいに取り乱さない冷静沈着容姿端麗そんな奴の事を言うんだって。

俺はみんな知らないくせになんて腹が立った。

なにより利加さんに腹が立った。

だって利加さん俺が茶々入れるからって一服盛ったんだ。

それも騙して。

淳也をたぶらかして。

って聞こえは悪いけど。

俺からしたらそれ以外のなにものでもなかったんだ。

利加さんと淳也が親密とは言えないけど。

俺の台本紛失事件からよく話すようになったのは確かだ。

初めは淳也はあんな女みたいなマネージャーと怒ってたくせに。今ではすっかり骨抜きにされてる。聞こえは悪いけど。

きっとそれが利加さんの生きる術だったんだろうね？

誰とでも仲良く可能な限りやって行くのは誰もが出来ることじゃない。

何しろ多分一番手こずるはずの俺がこんなにも利加さんにやられてるだなんて。

俺は夢から覚めて。

翼に聞いたんだ。

「利加さんの記者会見は？」

返ってきたのは。

翼の低い声だった。

「：終わったよ。あの鉄面皮凄すぎるよ。

綺羅のことどれだけ守ったか判らないぐらい自分の所為にして。まるで地獄の使者のように生氣すら見せない鉄面皮だったよ。

利加さん。きっとあれで壊れたかも。」

…僕は凍てついた心しか持っていないから。  
利加さんの口癖が俺の頭の中で響いたんだ。

## 静かな瞳 2

それからの俺は。

何だかふらふらして。

翼曰く。

「糸の切れたようなタコ」のような俺だったらしい。

解散の危機だとか。

好き勝手マスコミには書かれたんだけど。

俺と翼と淳也は別にそんなことは無かった。

ただ俺はそう思っけていても。

淳也たちがそう思っけてるかどつかは判らない。

だっけて実際小さなことで揉める。

それは仕事の順番が主で。

そんなアレンジも利加さんがやっけてたんだなっけて思っけて。

その度「利加さんがいれば」っけて思っけてた。

現金なようだっけてど仕方がない。

そんなわけでライブも減少したんだよね。

それはうまく相手さんとの交渉が行かなくてライブ会場のアレンジが出来なかつたから。

そのおかげでRucypher解散の危機と書かれたんだけど。

その時に舞い降りた企画が。

俺主演の自叙伝だった。  
アレンジのところにY Rと書いてあったから。  
思わず利加さんだと思って。

会社は辞めてないと兄さんに聞いてたから。  
何処かで俺たちのアレンジの仕事やってくれてるんだって思ったんだ。

初めは本当に俺の自叙伝だったから。

「結城綺羅が出来るまで。」みたいな脚本だったんだ。  
だけど俺はそれじゃ意味がないって思ったんだ。

俺は大して苦労してないから。  
って言ったら淳也が眉根を寄せたけど。

俺は一つの提案をして。

俺の相手として利加さんにあたる役を作ったんだ。

利加さんの半生は大体聞いたから。

後は俺がパターンを起こして脚本家にアレンジしてもらえばいい。

ただ役者がねえ？

そう思った時に丁度 Wait for you と Destiny と  
共演するMスタがあつて。

その時金髪姉ちゃんの泉野真理と隣同士で座ることがあつたんだ。

泉野の初めの印象。

眼がでかいな。

背がでかいな。

態度でかいな。

ってか最後のやつは俺に言われたくないだろうけど。  
綺麗とかは思わなかった。

ってか俺自身が俺より少ししか低くない泉野の身長に圧倒されたんだと思うけど。

でも打診してみたんだ。

泉野ぐらいインパクトが無いと多分みんな見ないから。

「…泉野さん？」

呼びかけてみる。

一応俺年下だしね。

「…はい。」

きつい瞳で俺を見る印象は利加さんとは似つかわしくなかったけど。  
唯一利加さんになれるかもと思ったのは。  
俺を初対面から嫌ってるってことだった。

「…今度ドラマやるんですけど俺の相手役男装してやりませんか？  
まどろっこしい言い方はこの際なしで。  
俺は直で聞いたんだって。

「…私の一存では何とも言えませんが。」  
泉野は俺とは違い遥かに大人だったから。  
無下には断らない。

「…脚本今煉り直してる最中なんですけど打診だけしとこうと思いま  
して。」

俺がそう言つと。

「…マネージャーさんは？」  
そう聞かれたんだ。

「今諸事情でマネージャーいないんですよ。」  
俺は恥だけど話し始めたんだ。  
脈ありと見たものでね。

### 静かな瞳 3

「…どうしてマネージャーさんいらっしやらないんです？」  
泉野がそう問うのも尤もだったし。

だけどね。俺。

言わなかったけど謹慎期間中で。

俺の専属マネージャーはいないってことだったんだ。

一応 R u c y p h e r には和久田っていう女のマネージャーがいる。

だけどそいつは俺の仕事には抵触しないから。

だって一時は利加さんをあの世にやるかもしれない状況だったからね？

俺は利加さんに（正式には淳也にだけど）一服盛られてから会ってない。

親父にも怒鳴られて利加さんが恩赦は受けただけど辞令を受けたと聞いて。

俺は場所はどこだと親父に詰め寄った。

だけど。

親父に「好きな人をお前は殺すかも知れなかったんだぞ。少しは大  
人しくしたらどうだ!!」

と言われて何も言い返せなかった。情けないことに。

俺は目の前の泉野に言ったんだ。

正直な俺の気持ち。

きつと判ってくれるって。

「…俺。利加さんが好きです。」

「ああ。利加さんって今話題のあのマネージャー？」

「…そうです。」

「…いったい何があってあなたのとこそんなになっただんです？」  
俺は息をついて。

「俺ね。今まで生きてきて。」

「こんなな心が痛くて切ないことなんてなかったんです。」

泉野は頷いた。

振り向くと真田一矢が立っていた。

「ああ。一矢。」

真田は俺のとこのライバル会社の次男坊で。

俺は少しは面識があつて。

「…真田さん。」

ちゃんと敬称をつけて呼んだ。

「…へえ？結城綺羅が少しは大人になっただんだ？」

真田は近づいてきて。

「…何の話してんの？」

そう聞いてきた。

そしたらすかさず泉野が。

「…一矢。何かあったら私がこいつただじゃおかないからしばらく話させてくれる？」

そう言ったんだ。

俺は泉野を見つめて。

そしたら真田が。

「…ああ。真理。」

こいつ手が早いから遠慮なく投げ飛ばして構わないと思っぞぞ？  
そう言っただ。笑いながら。

「…えっ？」

俺は声を上げて。

真田を見ただ。

「何だよ？俺の嫁なんだけど？」

真理は。」

真田はそう言っただにやりと笑っただ。

「全然知らなかった。」

俺は驚きのあまり敬語を忘れた。

「因みに真理は俺より強いぜ？」

真田は驚く俺をぼんぼんと叩いて。

消えっただ。

「…で。利加さんをあなたは好きなのわけだ。」

泉野が消えて行っただ真田の方を見つめて言っただ。

俺が頷くと。

「…同性なのに本気なんですか？」

マジな表情で。

泉野は俺に視線を合わせたんだ。

「…俺は人に恥じる生き方ずつとしてきたって自覚してます。だけど利加さんにだけは誠実にいたいと思うんだ。だからもう今は結構真面目に生きてると思うんですけど。」

「…それはもう誰も抱かないって言えるってこと？」

人が聞かないことを泉野は聞いてきた。  
俺が頷くと。

「…女グセ悪いのってそんなにすぐに直るもんですか？」

そう言われたら自信は無かった。  
だけど。

「でも俺。」

利加さんに大けがさせて償わなくちゃいけないって思って。」

泉野はため息をついて。

「用件は何です？」

そう言ったんだ。

俺は意を決して。

「ドラマの利加さん役してください…！」

そう言ったんだ。

それが叶えられるだなんて思ってないけど。



まあその時は何も思わなかったんだけど。

泉野真理を相手役に選んだの正解だったなって収録が始まって気づいた。

だって泉野ってば演技上手かったんだ。

ほとんど利加さんだった。

俺何だかふらふらっと思っちゃいそうだったもん。

利加さんお得意の諦めの表情が特に上手くて。

駆け寄って抱きしめたくなるって感じ？

OKのひと声でいつもの泉野に戻るから俺的には何だかなあって感じだけ。

そうそう。泉野には宣戦布告されたんだ。記者会見のときに。

俺があらかじめ言うからと予告してた「でかい女は嫌いだ。」発言に対抗して。

「ドラマの中で絶対惚れさせてみせる。」って泉野に言われたんだ。

ヤバイよ。俺の負けかもとか思ってたんだ。

それで泉野は歌手だからドラマの中で挿入歌を歌う。

イキルチカラってやつ。

そのの応答を俺は考えなくちゃならなくて。

なかなか思いつかなくて。

カタカナにはカタカナで対抗だよな〜とか。  
ユメノカケラとか語呂的によさそうじゃん？とか。  
淳也と翼と和久田で考えてたんだ。

そしたら突然吐き気がして。  
クラっとめまいがして。

思わず口に手をやったら。

血だったんだ。

暗転。

俺ってば死ぬんだろうとかとか。  
和久田が騒いで救急車呼んで。

それから記憶が無いんだよね。

気づいたら病院のベッドの上だった。

俺ってば結構繊細なんじゃない？

## ユメノカケラ 2

そして次に利加さんの姿を見たのは。  
俺にとっては奇跡みたいで。

思わず引き寄せた。

「ん〜」。利加さんのおい。」

そう言つと利加さんは真っ赤になって。

逃げようとするから。

俺は意地悪く力を込める。

利加さんは力では俺に敵わない。

つて知ってるから余計に放したくなかつたんだ。

「…キスもしません。」

利加さんがそう宣言したとき。

俺は思わず引いたね。

つてかカタすぎだろう!! っつて。

でも多分利加さんの決意は固いはずで。

俺が無理やりやろうとしたらきつと舌噛むって思ったんだ。

だつてさ。俺入院してから暇で。

ネットで調べたんだ。

男とやる方法。

そしたら画面見たくもなくなって。  
吐き気さえ何か催すような内容で。  
俺ってば純粹に利加さんが好きなんだなって改めて思ったりして。

そしてつまり利加さん役ってか。  
やられる方は立てないぐらい痛いらしい。  
グロい内容だった。

利加さんにそれを伝えるとさらに真っ赤になって。

「あなたは何考えてるんですか！！！」  
と怒鳴られた。

でもね。やっと利加さんが俺のこと好きだって言ってくれたんだ。  
俺は報われた気がした。

その言葉を聞いただけでこんなにも心は晴れるのかって思えるぐらいに。

だからドラマの後編は泉野に代わり利加さんが自分の役をすることになったんだ。

俺たちの泉野が歌った挿入歌に対する答えの歌は。

「ユメノカケラ」だった。

だって初めて。

本当に初めて利加さんに聞かせたとき。

利加さんが感動してくれたんだ。

泉野から利加さんに代わってから。

俺も演技に力が入ったよ。マジで。

やっぱり俺ってば鬼畜なんだとかサドなんだとか。

自分でも自覚したって。

やっぱり加さんに理不尽な要求突き付けるのが快感で。

止められなくて。

利加さんはそんな俺の一挙手一投足に右往左往する。

それがまた愛しくて。

止められない。

何度となく押し倒したい衝動に駆られながら出来たドラマが。

「君を射抜く瞳」

ポスターにでかかど書いたあのキャッチフレーズだったんだ。

そして利加さんは俺のちょっとした行動と。  
利加さんのちょっとした早合点で。  
俺たちが築いてきたはずの絆は切れて。

俺の目の前から消えたんだ。

言ってみれば単純な行き違いだけど。  
きつと俺は利加さんを深く傷つけたに違いない。

言われるまでもなくそう思ってるよ。

俺にしてみればあれぐらいで怒るか？ってことだけど。  
超絶人のこと考える利加さんからしてみれば俺の行為は自分を深く裏切ったと言えるんだろ？

翼に言われた。

「…綺羅ってば軽率。」

お前に言われたくないって。  
って思いながらも自分でも軽率だと思っし。  
何も言えなかった。

「でもそれがくるんだろ？」

綺羅の好みど真ん中ってやつだろ？」

淳也にも言われて。

「どうせサドだよ！！」

悔しくて返した。

「でも正直それだけ利加さんに綺羅が参るだなんて思ってなかったよ。

今までの歴代勘違い彼女よろしく手に入らなかったらすっぱり諦めて次探るのが結城綺羅じゃん？」

淳也が考え深げに言う。

「…淳也。お前俺の事舐めてるだろう？」

「…俺は結城綺羅たるものが1人に固執するなんて見たくないって思ってたよ。」

「…翼。お前まで…。(怒)」

「でも綺羅ってば利加さんしか見てないし。」

利加さんマジ女だったらきつと今ごろ2人ぐらい子供孕ませられそつだもんな。」

「…会って2年も経ってないのかよ!!」  
俺が声を上げると。

「…だって多分綺羅の一目ぼれだから」

利加さん必死の抵抗も空しく会ったその日にやられちゃうって感じ?」

「そうそう。利加さん綺羅に会ったことが災難の始まりってやつだよな。」

うづうづうづうづうづう。

なまじ合ってるから何も言い返せなかった。

「そんな天下の結城綺羅さんに俺たちからプレゼントがあるんだけど?」

淳也がもったいぶって言った。

「…何だよ。」

「…前マネの俺の嫁和久田からプレゼント。

綺羅が元気がないと R u c y p h e r に及ぶからと半ギレで渡されたこの紙なんだと思う？」

「…知るかよ。」

俺も半ギレで答えると。

「じゃ〜〜〜〜ん。綺羅の愛しの利加さんの住所。」

「えっ？嘘。マジで？」

俺は素っ頓狂な声を上げた。

「ってかさ。さっきから渡そうって思ってたのに綺羅がさ。

やせ我慢しちやっけて利加さんを少し自由にするだとか。

アナログで探すだとか。

学校回りするだとか言うから要らんのかなとか思ったって。マジで。」

淳也はそう言って俺のその紙を渡して。

「今度は絶対捕まえるよ？」

そう言ってくれたんだ。

俺は情けないことに泣いてたんだ。

こんなにも苦しくて。

こんなにも愛しくて。

嫌いになれたらいいのに大好きで。

体も何も要らないからただ傍にいてほしいって。

そんな気持ちが俺を支えていたんだ。

こんなにも自分が情熱的に人を愛することが出来たなんて。

恋愛なんてゲームだって思ってたのに。

俺のこと好きにならない奴は初めてだったから。

「…綺羅も普通の恋愛できんじゃない？」

翼に言われて。

「…普通かどうかは判らないけどな。」

そう返したんだ。

## 手紙に込めた思い 1

生涯初めて。

俺は手紙を書くことにした。

だってどうせ携帯は多分解約されてるし。

直接会いに行つてまた逃げられるのも俺にとってはダメージが大きい。

せつかく和久田がくれた住所を無駄にしないために。

俺は無い頭で考えたんだ。

利加さんへ。

それが冒頭だった。

利加さんへ。

お元気ですか。その後俺をかばった傷は大丈夫ですか。俺はそればかり気がかりで。

きつと利加さんは俺のこと嫌いだって言ったし。

会つてもくれないだろうし。

ただどうしても伝えたかったから手紙を書くことにしました。因みに住所は和久田さんが調べてくれたのを淳也からもらったんです。

あんな別れ方してしまつて。  
俺はかなり後悔してます。

正直利加さんが許せないことつて通じて誠実じゃないつてことですよね。

俺はあなたが催眠療法を受けないといけないほどに夜も眠れないだなんて知りませんでした。

俺は見てのとおり樂觀主義者だからそんなことは無いんですが。

でもこのところ眠れません。  
どうしてだと思えます？

それは利加さんあなたが傍にいないから。

俺はあなたを思ったび。

自分の不甲斐無さや性モラルの低さを痛感します。

だつて仕方ないでしょう？つて開き直つてみたんですが。  
俺はあなたしか欲しくないんです。

あなたは道德観念が高くて。

あなたは潔癖だから。

俺の生き方に振り回されるのが嫌だつたんだと思います。

俺はね。昔から愛されて育ってないんです。

今でこそ天下の結城綺羅だとまやかして愛されていますが、ライブでは失神してくれる女の子だっているけど。

でもいつか利加さんが言った通り。

「結城綺羅はミステリアスじゃない」といけないんです。

勝手なイメージが先行しちゃって現実の俺は夢の狭間で取り残されています。

俺はそんなイメージを持たない俺を斎藤綺羅として見てくれた利加さんに惚れたんです。

まあ利加さん男だから？

勝手なイメージなんか持たないかもしれないけど。

でも俺は嬉しかったんだ。

単純でしょ？

俺があなたを好きだっていう理由って。

多分利加さんはそんなイメージ持たないで接するのは僕以外にもいっぱいいるって言うだろうけど。

でもね。30手前で男で。

そんな人いないって俺は言いきれますよ？

そしていつか俺は言ったと思うけど。

俺たちのライブは日系2世が多いから。

キスするのはあいさつみたいなもの。

だから俺はキスが嫌いで。

自分からは絶対にドラマでも何でもキスしたことなんか無い。

あなたにだけなんだ。

キスしたいって思うのは。

…利加さんがもし。

もし仮にこの手紙を読んで。

返事を書いてやるうって気持ちになったら。

俺は会いに行きます。

ずっと待ってるから。

俺悪いけど粘り強いから多分10年でも20年でも待つつもりでいるから。

あなたが消えたことで俺はあなたにますます時間を捧げます。

それじゃあ。また。

斎藤綺羅

俺は書き終えて。

ため息をついた。

シャーペン持つ手は震えて汗びっしょりで。  
こんなにも愛しい。

そして俺は利加さんに誓ったんだ。  
利加さんがもし俺に連絡してくれることがあったら。  
俺は恥じないように胸張って利加さんを好きだと言えるように。

マンションにはもう誰も呼ばなかった。  
考えてみればデビュー以来他人がいなかったことのないこの部屋に。  
初めて一人で夜を過ごしたんだ。

俺はさびしがり屋だから。  
テレビがついてないと眠れないけど。  
利加さんはさびしがり屋だけど。  
雑音が嫌だからと寝を決め込む。

ねえ。利加さん。

あなたに俺の気持ち届くかな？

…届いたら嬉しいな。

ガキの頃に思った気持ちがよみがえった感じだった。

## 手紙に込めた思い 2

「その後どう？」

和久田に聞かれた。

「…どうって。」

「綺羅さん何らかの手段打ったんでしょ？」

俺は不思議だった。

和久田は確かに俺を好きで、  
だけど淳也の嫁になった。

そして利加さんを嫌ってたくせに。

俺を助けてくれるだなんて。

「…なあ。和久田。」

何で利加さんの住所教えてくれたんだ？

お前利加さんのこと嫌ってて。

確かお前利加さんに直接俺に近づかないでって言ったんだろ？」

「…だって結城綺羅が元気ないと淳也も水城さんも迷惑被るから。

私委託社員だから結構情報網あるんだよ。

多分ここ斎藤エージェンシーよりはずっと。」

俺はそれを聞いて。

「…サンキュな。和久田。」

そう言えたんだ。

それは利加さんに会った時恥をかかないための最低限のルールだっ

た。

ちゃんとお礼を言う。

ちゃんと悪かったら謝る。

時間は守る。

相手に嫌な思いをさせない。

利加さんが口癖のように言ってたことだった。

和久田は俺の言葉を聞いて。

思わず噴き出した。

「…どうしたの？天下の結城綺羅がそんな普通の人が出ることをするなんて。」

「…少しね。思ったんだ。」

利加さんが言ってたこと嘘じゃなかったって気付いたんだ。」

「…へえ？」

和久田は目を細めて。

「…私利加さん嫌いだったけど結城綺羅を見てるとあながちあの人  
のやり方も間違ってたなかったんだなって気づいたんだよね。」

だって淳也も言ってたけど結城綺羅は利加さんに会ってから丸く  
なっただって。

私は少ししか知らないけどきつとそうなんだろうって綺羅さん見  
てると判るよ。」

その時淳也が楽屋に帰ってきてきて。

一通の手紙を携えて来たんだ。

「綺羅。利加さんから。」

それは一通の白い封書だった。

結城綺羅さま。 R u c y p h e r のみなさま。

お元気ですか？

テレビではよく拝見するので何だかこの挨拶もおかしいなあと思いつながらこの手紙を書いています。

そういえば僕がいた時の企画がやっと発表されるそうですね。素直におめでとございませうと言いたいです。

今度は映画ですか？

何か地球の運命を担う人を演じるそうで綺羅さんなら似合うだろうなって僕は勝手に思ってるんですけど。

僕は先月から聾学校の講師に採用されました。

点字は昔やったことがあったし点字を打つ機械はもともと持っていたので。

後は職だけだなあと思ってたら丁度空きがあったらしくて。お声をかけてもらいました。

丁度僕が結城綺羅さんのマネージャーを仰せつかった時みたいに期間限定の半年ですが。

それでも僕は嬉しかったです。

テレビ業界はきつとやる気が存分にある方には本当に華やかで美味しい職業だと思えますが僕には向いてないことがこの頃ようやく判りました。

ってか気づくの遅すぎだと斎藤さんに怒られそうですけど。

皆さんはきつと元気にしてらっしゃることでしょうね。

僕はこの町で頑張って生きていくつもりです。

皆さんとは業界が違いますが成功を祈ってます。

利加譲

俺はそれを読んで。

頭に來たんだ。

俺が聞きたかったこと一切無視したその内容に頭に來て。

「綺羅！……どこに行くんだ！……！」

楽屋を飛び出したんだ。

## 解除 1

俺はタクシーを止めて。

利加さんが行ったという催眠療法所に行き先を示したんだ。

俺は自慢じゃないけど活字を記憶するのは人一倍長けてる。

だからセリフ覚えも難なくこなす。

じゃないときつと俺はこのマルチタレントはやってないはずだから。

俺は利加さんがこの間ポロツと落とした領収書に書いてあった住所を覚えてたんだ。

利加さんは純粹で。

利加さんは穢れを知らなくて。

利加さんはあの誰も恐れない勇氣を持った人だから。

ただあの手紙を読んで俺が感じたのは。

催眠療法の所為で利加さんの個性はもう何も残ってないってことだった。

俺が好きな利加さんを返してほしって思ったから。

結構遠い距離のその催眠療法所は綺麗だった。

利加さんは合法だと言ってたけど。

俺からしてみれば催眠で人の性格まで消しやがった悪魔にしか思えなかった。

例え利加さんが望んだとしても。  
利加さんの良いところを全部消して何が楽しい？

俺が乗り込んでいくと。

先生は待ってたように俺を見たんだ。

「…あなたが結城綺羅さんですね。」

俺は真正面にいた人を見たんだ。

## 解除 2

その先生は背が高く若い男の先生だった。

俺はロン毛のいかにも怪しい仙人風の先生を想像してたから意外でびっくりしたんだ。

「…斎藤綺羅です。」

ほら。こんなところにも利加さんがしつこく言ってた礼儀が表れる。ね。利加さんのやり方は嘘じゃなかったんだ。

「うん。テレビで良く拝見します。」

結城綺羅さん。利加さんの担当医の臯月です。」

「は？」

俺が聞き返すと困った表情を浮かべて。

「だから臯月です。さっきって名字なんですけど？」

「ああ。すみません。」

そういえば利加さんの時も俺は聞き返したっけ。そう思いだした。

「…綺羅さんでよろしいですか？お呼びするのは？」  
俺が頷くと。

臯月は目を細めた。

「…ここはあくまで研究所なので。」

僕も医者ってわけじゃなくて。

担当医とは言いますが本当は心理療法士みたいなもんです。」

「…カウンセラーってことですか？」

「そうですね。それに近いです。」

「…利加さんにかけて催眠を解いてください!!」  
俺は縋るように言ったんだ。

「…でもよくここが判りましたね？」

結城綺羅さん。

利加さんが言ってたんです。

綺羅さんには内緒で来たって。

すっごい思いつめた表情で。

苦しいって言ってました。」

そこで俺は端と気づく。

何でこの人俺を見てすぐに利加さんと結びついたんだ？って。

「…何で先生。」

俺を一目見て利加さんと結びつけることが出来たんです？」

皐月は目を細めて。

「…実はね。利加さんを催眠療法した時にいろいろ聞いたんです。

もちろん利加さん自身は何も知りません。」

「…あんたはそれを俺に言って良いと思ってるのか？」

俺はちよつと皐月の良識に疑問を持ったものだから。

語尾を強め聞いたんだ。

「…あなたは他人なんかどうでも良くて自分だけが幸せならそれで

いい人間ではなかったんですか？」

俺は息をのむ。

「…確かに。」

俺は続ける。

「でもそれは利加さんに会うまでで。

利加さんに会ったら利加さん以外の人間でさえも俺は傷つけたくないって思えるようになったんだ!!」

「…綺羅さんいくつですっけ？」

いきなり振られた年齢の疑問に俺はついていけず。

ただど無視しちやいけないと俺の中の利加さんが培ってくれた良識が答えた。

「二十歳になったばかりです。」

「…そうですか。」

皐月は腕を組んで。

「…僕がね。催眠かけるとき色々聞かないといけないんですよ。

カウンセラーと同じだから何で対象者が苦しんでるのかわからないといけないんです。

それにこれは僕的にはオフレコで言ってるつもりです。」

俺は視線を上げた。

「…利加さんはね。聞いたことあるかもしれないですけど片親で。」

「ああ。母親を深く愛してたって聞きました。」

「歪みはね。そこから来たんだと僕は思ってます。」

利加さんは父親を知らないから世の男に父親の面影探すんですよ。

「

「…それは俺にもってことですか？」

俺が問うと臯月は頷く。

「…けどなまじ利加さん自身が精神的に強いから依存できる人は  
いなくて。」

僕は利加さんの勇氣には感服します。

生体間移植だって誤認逮捕だってどれだけ辛かったか判りません。  
その利加さんが唯一あなたにだけ心乱したんだ。

苦しくて辛くて。でも傍にいたくて。

だけどあなたの邪魔になるだけでしかない思いを封印しないとい  
けないって利加さんは言っていました。

…きっかけはあなたと他の女の子がキスしてた現場みたいですよ？  
あなたの誕生日に財布を買ったんですって。

きっとあなたには似合わないだろうから渡せなくて良かったと言  
っていましたよ。

痛々しい綺麗な笑顔で。」

俺は鈍器で頭を殴られた感じがした。

## 不可侵 1

「利加さんはあなたに父親の面影を探してたから。あなたに好意を持ってあなたに抱きしめられたくて。

でもそれは禁忌だから。

実の血縁なら近親相姦になりかねないから。

だから利加さんはあなたの事を「不可侵だ」と表現したんです。」

「…不可侵？」

「絶対侵してはならない場所とか人とか。

言い方を変えれば聖域とか？

今流行りでしょ？」

「…聖域？」

「まあ僕から言わせてみればあなたはどこが不可侵なのか理解に苦しむけど。」

利加さんからしてみればそうなんですよ。」

「…臯月さん。俺はどうすればいいんですか？

俺は利加さんが好きです。

だから利加さんの催眠解いてくださいよ。」

俺は縊ったんだ。

情けなかったけど。

涙があふれて。

利加さんを決定的に傷つけたのは自分だと判って。

あのよそよそしい手紙で腹を立てたのも俺が。

自分が利加さんを好きだから。

ただそれだけだったんだ。

あるとき。別れる前に利加さんは包丁を持ち出して俺を威嚇した。

縋るような眼差しで俺を見るくせに包丁を持って来ないでっ！！と自分に突き立てようとした。

「…利加さんのフォルム見ます？」  
俺が流した涙で。

皐月は言葉を濁した。

「えっ？」

「…利加さんがここにきて催眠受けた時のフォルム。」「フィルムじゃないんですか？」

涙でびしょびしょの顔で俺は皐月を見た。

「…音声は無いんです。」

ただ表情が判るだけですけど。」

俺が頷くと皐月はカメラみたいなのを壁に向けた。

そしたら。

何と等身大の利加さんが現れたんだ。

「こつちに僕がいて。」

皐月は説明をする。

「利加さんはここに立ってて。」

僕が催眠をかけると利加さんの表情を見ててください。」

触れない利加さんでも俺は愛しいと思って。

「利加さん!!」  
思わず名前を呼んだ。

利加さんの表情は安定してたんだ。  
いつもの静謐な表情でいつ催眠にかかったか判らないほどだった。

俺は臯月を見て。

「…利加さん本当に催眠にかかったんですか？」  
そう聞いたんだ。

臯月は微笑んで。

「…多分失敗してます。  
利加さんは催眠になんかかかってません。  
僕は初めてかからない人を見たからフォームを研究材料として撮  
つといたんです。」

「…ってことは？」  
「…だから。あなたは迷わず利加さんに会いに行ったらいいって僕  
は思いますよ？」

催眠なんかで人の心は操れません。  
せいぜい思い込みで何かは制御できることはあると思いますけど  
「？」

「…先生がそんなこと言っても良いんですか？」

「…うちはだから儲からないんですよ。残念ながら。」

俺は臯月を好きになった。

医者って軽蔑してたのに。

「あと今催眠かかってないってハッキリしたんでお金もお返しします。」

利加さんに返してください。

よろしく。」

俺はそう言われて背中を押された。

何だか力が持てた気がしたんだ。

## 不可侵 2

俺は不思議と。

ホントに不思議と利加さんを好きだって自覚したとき。  
悩まなかったんだ。

ホントは自分はヤバいんじゃないかとか。

同性相手に頭おかしいんじゃないかとか。

色々同性を好きになった人は言うらしいけど。

俺にとって利加さんの存在そのものが「不可侵」だったから。

侵したい。

抱きたい。

キスしたい。

だけど出来なかった。

それは多分。

好きすぎて。

好きすぎて狂いそうだったよ。

だって夢に出るんだ。

利加さんは相変わらずちゃんとした格好で。

俺を見て若干微笑んだ。

命かけて俺を救ってくれたのも利加さんだけで。

俺はあのときだって後悔したんだ。  
手遅れになったらどうしよう。

利加さんが死んじゃったら俺はどうやって生きていけばいいかって。

きっとそうなんだ。

友達の好き。

身内の好き。

傍にいてほしいの好き。

性的感情を持った好き。

俺は利加さんが嫌がるなら。

何にもしないでいいって誓った。

ただ傍にいてくれれば頑張れる。

携帯が鳴った。

「はい。綺羅です。」

出ると翼だった。

「翼だけど。」

綺羅今どこにいる？」

「…利加さんがかかったクリニックの前だけど。」

「今から利加さんちに行くところ。」

「…どうだった？」

「…ってか背中押してくれたんだ。先生が。」

「…へえ？おめでとう。」

「翼？どうかしたのか？」

「…いや。打ち合わせをどうするかと思って。」

「？淳也たちは？」

「…淳也たち何か揉め出して俺は外れてお前に電話かけたところなんだ。」

「…何で揉め出したんだ？」

「淳也が利加さんのマネージャー復帰押したら和久田がキレて。」

後は泥じあいだ。」

「…翼。俺そっち戻るわ。」

「いや。でも…綺羅は今日ホントは午後オフだし。」

「…でも手に負えないから翼は俺に聞いてきたんじゃないのか？」

俺が電話口にそう言ったら。

翼が少し笑った気がした。

「…綺羅利加さん好きになってから変わったよな。」

前なら俺が何とかしろって怒鳴ってそれで終わりだったじゃん？」

「…ごめんな。すぐ戻るから。」

俺は急いでタクシーを拾ったんだ。

きつと利加さんならこういうに違いない。

「僕のことは良いから早く行ってあげてください。」

人が苦しんだるときに助けてあげる。

自分を最優先しない。

全部全部利加さんが残したものだ。た。

### 不可侵 3

楽屋にも戻ると楽屋の奥から和久田の金切り声が響いていた。

「…綺羅。」

翼が俺を見た。

「はいはいはい。なにしてるんすか？」

和久田さんも淳也も。」

俺は無理やり奥へ割って入ったんだ。

和久田は目を腫らしていた。

「何やってるんだ？淳也は。」

「だって酷いんだよ。淳也。」

泣き腫らした目で和久田が俺に言う。

「いつつもいつつも私と利加さん比べて。」

仕事はそれは私は出来ないかも知れないけど私なりに一生懸命なのに！！

それに利加さん復帰に向けて私は邪魔だって言うし！！」

「おいおい。淳也。」

俺がたまりかねて一言も発しない淳也に言う。

「だってこいつお腹にガキ出来たのに仕事辞めないって言い張るんだぜ？」

淳也は大声で言ったんだ。

「…何？2世が出来たの？」

俺が言っていると和久田は頷いた。

「だって私。利加さんに淳也を取られたくないだけなんだって。」  
和久田はトーンを落として言ったんだ。

「だって淳也家でも利加さん利加さんって比べるんだもん。  
いい加減私も参るよ。  
焼き餅焼きたくなるよ。」

そう言っただけはしくしく泣き出した。

「お~~~~い。淳也。」

「お前どうにかしろよ。」  
俺は半ば呆れて。  
だけど。

「でも淳也。やったじゃん。」

「2世誕生って。」

俺は心からそう思ったんだ。  
そして。

「なあ。和久田さん。」

俺はあんたが戻ってきたって言うならあんたの産休明けてから  
来ても良いって思ってるよ?」  
そう言ったんだ。

きつと利加さんならそう言つに違いないから。

そう言つた俺を翼と淳也は驚いた表情で見たんだ。

「つてか綺羅。熱でもある？」

「失礼な。俺は元々物分かり良いんだよ。」

「嘘嘘。前なら絶対和久田には辞めろつて怒鳴つて。

俺にはR u c y p h e r 脱退迫るつて。」

「そうか？もしそうだとしたら利加さんのお陰だな。」

後ろから翼が言った。

「利加さんの教育の賜物つてやつ？」

「…かもな。」

俺はそれから。

利加さんの家に向かつたんだ。

住所を片手に迎えに。

あの人はきつと帰つてくるつて信じてるから。

## 再会 1

時間は丁度5時回ったところで。  
きつと学校から出てくるだろうと思って。

俺は盲学校の前に立っていた。

住所からしてここ以外考えられないと思ったその学校は当たり前だ  
けど目が見えない人ばかりだった。

「じゃあ気をつけて。」

手を振る人が見えて。

それがすぐに利加さんだと判ったんだ。

俺は利加さんの視界に入らないようにその様子を見てたんだ。

先生も意外に似合ってるんだなって。

俺の感想はそうだった。

だっていつもスーツ着て滅多に第1ボタンすら開けない利加さんな  
のに。

先生ってなったら普通のシャツ着てボタンは第2まで開けっぱなし  
だった。

手を振って。

生徒1人1人に声をかける。

利加さんは優しい笑顔を向ける。

俺には向けたことのない笑顔だった。

俺は何だか悔しくて。

生徒の波があらかた外へ出たとたん。

利加さんに近づいたんだ。

「久し振り。利加さん。」

俺の声に利加さんは体に力が入ったみたいだった。

「……。」

無視のパターンか。

俺はそう思って。

逃げようとした利加さんを寸でのところで捕まえたんだ。

耳元に口を寄せて。

言っただ。

「…無視しても無駄だよ。」

俺は今度こそあなたを捕まえて放すつもりは無いから。  
それでも利加さんは答えなかった。

俺は焦れて。

「…今日はあなたの家に泊めてもらうつもりだから。  
早く鞆持って来いよ。」

俺はここで待ってるから。

…俺を撒こうとしても無駄だし？  
あなたの行き先も判ってるから。」

俺は全部利加さんがやるであろう手を封じてやった。

我ながら俺ってば鬼畜とか思ったけどだって仕方ないじゃん？  
利加さんが悪いんだ。

利加さんは観念したかのように自分のカバンを持ってきた。  
そして。

「…僕の家でいいんですね。」  
そう言ったんだ。

俺は利加さんの肩に手を回して。  
さながら絡んでるふうを装った。

だって胸がドキドキして。  
自分の鼓動がうるさくて。

…泣きそうだったから。

この人をこんなにも好きで。  
愛していて。  
愛しくて。

「…ここが僕の家です。」

「…あんた。ここは。」

「…そうですね。僕結局引越さなかったんです。連れてこられたのは。」

以前の利加さんのアパートだったんだ。

「だけど住所が。」

「ああ。住所は区画整理で最近変わったんですよ。」

鍵を開けて。

利加さんが俺を促す。

「…どうぞ？何もありませんけど。」

そう言っただけで利加さんも靴を脱いだ。

電気をつけて。

利加さんは。

「…なんか飲みますか？」

そう言っただけだ。

俺は利加さんに近づいて。

抱きしめた。

我慢できなかった。

「ちょっと。なんですか！！」

利加さんは困惑気味の声を出して。

俺の腕の中で暴れた。

俺はそれを楽に封じて。

言っただ。

「…利加さんが催眠療法受けたところに俺行って来たんだ。」

「えっ？」

「お金返すつてあなたの主治医から預かってきた。」

俺がそう言つと。

「ちよつと綺羅さん。」

腕が痛いんですけど。」

そう言つたから俺は無視して。

首元に唇を寄せて。

だつて明らかに触れられたくない時の利加さんの反応だつたから。

「あんた。催眠失敗だつてさ。」

俺は意地悪く告げたんだ。

そして利加さんの首元に口づけたんだ。

「ひゃっ!!!やめっ!!!」

利加さんは本当に感度が良い。

びっくりするぐらいに反応が良すぎて。

クルものがある。

「…だから言つてんじゃん？」

あなたの催眠は失敗してるからまだ俺のこと好きで好きでたまらないはずだつて。」

根拠は無かつたけど俺はそう決めつけたんだ。

だつて俺がこんなに恋い焦がれてるんだから。

利加さんは真つ赤だつた。

首筋から顔から真っ赤だった。

俺は利加さんの首筋から顔を上げて  
利加さんを見つめた。

ああ。夢にまで見た愛しい人が目の前にいるって。  
そう思ったんだ。

「…降参です。」  
小さな声で利加さんがそう言ったの俺は聞き逃さなかったんだ。

## 再会 2

もう何だっつてこんなに利加さんっつてば愛しいんだろう？  
いつまでも抱きしめていたって思うんだ。

「…お仕事は良いんですか？」

利加さんをやっとの思いで俺は放して。  
そしたら普通に話してくれる利加さんが戻って来たんだ。

「ん？今日は俺だけオフなの。」

「へえ？そんなことも最近はあるんですか？」  
利加さんはお茶を淹れながら俺を見る。

「っつていうか。」

最近結構バラバラなんだ。仕事自体が。

まだ R u c y p h e r は健在だしライブだってあるけど。

やっぱり仕事の幅って言うの？

それを広げるためには3人で固まってるのにもデメリットも出てくるし。」

「へえ？綺羅さんもそんな考えるようになったんだ？」

クスクス笑う利加さんに俺はそんなに長く離れてたつもりは無いのにと思った。

思えば半年前にはもう利加さんはいなくなってたから。

「そうそう。利加さんに一つ報告があるんだ。」

「何ですか？」

俺にお茶を渡しながら利加さんは微笑んだ。

「淳也と和久田。くつついたのは利加さんのおかげなんだけど。  
2世がねもうすぐ生まれるんだ。」  
「え？本当ですか？」

利加さんは自分の事のように喜んで。

「…きつと可愛いでしょうね？」

和久田さん美人さんだし。」

お茶を飲みながらそう言う利加さんは俺を見つめて。

「…あの。」

口を開いたんだ。

「…あの。僕は何度も言いますが何もできないですけどそれでもいいんですか？」

その表情は痛々しくて。

俺はまた立ちあがって利加さんに寄って行ったんだ。

「…キスもしないって言ったよな？」

俺が聞くと。

「はい。」

そう言った。

「俺ね。あんたに仕事に復帰してもらいたいんだ。

今は傍にいてくれたらいいって思ってるけど？」

そう伝えると。

利加さんが初めて。

本当に初めて涙を流したんだ。

それは俺が泣いてたから。

俺の本気が伝わった証拠だった。

「綺羅さんズルイです。」

泣きながら利加さんはそう言った。



利加さんに泣かれるまで放せなかった。

「もうヤダ。」

涙目で俺を見上げる利加さんに更に煽られて。第2ボタンまでシャツを開けてる利加さんに。耳元で囁いた。

「…コレ。止めないと襲うよ?。」

利加さんは真っ赤になってシャツのボタンを止める。

「…ううう。酷いです。」

涙は止まらない。

マジその辺の女より純粹で。

そのしぐささえ愛しくて。

それから俺と利加さんは離れていた間の話をしたんだ。

利加さんが言ってくれた。

俺をスクリーンで見て。

元気だったら幸せだったって。

そしてあれだけ多かったスキャンダルが無いことにもびっくりしてた。

俺は利加さんをずっと思ってた。

ずっとさびしかったって伝えたんだ。

俺には利加さんを抱きたい気持ちはあるんだけど。  
俺も少しは大人になったってことか。

利加さんが傍にいてくれるだけで何だかそれはよくなったんだ。

淳也が言うには。

不能になったんじゃないの?とか。

でもちゃんと利加さん抱きたいって思ったら結構抑えるの大変だし?

利加さんが怯えるからそんなところは微塵も見せないつもりだけど。

利加さんの臨時職員の期間が終わってから。

利加さんは俺たちのマネージャー業に復帰した。

もちろん専属は俺で。

Rucypherのマネージャーは付随するものだけ。

それを淳也も翼も喜んで。

淳也と翼は俺が目を離れたすきに利加さん押し倒してキスしたって  
言ってた。(怒)

あいつら。コロス(怒)

俺は鬼畜でサドだから。

そのあと利加さん捕まえて。

泣かすほどキスしたんだ。

利加さんにとってはきっと災難以外のなにものでもないと思うけど。

「あんだ隙がありすぎなんだよ!!」

俺は完璧焼き餅でそう言ったんだ。

## 太陽は沈まない 2

利加さん復帰第一作目は。

「太陽は沈まない」という企画のドラマだった。

2時間枠のドラマをたかがマネージャーが仕事として取ってくるのは難しいんだけど。

利加さんは仕事が出来るから和久田も脱帽の速さで決めてきた。

それはまず2時間枠のドラマの調整の会議に加わることから始まり。その会議で発言をしてうちの斎藤エージェンシーではと売り込みをして。

ぜひ結城綺羅でと話をつけるんだ。

恋愛物は数あれど事実のものは少ない。

結城綺羅というか低迷を始めてるRucypherに仕事を与えた形になったんだ。

「何？このDって？」

企画書を見て淳也が呟いた。

「ああ。DESTINYのDらしいですよ。」

利加さんが答える。

「もつじやあ居るじゃん。DESTINYは〜」。翼が駄々をこねる。

「ってかオフレコなんですけど。」

利加さんが言った。

「DESTINYの連中ライブでスケジュール的に無理なんです。て。」

だからうちに回ってきたんですって。」

「何なの？結城綺羅が良いわけじゃないわけ？」

俺がむくれると。

「だって綺羅さん元来タラシだから多分無理なんじゃないですか？」  
企画書を見ながら利加さんがそんな可愛くないこと言うから。  
俺はムキになつて。

「ふ〜んだ。利加さんつてば酷い。」

俺利加さん一筋なのに〜。」「  
泣き真似をする。

そして利加さんににじり寄ってみたら叩かれた。

「セクハラしてる場合じゃないでしょう!!」

容赦ない一撃で俺は商売道具の顔をしたたか叩かれ。

「うっうっう(泣)」「

唸るしかなかった。

「んで僕としては今回は主役翼さんが良いと思つんですよ？」  
確かに利加さんがそう言ったんだ。

「はあ〜？」

3人声合わせちったよ。

「何でよりにもよつて翼？」

淳也も素っ頓狂な声を出す。

「だって背が高いつて描写があつて。  
綺羅さんは僕より少し高いだけだし。  
淳也さんだつてそんな高くないし。  
高いつて言つたら翼さんでしょ?」  
平然と言つ利加さんに俺は面白くなくて。

「つてか面白いと思うんですけど。  
僕は翼さん主演でドラマやつてみた方が良いと思うんですよ。  
綺羅さんに隠れちゃつて翼さんの良さがバンドでも出ないし。」  
当の翼は。

歡喜の笑顔で。

「やっぱ利加さんだな。話判る〜。」  
などと喜んでて。

俺と淳也はひたすら面白くなくて。  
淳也が口を開いたんだ。

「…じゃあ利加さん。俺は?  
俺はどの役なわけ?」

利加さんはそう言われて。

脚本の友人Rつて言うのを示したんだ。

「Rつて何よ?」

「英語の Raiseらしいですよ?」

「調達者とか何かそんなこと言つてらっしゃいました。」

面白くない俺は。

利加さんの後ろに回って抱きしめて。

「…じゃあ俺は？」  
聞いてみた。

「…今回は綺羅さんナシですって。  
出番。」

大人しく抱きしめられたままだからおかしいなあとは思ってたけど。

利加さんは平然とそう言ったんだ。  
だから俺は声を荒げたんだ。

「ちよつと結城綺羅が出ないってどういうことだよ。」

「…実はね。僕が提案したんです。」

利加さんは俺の腕の中でこつちを向いて。

「はあ？」

「だから僕がね。提案したんです。  
いつか僕言いましたよね。」

結城綺羅はミステリアスじゃないとって。

あなたはこの頃マスコミに出過ぎです。

僕としてはあんまりテレビに出ない方が人気上がるんじゃない  
かって思ってますけど。

例えば翼さんの演技指導をやるとか。」

可愛くない言葉を紡ぐ口をふさいでやりたくなっただけど。

「…綺羅さんのバンドでもあるけど翼さんや淳也さんのバンドでも  
あるんですよ？」

R u c y p h e r は。

僕はみんな均等にテレビに出て認知度を上げるべきだと思っ  
す。」

あまりに真剣な利加さんに俺は珍しく反論できなくて。

それすら惚れた弱みかとか。

思ったりして。

淳也たちは本当に喜んでたし。

まあいいかなんて思ったりして。

### 太陽は沈まない 3

翼と淳也がメイクの朱実さんに呼ばれて、  
楽屋を出て行ったら。

腕の中で利加さんがため息をついたんだ。  
大人しく俺に抱きしめられてる利加さんに俺は少し違和感を感じて  
ただけ。  
話してるうちに判ったんだ。

俺の胸に額を当てて。  
利加さんは話し始めた。

「…実はね。僕今日の会議でキレちゃったんですよ。」  
ため息交じりに言うんだ。

「…どうして？」  
俺は促した。

「だって斎藤エージェンシーは結城綺羅さえいなければ弱小だとか  
ホントムカついちゃって。」

「…僕がムカついてても仕方ないんですけど。  
しかも極めつけ僕みたいな女男がマネージャーをやってる結城綺  
羅も近々ヤバいとか何とか。」

そして結城綺羅に僕がどうやって取り入ったかって聞いてきて。  
あれは完璧言葉のセクハラですよ！！」

俺は何と声をかけたらいいか判らなくて。

「それで？」

当たり障りのない促し方をしたんだ。

「…それでドラマの話になって。

ホントはDESTEINY向けに書き下ろした内容だったらしくて、それでも初夏に2時間枠作っちゃったからどうする？って話になっ  
て。

「うちは結城綺羅を使うなら却下だと言われて。

だったらうちの水城翼出しますよ！！！！って大見栄切っちゃって、  
うちは結城綺羅だけじゃありません！！！！ってキレちゃって。

それで視聴率もとってみせるって言っちゃって…。」

俺はそれを聞いて利加さんらしいなあってなんか妙に感動しちゃっ  
たんだ。

「あんだ可愛すぎ！！」

俺は利加さんをギュウウウって抱きしめたんだ。

「俺あんだの人の事には超真剣な仕事ぶりも大好きだもん。

判った。俺は今回は裏方に回って翼と淳也の演技の指導やるよ。」  
ホント心から言えたんだ。

「…すみません。綺羅さんにもホントは出てほしかったし。」

小さい声で利加さんは謝罪を述べた。

伝えること。

話すこと。

秘密を抱かないこと。

上手くいく秘訣だった。

俺は利加さんの首元にキスを落として。

「…企画書見せて？」

そう言ったんだ。

「はい。」

利加さんは分厚い企画書を俺に渡した。

## 白夜を探して 1

結城綺羅がつて他の企画の奴が恐れる理由は2個あって。

1個目は俺が斎藤エージェンシーの息子だったこと。

もう1個は俺つてば才能があるわけよ。

自分で言うのもなんだけどほとんどNG出さないし？

演技は誰にも習つてないけど超一流。

誰にも本性は明かさない。

唯一明かしたのは淳也たちと利加さんだけだった。

それも絶対に裏切らないつて保証がないと俺は容赦なく切るから。  
だから恐れられてる。

実力が無い奴が言ってるのとは訳が違い。

斎藤エージェンシーが本気になれば弱小プロダクションなんか一気に潰してみせる。

それぐらいの覚悟を親父に叩き込まれたんだ。

俺がこの業界を選ぶつて決めたときに。

しばらくは斎藤の息子だつていうのも伏せておけと言われたし。

俺も親の力でのし上がったとか言われなくなかったから。

だからちゃんと言うつことを聞いた。

そんな中で唯一俺が勝てなかったのが利加さんで。

脆くて力ないくせに懸命に俺を見上げるその瞳に俺は心奪われたん

だ。

企画書を俺が見てると利加さんが言った。

「…その主人公イメージカラーが白なんですって。」

「へえ？」

「…僕はそれを見たときに何か翼さんだって思ったんです。

直感なんですけど。」

「…翼が白ねえ？」

「…ってか名前の所為かも知れないんですけど。」

翼さんて白って感じ僕の中ではするんですよ。」

俺は少し面白くなって。

利加さんの肩に腕をまわした。

「ふ〜ん？じゃあ利加さん俺は？

俺のイメージは？」

「…黒。」

黒ってか？

「だって綺羅さん腹黒いって言うか。

ヤラシイっていうか…。」

そこでヤバいと思ったのか利加さんは盛大に肩をすくめて。

「たんま。嘘です！！ヤラシクないです！！」

慌てふためく。

きっと俺の中の地雷を踏んだか思ってるんじゃないかと思っただけど。

「やらしい事してやるうか? (怒)」  
「…遠慮します。」

全く可愛くない。(怒)

俺は嫌がる利加さんを無理やり上を向かせてキスを落としたり。  
俺のキスで力が抜ける利加さんに俺は満足して。

「じゃあ淳也は?」

「…えっ?」

「だから淳也のイメージカラーは?」

「…緑って感じ?」

何か雄大な気がするんですね。」

「…それで腹黒い俺は何すればいいの?」

俺は悔しくて。

だって半分当たってるし。

「ごめんなさいってば。」

許してください。失言でした。」

利加さんは俺を見上げて。

めっちゃ可愛いんだもんな。

ホント俺ってば利加さんには甘い。

「…ってか冒険家が白夜を探すってのが大まかの物語なんです。

その冒険家が翼さんでサポートが淳也さんなんです。」

「…ふっふん。」

俺が気のない返事をするよ、

「…冒険家だなんて綺羅さんのイメージじゃないでしょ?」

しかも愛した人は日本においてくるんですよ。

綺羅さんは女グセ悪いから絶対行つた先で誰かと愛を育むでしょう？」

言われて俺は黙り込む。

だつて当たつてるし。

でも今は利加さん一筋だし。

「俺男グセは悪くないから利加さん一筋のつもりだけど？」

俺は面白くなくて。

全部利加さんには腹黒さもばれてるしなあと肩を落とした。

「：女グセ悪いのは否定しないんですね？」

利加さんはそう言った。

「だつて俺女恋しくなるし〜。」

まあ今は利加さんいるから大丈夫だけど。」

そう言つてまた引き寄せた。

何で俺つてばHもさせてくれない男好きなんだろうとか。思うけど。

思うけどやっぱ好きなんだよな。

「まあそんなわけで演技指導お願いしますね。」

利加さんもやつと俺とのキスに慣れてきて。

キスだけは許してくれることが多くなってきた。

進歩だなとか。

慣らした甲斐があつたとか。

そんなことを思う。

白夜を探し求めて。  
冒険者は歩く。

それが今回のドラマのキャッチフレーズだった。

## 白夜を探して 2

でもたまに俺は利加さんに欲しがってほしいと思う。

だって俺ばっかキス求めて。

利加さんは静かに目を閉じる。

手は抵抗をしようとしていつも俺にあたる寸でのところで俺が止める。

「なあ。利加さん。」

俺はちよつといたずら心ですねてみようと思った。

「俺さ。我慢もちよつと限界だから利加さんのイクとこ見せてよ。」

耳元でささやくと平手が飛んできた。

「~~~~!!何言ってるんですか!!」

ホント処女みたいに可愛い反応するんだよな。利加さんって。

「だってさ。今は一緒のところにいるのに風呂だって別々だし？」

前に俺言ったよね？あんたの体見たいって。

確か賭けしなかったっけ？

あんたその時負けたと思うけど。」

実はずいぶん前にだけ俺は利加さんと賭けをした。

確かプロバスケの試合をテレビでやってて。

それを見るときあんまりにも利加さんが真剣なもんだから。

俺はつまらなくて。

どっちが勝つか賭けをした。

その時迷わず利加さんは自分が応援してるチームが勝つと豪語した

んだけど。  
結局負けて。

その時の賭けの対象が利加さんだった。俺にとっては。言ってないけど。  
言ったら絶対殴られるし無視されるし。

「賭けの代償」はその時は決めてなかったんだけどさ。

「うっうっう」

利加さんは俺にそう言われて黙り込む。

「だけど綺羅さん僕が何も与えられなくても良いって言ったし…。」

可愛くない口は可愛くない言葉を紡ぐ。

「そりゃ前はね。」

俺は利加さんを掴んで。

引き寄せた。

「初めっからあんたの体見たいって言ったら絶対あんた逃げるっしよ??」

俺が耳元でささやくと盛大に顔を真っ赤にして。

「こんなの見ても面白くないですって!!」

「そりゃ利加さんはね。そう言うけど俺は結構欲情するんだけど?」  
直接的な表現で利加さんを追いつめて。  
ってか快感。

利加さんの表情だけで俺イケるかも…。

やっぱ俺ってば鬼畜でサドみたい。

「変態!!スケベ!!鬼畜!!サド!!」

ありったけの言葉で俺を罵る利加さんはホント綺麗なんだよな。

俺は利加さんの背中に腕をまわして床に押し倒した。

「嘘!!!やだつて!!!やめて〜」

利加さんは俺の今度こそ本気の行動に本気の抵抗をし始めたんだ。

「…あの〜。お楽しみのとこ悪いんだけど。」

「何だよ!!!淳也!!!(怒)」

俺は利加さんにばっか神経が集中してて淳也たちが帰ってきたことにも気づかなかった。

利加さんはここぞとばかりに俺の力が緩んだすきに逃げだそうとしたから。

俺は利加さんのシャツをつかんで引っ張って引き寄せる。

「利加さんはまだ許さないからね。」

ありったけの力で掴んで放さない。

「…メイクが結城綺羅を呼んでるんだけど?」  
翼が後ろからそう言った。

俺は渋々利加さん掴んでた手を放して。

利加さんはきつと俺の本気が判ったと思う。  
小さく震えてた。

だけど仕方ないし？

いつかは俺だつて我慢も限界来るかもしれないし？  
現実なんだから判つてもらわなくちゃ。

「何？利加さんまた襲われ未遂？」

座り込んでた利加さんに淳也が軽く声をかけて。  
翼が抱き上げるように利加さんを立たせたから。  
俺はムカついて。

翼から利加さんを奪い取つて。

口づける。

俺のもんだと認識させる。

「…お願い。放して。」

利加さんの弱々しい声にまで俺は自分が欲情してるのを感じ。

「利加さん！！俺が戻ってくるまでに考えとけよ！！」  
そう言つて楽屋を出たんだ。

### 白夜を探して 3

利加さんがキスだけは許してくれるようになったって本当は喜ばなくちゃならないのかもしれないけど。

俺はやっぱ欲深いから。

キスしたらHもしたい。

この間までは何もしなくていいって思う好きだったけど。段々傍にいるうちに変換してきたんだ。

だって利加さんってばホントキスした後綺麗な表情するから。

それならHした後だったらどんな綺麗な表情見せてくれるんだろう？って気になるじゃん？

その日利加さんの家に帰った途端。

利加さんは速攻で逃げようとしたんだ。

「利加さん。」

俺は利加さんを呼んで。

引き寄せた。

利加さんは怯えてた。

「…判るんです。」

今日翼さんにも言われました。」

「…何を？」

「…綺麗さんにあんたは好かれてる自覚があるなら抱かせてやれば？って。」

…僕はどうしたら良いんですか？気持ちについては行かないのに。」  
利加さんは俺の腕の中でそう言った。

こつという話題に乗ってくることは利加さんはとても少ないし。  
性欲あるんだろうかって不思議になるくらい淡泊だし。  
つてかホントに男なんだろうかって俺は思うくらいだし。

男は下世話な話題が好きだと思っし。

俺はこのままじゃ抱いてしまいそうで。  
自分が怖かった。

「…じゃあ今日は仕方ないから許してあげる。」  
俺は妥協しようと思った。

「…ごめんなさい。」  
しゅんとする利加さんに俺は。

「じゃあ抱かないから触らせて？」  
「えっ？ちよっ！！！」

利加さんのシャツの上のボタンを外して。  
口づける。

「やっ！！」  
顔を真っ赤にして首筋まで真っ赤にして。  
ホント征服欲をそそる利加さんを眺めて。  
ああ。やっぱこの人を好きだなっと思う。

そして。俺はおねだりをしたんだ。  
それぐらいしてもらったっていいじゃん？

「ねえ？利加さん。」

今日は一緒に眠って？

何もしないから一緒に眠って？」

「…ヤです。綺羅さんヤラシイから。」

ほお……。抱くのやめてやったのにそんな可愛くないことこの口は言うか〜〜と思って。

「じゃあ俺マジであんた抱くよ？」

それでもいいの？」

「えっ！！それは嫌！！」

「どっちがいいの？俺にマジで抱かれるかそれとも一緒に眠るだけでいいか。」

「…自分一人で寝るのが良い。」

「それは却下！！」

ホント可愛くない言葉を吐くもんだ。

「ほらどうすんの？俺はどっちでもいいよ？」

あんた抱くなら俺はその方がいいけど？」

「うっうっう。」

利加さんはちよつと唸って。

「…が良いです。」

そう言った。消え入りそうな声で。

「何て？抱いてほしいって？」

俺が勝手に言ってみたら。

「違います！！一緒に寝る方がいいって言って！！！！」

俺はホント愛しくて。  
キスをした。  
貪るようなキス。

俺ってばホント飢えてんだなって思っ

「~~~~っ!!もう良いでしょ!!」

息も絶え絶えになった利加さんからストップがかかった。  
俺は名残惜しくて。

放したくなかったけど。

放さないと無視に入られると困るし。

利加さんは息をついて言ったんだ。

「…綺麗さんには悪いと思ってますけど。

ごめんなさい。気持ちがついて行かなくて。

でもだからって僕を窒息させる気ですか!!」

「だっ~~~~。利加さんかわいすぎだから~~~~」

「~~~~っ!!もう知りません!!」

利加さんはバスルームに入って鍵をかけてしまった。

俺はそこで初めてちよつと度が過ぎたかなって反省したんだ。

## 白夜を探して 4

「お〜い。利加さん」

俺はバスルームに立てこもった利加さんに声をかける。

「明日も早んじやないの？」

早く寝なきや。風呂入って。」

「嫌です。綺羅さんに何されるか判らないから!」

ハッキリ返ってきた。

「ほ〜〜。じゃあそこに立てこんでればいいだろ？」

俺は大声を張り上げてみた。

利加さんを素直にさせる方法はやっと学んだ。

利加さん複雑すぎるし。

だけど愛しいし。

苛めたいし泣かせたいし。

許してと請わせたいし。

はははは。やっぱり俺ってサドだわ。

でも利加さんは俺が本気で怒る声を出すと多分十中八九出てくると  
思う。

人を怒らせるのには慣れてないから。

ほら。そろそろ顔を出すから。

俺はすかさずバスルームの開いた戸に足を入れて押さえた。

んで利加さんの腕を渾身の力で引っ張って。

近くにあったベッドに倒れ込んだんだ。  
こういうときって狭い部屋はホント楽。

「利加さ〜ん。捕まえたv v v」

俺に押し倒されて利加さんは盛大に暴れて。

「酷い！！騙したんですね？」

酷いと連呼する口は唇でふさいで。

腕はねじり上げて。

泣くまで放さなかった。

ホント可愛いんだ。

涙目で見上げてくる仕草なんかホント男とは思えないし。

髪も俺が伸ばせと言ったから伸ばしてて。

前から華奢だったけど今も一回り華奢で。

腰なんかホント細くて。

胸ないのは残念だけど。

ほら。俺ってば巨乳好きだし。

首筋は利加さんの性感体だから。

盛大に暴れて。

息が切れるほどに。

俺は容赦なく首元に赤いしるしをつけた。

利加さんは俺のものだって誇示したくて。

こんな俺の好みにと真ん中に合う人間は多分ホント女でもなかなか

いないと思う。

「ちよっ！！！噛まないでください！！！」

キスマーク付けながらちよっと思ひしてみたら怒られた。

「やだよ〜。利加さんは俺のだってしるしつけてんだから。」

「なっ！！ちよっと！！！」

外から見えるでしょう！！！」

「見えないって。あんたみたいにシャツのボタンさえ開けなければ大丈夫だって。」

「…もう何言ってるんですか！！！」

止めてくださいって！！！」

息も絶え絶えの利加さんに俺は我慢するのにも一苦労だったんだけど。俺はキスマークを沢山付けることが出来た。案外幸せだった。

そして利加さんを放して。

俺はシャワーを浴びに行ったんだ。

ちよっと思冷やさないと眠れないって思ったから。

そして利加さんは俺の次に入って。

俺は上がってきた利加さんを掴んで引き寄せたんだ。

眠るには刺激が強すぎるけど。  
利加さん本格的にそろそろ眠らないと多分キレるから。

俺はそつと引き寄せて。

利加さんを抱きしめた。

利加さんの静かな寝息が聞こえて。

俺は満足だったんだ。

## 呪縛 1

「というわけで僕明日から1週間ほどいませんから。留守をよろしくお願いします。」

それはその日の朝突然だった。つてか突然ではないかもしれないんだけど。俺は自分も行けると踏んでたから。

「ちょっと。どういう意味だよ。利加さん!!」

俺が声を荒げると。

利加さんは顔を真っ赤にして。

「昨日言おうと思ってたのに!!」

あなたが放してくれなかったから僕は言えなかったんです!!」  
俺は朝っぱらから不機嫌で。

「…いつ決まったの?」

低い声で聞いたんだ。

「だから言ったでしょ?」

僕がキレて今度の仕事翼さんでやるって言ったの。

それからあなたに演技指導してもらってそこまでは話着きましたよね?」

俺が頷くと。

「それからがあるんです。

題名は「太陽が沈まない」ですけど冒険家が主人公だって僕は言っただと思いませんか?」

うんと頷く。

「…白夜をね。探しに行くんです。」

「いつか恋人連れて見に来るって約束する物語なんです。」

「…それで？」

「いや。だからそれで淳也さんと翼さんと僕で本物の白夜を見に行かないといけないんです。」

「なんかホントは僕だって行きたくないけど会議の時に大見栄切った手前やれることちゃんとやれないとなんか話にならないと思って。」

「俺はますます不機嫌になり。」

「楽屋に着いて利加さんに詰め寄ったんだ。」

「…それで何で俺は行けないわけ？」

「…たんです。」

「何？」

「…どうせ結城綺羅が出てきて視聴率稼いで結城綺羅頼みの斎藤工ージエンシーなんか怖くないって言われて僕頭に来ちゃって。」

「だから綺羅さんの助力使いたくないんです。」

「真摯な瞳で俺を見上げる利加さんに。」

「俺はやっぱり許せなくて。」

「…あんたは誰のマネージャーなんだ？」

「そう詰め寄ったんだ。」

「…綺羅さんのです。」

「…あんた抱かせてもくれないくせにそんなふうには俺を除けて決めるわけ？」

「…だってじゃあ綺羅さん素直に聞いてくれますか？」

聞いてくれないでしょ？

僕は昨日耐えたつもりですけど？

あなたがやるセクハラに。」

俺はうつと詰まるけど。

何か腑に落ちないし。

…でも怒り続けて利加さんを手放すのも痛いしなあとか。

「じゃあさ。利加さん絶対浮気しないって淳也たちに触らせないって約束できる？」

「…お言葉を返すようですけど僕はあなたの方が心配ですけど？」

女グセ悪いからきつと僕なんかいなくても大丈夫になるんじゃないですか？」

「ほおお〜。利加さん。

言うねえ？」

「…天下の結城綺羅が羽を伸ばさないわけがないって思っ！！！」

俺は可愛くない言葉を紡ぐ口をふさいで。

「…俺マジだし。」

あんたのことは絶対裏切らないし？

でもあんた帰って来たら覚悟決めるよ？

今度は途中で止めてやらないからな？」

利加さんは俺に追い込まれてへナへナと座り込んだ。

「…じゃあ明日から行っても良いんですね？」

念を押す。

「…淋しい俺は仕事に励むわ。

あんたがいない間欲求不満溜めまくっておくし。

覚悟しろよ？」

耳元で囁いた。

結城綺羅が枷になるのは俺はよくは思わないから。

こついうときに俺は結城綺羅が独り歩きしてるなって痛感する。

「…綺羅さん。浮気しないでくださいね？」

腕の中の利加さんがそう小さい声で顔を真っ赤にしながら呟いた。

もうホント可愛い。

俺は愛しくて愛しくて。

息が出来ないほどに利加さんを抱きしめたんだ。

## 呪縛 2

利加さんが淳也たちと旅立った日。  
俺はものすごく忙しかった。

つてか無理やり予定詰めたんだけど。  
だって見送りになんか行ったら絶対放したくなくなるし。  
利加さん多分キレルだろうし。

束の間の楽屋での着替えの時に。  
和久田が来たんだ。

和久田はこの間子供産んで  
チビを抱えてきた。

「…何か用？」  
俺は着替えながらヤバいなあとか思った。  
だって和久田つて一応俺を昔好きだったわけで。  
何回か寝たわけだし？  
美人だし？

「…天下の結城綺羅も随分と大人しくなっただんですね？」  
言うに事欠いて和久田はそう言った。

「…何だよ。」  
俺はわざと遠ざける。  
俺ってばやっぱ女好きだし。  
ヤバいつて。  
しかも今は淳也の嫁だし。

手なんか出したら淳也に殺され利加さんに見限られるって。

「私ね。淳也に言ったんです。」

利加さんにふらふら行ったら殺すって。」

「へえ？」

淳也と和久田のチビは可愛かった。

「だけど淳也つては利加さん好きなんですよ。」

私には無いしとやかさがあるんですって。

笑えるでしょ？

嫁より男の利加さんの方が綺麗だつて言っんですよ？」

まあなあ。和久田は美人だけどキツイし。

つて言わなくて良かったと俺は胸をなでおろした。

「だって利加さん綺麗だし？」

俺がそう言つと。

和久田は肩を落として。

「…そうなんですよねえ？」

男で綺麗だなんてずるいと思いません？」

和久田はそう言つてチビをあやす。

「…でもやっぱ綺麗だつて思うのはきつと利加さんは何も望まないからなんですよね？」

和久田はため息をつく。

「私は淳也をこの子でつなぎとめてる感じがします。」

だから私は綺麗さんに是非ともお願いしたいんですよ。」

利加さんを早くものにしちゃってくださいって。」

あまりに直接的な言い方に。  
俺は辟易して。

「…おまえなあ。

だから淳也が嫌がるんだろうが。」  
本音が出てしまった。  
「えっ？」

「だから人の所為にしないでお前が精いっぱい淳也の嫁を務めれば  
いいんじゃないの？」

淳也はお前の事好きだから結婚したんだろ？」

利加さんはこの際関係ないと思うけど？」

「…だけど。」

「…だから利加さんを淳也が話題にするのは利加さんは人のことに  
首は突っ込まないんだ。

俺の事にも無関心だからそれは面白くないけど。

利加さんは何も言わないだろ？」

俺と利加さんがどうなるうがお前に関係ないはずだけど？」

「…私利加さんといつも比べられてるんですよ？」

「だから」。奥ゆかしさを持ってって言うてんだろが！！淳也は。  
お前の個性はそれで良いかもしれないけどいちいち指図されると  
頭に来るんだろう？」

利加さんはアレしてコレしてって言わないからそれを学べって言  
ってんじゃないの？」

「…だって私には無理。」

「…利加さんは俺に何も求めないんだよ。見返りも何も期待しない。

ただ与えてくれるだけ。

俺が何か返そうとすると逃げるんだ。

それは自分には価値が無いから見返りを受けるに値しないって思ってるんだ。

和久田は見返り期待するだろ？

自分がやった以上に淳也に返してほしいって思ってるだろ？

それを止めればきつとお前元々良い女なんだから淳也だって言わなくなるって。」

「…利加さんって。」

「…利加さんは厄介だよ？ある意味。

多分俺のマナージャーなんかすぐに辞める覚悟持ってるよ。

そして俺の目の前に現れるなって言ったらもう絶対姿は見せないと思う。」

利加さんは幸せに慣れてないんだ。

あの人の懐に入ろうと思うといつも言葉を紡がなくちゃならないし。

ずっとここにいてねって言わないといけないし。

厄介だけど手放せないんだ。」

「…利加さんが女だったら結城綺羅はきつともっと所帯じみてるかも知れませんか？」

和久田が痛いところをついた。

「うるさいよ。」

お前。良いんだよ。だから利加さんは男で。」

「あゝあ。利加さんに捕らわれてる結城綺羅なんか私見たくなかつ

た。」

「…出ていけ(怒)」

俺は思う。

いつも思う。

あの超絶人のことを考える利加さんのことだから。

俺がきつと1回でも誰かと寝たらそこでこの関係は終わりにするだろうって。

俺は昔から束縛されるのが嫌いだった。

だけど今は利加さんに捕らわれてるのが心地いいと思う。

本当に。本当に。

そしてね。利加さんが行く前にある提案をしていったんだ。それは自分が体調崩してマネージャー出来なくなったとき。今までみたいに和久田と2人でやってたように新しい奴を入れるって言うんだ。

利加さんは言うんだ。

「…僕はこのままでいいとは思ってません。」

「…何が？」

「だからこのまま僕がマネージャーを続けるのって良くないんじゃないかって思うんです。」

俺はそれを聞いた時またかよっ？って思って。

「…利加さん。俺何かしたっけ？」

この頃は利加さんが泣くから品行方正にしてるつもりだけど。そう言ったんだ。

「…違いますよ。」

僕は前から思ってたんです。」

微笑みながら言うんだ。

「…僕みたいに世間知らずが1人でマネージャーやるよりは他の委託の人にも手伝ってもらった方が仕事の幅が広がるんじゃないかって常々思ってたんです。」

「…それはどういうこと言ってるわけ？」

俺は意味が判らなくて問う。

「…Rucypherをずっとやっていくつもりならもっと勉強しないといけないだろうし。」

結城綺羅だつて人気がいつまでも続けばいいですけど判らないですよ？

それなら他の人を見た経験のあるマネージャーに企画立ててもらうつても良いと思うんですけど。

僕みたいに素人じゃわからないこと多いと思うし。」

「…それは判るけど他の奴入れるとなると利加さん立場なくなるかもしれないんだよ？」

俺は利加さんに聞いてみた。

超絶人のこと考える利加さんだから自分のことは良いってきつと言うに違いないけど。

「…僕のこと大丈夫ですよ。」

俺の心配は。

「…綺羅さんが元気で仕事やってくれて僕はそれのどれかに携わることが出来ればそれだけでいいんです。」

的中だった。

「そのどれかさえ新しい奴に奪われても？」

俺は厳しいようだけど聞いたんだ。

利加さんが思ってることが判らないから。

「…実力社会だからそれは仕方ないんじゃないですか？

僕が実力が無かったって判るだけで。」

「…利加さん？俺から離れたいの？」

利加さんは俺を見つめて。

首を振る。

「だけどね。綺羅さん。」

僕があなたの仕事の妨げになるかもしれないってこの頃思うんですよ。

今回の仕事だってホントはあなたが主演だったかもしれないのに僕が潰した挙げ句大見栄切っちゃってホント悪いと思ってるんですよ。」

利加さんの本心は判りにくいけど。たまに語るその唇は真実だった。

「あのさ。利加さん。

俺の人气が落ちたってそれなら自分の所為ってことになるんじゃないの？

利加さんの原理でいったらそうでしょう？

だったらそんなの気にしないでいいって。

もしどうしてもって言うなら Rucypher にだけ新しい人入れようか？」

利加さんが頷いて。

俺は利加さんを引き寄せたんだ。

この腕の中だけでも安心してほしいって。

本気で思ったんだ。

それで今日その新しいマネージャー候補が来る予定なんだ。

## 新顔 2

「すみません。結城綺羅さんでしょうか？」

楽屋の外から声がして。

俺が楽屋の戸を開けると。

立ってたのは以前オーディションで一緒だった奴だった。

「えっとマネージャーの利加？さんとかいう人がRucypherの付き人公募してるの見て。

来たんですけど。」

「お前…。えつと…。」

「そつだ！！澄香すみかって確か珍しい名字の。」

「はい。澄香です。」

「でかいくせにえらい名前だって俺思ってたってマジで！！」

でもお前。確かRucypherのオーディションにいてバンドやるんじゃないかっつたっけ？」

「ああ。ちよつと事情が変わっちゃって夢見てる場合でもなくなつたもんだから。」

「それなら一番夢に近い場所で仕事するのが一番かなって思って。他のメンバーはどこです？」と澄香は言った。

「…お前マネージャー業なんか出来るの？」

「…ってか何でお前化粧してるわけ？」

「マネージャー業のくせに何化粧してんだこのバカは。と思つたわけで。」

「…別にそれは俺の勝手でしょ？」

それより結城綺羅さんにだけは言われたくないです。  
なんです？今回の化粧は。

塗るのにいつたい何時間かかるんですか。」  
いやいやいや。」

何で俺ってばこんなバカに言われちゃってるわけよ？

「ってかお前に関係ないだろうが。」  
俺が睨むと。

「ああ。そうそう。」  
澄香が言った。

「俺ジャーマネ経験豊富つすよ？

実はDESTINYの裏メンバーとして活躍してたんですけど知りません？」

「はあ？裏ってなんだよ！！（怒）」

話してるだけでなんかむかつく奴だった。

だから落としたんだっけとつつすら思いだす。

「だから。俺はDESTINYの忍の女発覚から低迷する人気を復活させるべくDESTINY男ヴァージョン女ヴァージョンってやってたんですけど？」

「…知らん。」

俺がそう言うと。

「綺羅さんヤバいんじゃないです？

他のことに疎いとヤバいつすよ？」

そう言っって何やらポケットから取り出し。

澄香は俺に見せたんだ。

「ほら。これが俺。」

忍が女だから俺は澄香って本名で裏のボーカルやってたんすよ？」

「でもお前。DESTINYはポップスで化粧バンドじゃないじゃないん？」

「結城綺羅さんともあるう人が。」

化粧バンドだなんて。」

「グイジュアル系と言ってほしいですね。」

「澄香。お前うるさいよ。」

「ってかね。DESTINYは正統的だからほら化粧ぐらいしないとインパクト持てないし？」

ウケ狙いでやったら外に出る時も何か恥ずかしくて男のくせに化粧しないと無理になってしまったんです。」

結城綺羅さんとは違うんです。」

澄香はそう言っつて。」

「それでお前は何でこっちに来たわけ？」

お前Rucypher落ちたのにな？」

「ああ。忍が産休入ったから休業つてやつ？」

俺元々メンバーじゃないんでジャーマネ業務も並行させてやってたんですけど。」

「人気も落ち着いてきたことだしってDESTINY裏バージョンは解散させたんです。」

「自分で？」

「当たり前でしょ？」

「だって俺つてば人前に入るより人動かす方が元々向いてるみたいだし。」

だから派手に裏バージョン解散コンサートやったんすよ。」

「…ソロでしようとか思わなかったのか？」

「…ソロで生き抜くほどに俺は自分が人前で何かやるっていうのに向いてるとは思わないんです。」

それならいつその機会にスッパリ引いて結城綺羅を動かしてみたいなんて。」

生き抜くのはとても大変で。

俺も近頃痛感してる。

変わり映えのしない世の中のように見えるのに。

そう見えてるだけで移り変わりは早くて。

興味を失ってしまったえば堕ちていくのは早く。

這い上がるのが何て難しい世の中だろうって。

そう思う。

「…で個人的に俺としては利加さんと仕事してみたいんですよ。はあ？何言っちゃってんの？このバカは。（怒）」

「だって利加さんと綺羅さんってお互いにカミングアウトしたんですよね？」

「ただど利加さんは頑なに何も無いって言う。」

「一方的な自分の片恋だって言ってるじゃないですか。」

「それを崩してみたいって言うか。」

「あのドラマ俺も見たんですけどやっぱり利加さん綺麗だし。」

「結城綺羅が心動かすだなんてどんな人が興味持ったんですよ。」

「澄香。お前もか。」

「お前も利加さん狙いかよ！！」

「で。まあいちばん身近なジャーマネ業が良いかなって思って。因みに綺羅さんのとこの社長にハンコ貰って来たんで。今日からよろしくです。」

勝ち誇った笑みを浮かべ。

澄香はそう言ったんだ。

「澄香悟です。よろしく〜〜。」

ああ。俺ってばやっぱ報われない運命じゃね？ (凹)

### 新顔 3

「ああ。澄香さん。」

利加さんが淳也たちと帰ってきた。

1週間は長すぎだったよ。うつつうつつ。

澄香って馬鹿が現れるし。

しかも利加さん狙いだって？ざけんな！！（怒）

俺が楽屋で例の次の長い長い次のメイクを受けながら出迎えたら。

利加さんは難なくそう言った。

「…利加さん知ってたの？」

俺はいぶかしげに聞いた。

ってか俺ぐらいには教えてほしかったって言うのが正しい感情で。

「…まあ知ってたって言うか。」

付き人では何か名前も珍しいから有名みたいで。

でも結構やり手だって聞いてますよ？

僕としては綺羅さんたちの仕事の幅が広がれば誰でもいいんです。

「

メイクが終わって利加さんを見たら利加さんが嘔き出した。

「…綺羅さん今回やりすぎじゃないですか？」

「…ってか3時間はキツイですよ。」

俺は面白くなくて。

「ふ〜〜んだ。利加さんまで澄香と同じこと言うんだな？」

拗ねてみた。

「えっ？」

「だからあいつも俺のこと笑ったんだ。

今回はメイクし過ぎだった。

だから俺頭に来てあいつだってマネージャーなら化粧しなくていいんじゃないかって言っちゃったんだ。」

「…そんなこと言っただんですか？」

俺がそう言つと利加さんが急に真面目な表情に戻って。

聞いてきたんだ。

「…うん。何かまずかった？」

「…いや。あの…裏DESTINYのはご存知ですよね？」

「うん。澄香から直接聞いた。」

「…表向きボーカルの忍さんの産休で解散ってことになってるんですけど。」

何か事情があったみたいで。

化粧しないと外に出られない一種の恐怖症みたいなんです。澄香さんって。」

「…病気ってこと？」

「どうなんでしょうか。僕も医者じゃないし。

だけど何か判るような気がするんですよね。

外が怖いノイローゼってどうか。

だから綺羅さん見て安心したんですよ。

自分より化粧凄い人のとこにいれば目立たないんじゃないかとか。

「

俺は利加さんを引き寄せて。

「…俺にはさっぱりわからん。」  
そう言ったんだ。

「でしょうね。綺羅さん唯我独尊ですもん。」  
クスクス笑う利加さんに。

俺は耳元で囁いた。

「淳也たちにもちろん触らせてないよな？」  
利加さんは真っ赤になって。

「何言ってるんですか！！冗談もほどほどに…っ！！」  
俺はキスを落として。

利加さんはホントに綺麗な表情で俺を見上げるんだ。

「んんんん。利加さんの体温vvv

久しぶりvvvv」

首元に顔をすりよせて。

逃げられないように抱きしめる。

利加さんは諦めて力を抜いた。

そこへ澄香が現れたんだ。

相変わらずの化粧で。

「ああ。初めまして。利加さん。  
澄香悟です。よろしく〜。」

利加さんは俺を突き飛ばして。

体制を整えたんだ。

## 言葉の魔法 1

澄香くくく殺す(怒)

せつかく珍しく利加さんが答えてくれたのにくく(怒)

俺の怒りはいざ知らず利加さんは俺を思いっきり突き飛ばして言った。

「こちらこそよろしくお願いします。利加です。」  
「ってかそれってあり？」

俺は背中を壁で打って苦しんでるっつーのに。

「ところで澄香さん。」  
利加さんが言った。

「結城綺羅の化粧の時間聞きました？」  
まるで俺がいないかのような会話を利加さんは続ける。

「ああ。多分俺の勘だと3時間はくだらないと思いますけど？」  
澄香は案外答えたから。  
俺はマジ見しちゃったよ。

ってか利加さんの言葉の魔法って結構救われるんだよね。

「ビンゴです。澄香さん。」

「やっぱりDESTINY張ってただけあると思いますくく。」  
「ってか張ってるってヤンキーじゃないんだから。」

俺は心で突っ込みを入れる。  
口は挟めなかった。

だって利加さんの口を挟むなオーラがすごかったから。

ってかまあこの頃俺も判ってきたんだけどね。

こんなときに口を挟むと利加さんはキレてしばらく視界にすら入れ  
てくれなくなるから。(前科者)

「それですね。澄香さん。」

僕思ってるんですけど企画そこに起こしたんで見ていただきたい  
んですが。

何しろDESTINYの企画ってすごいって付き人の噂じゃなっ  
てるし。

そうなると結城綺羅とRucypherに澄香さん付いたら僕要  
らないんじゃないかってぐらいじゃありません?」

そこまで自分を蔑むことないだろうって俺は思ったけど。  
行方を見てたんだ。

「利加さんはそついや美人だってDESTINYでも噂でしたよ?」  
ってか何だ。この褒め合いは…。

何か中元持ってきたおばちゃんみたいな会話じゃねえか。  
俺はガツクリ来て。

「ってかこれ検討しても良いっすか?」

澄香が言ったんだ。

「ええどうぞ?」

「あの。人がいると気が散るので会議室行ってきますんで。」

もし何かあれば携帯によろしく。」

仕事モードに突然入った澄香は俺に目もくれずに楽屋を出て行っ  
たんだ。

ニツコリ笑みを浮かべながら。

静かな声で利加さんが言ったんだ。

「…あの澄香さんの破綻具合見ました？」

「えっ？」

「…ってか僕も大概心は凍てついているけど澄香さんほどじゃないなって思いました。」

「…何が？」

「あの人マニキュアも塗ってるんですよ。」

「ダークブルーをね。」

「…化粧バンドなら不思議は無いんじゃないの？」

「化粧バンドならね？」

「…どういう意味？」

「…DESTINYって前身のボーカルが前島敦子って人で。」

その人が亡くなって今の忍って人が入って。」

でも忍って人は男だと自分を偽っていて。」

なんか複雑な時に澄香さん入ったらしいですよ。」

元々その気はあったんでしょうけど澄香さんが入った時DEST

INYは最悪な状態だったって。」

泉野經由で聞きました。」

あの人が爪を塗るのも化粧するのも髪を赤く染めるのも全部パフオーマンスで。」

きつと結城綺羅のように勝負できなかつたんでしょうね？」

「…判らん。」

「…ってかね。さっきも言いましたけど。」

僕は何か澄香さんの気持ちわかるんですよ。」

初めは多分期待に夢膨らませてDESTINYに入ったはずで。」

だけど目立たないから企画を自分で立てて何とか東奔西走するん

ですよ。

何とか名は成したけど気づいたら心はボロボロだったってやつ。多分ね。その表れだと思いますよ。

化粧もマニキュアも。頭赤いのも。

目立つ方が何事もやりやすいから。」

利加さんは一息ついて。

「でも結城綺羅にはきつと判らないと思う。」

ニツコリ笑って付け加えたから。

俺は面白くなくて。

「…あいつの化粧ぐせ？っていうの？

治るわけ？」

聞いてみた。

「…僕は医者じゃないけど多分治ると思います。」

だって身近にこんな自分よりすごい化粧した鬼みみたいな綺羅さんがいるんですよ？」

誉められてるんだかけなされてるんだか判らなかつたけど。でも判ったことは。

「だからお願いしますね？首にしないで？」

綺麗な表情で利加さんが言うから。

俺はへなへなと崩れ落ちたんだ。

ああ。利加さんにだけは弱い俺って…。

## 言葉の魔法 2

っていうか。

俺にとつては別に澄香が化粧しようがしまいが。

あんまりっていうか全然関係ないわけで。

あ。でも利加さんに化粧するのは止めてほしいって言うか。

利加さんってば人が良いもんだから付き合ってるの。(ガツクリ)

利加さんが言うには。

澄香は R u c y p h e r になれなかったから D E S T I N Y に入っただけ。

その人間関係がうまくいかなくて。

ってかあそのリーダーは確か和泉響。

ってかなにやってんだよ。響。(怒)

まあ俺に言われたくないだろうけど。

確か D E S T I N Y は前島敦子と和泉響のバンドで。

それからメンバーは入ったり出たり繰り返して。

固定はヴォーカルの忍とリーダーの響ぐらいで。

ってか産休？

俺聞いてないって。

ってかね。例えライバル会社であろうとも。

結構バンド仲間って被るわけで。

あっちにいたけど上手いはずこっちに入り成功とかってこの世界じゃ当たり前で。

俺はまだ若いけど横の繋がり結構大事にしてんのよ？これでも。

澄香って名前ではOKで性格がNGだったから落としたんだよ。絶対揉めるって何か予感があったから。

腕が良くても協調性がダメなら却下。それが俺の考えで。

和泉響は多分年は30代前半か。

俺よりずっと先輩バンド率いてるってわけでも顔見知りで。

ちよつとの好奇心とちよつとの心配とで俺はDESTINYのリーダーに会いに行ったんだ。

「あいつヤバいんだよ。」

俺を見たとたん和泉響が言ったんだ。

「あいつって？」

「綺羅んところに行ったうちの元裏メンバー。」

「ああ。こんにちは。綺羅さん。」

DESTINYの楽屋に行くと和泉響と忍がいて。

忍は腹が確かにでかかった。

「忍さん。妊娠って本当だったんですね。」

俺は見るまで信じられなかったんだけど。

澄香が言ってたことは嘘じゃなかった。

「ってかね。気をつけてたんだけど。」

30間近になって焦ったみたいで。響が。」

ああ。そうそう。」

ここも響と忍はくっついてるわけで。」

「俺の所為かよ。」

響は膨れながら俺に言った。

「澄香悟ってさ。」

「はい。」

「自傷行為がすごいんだよ。」

あいつマジ死ぬかってぐらい自分傷つけんの。裏バンドで。」

よくいるじゃん？ヴィジュアル系のサドンデスみたいな奴。」

化粧もマジあんな濃くなかったのに塗れば塗るほど客は引くし。」

俺らも引くし。」

あいつだけ舞台上でヤバい感じ。」

目がイツちやってんの。」

「…それで首つすか？」

俺が問うと。」

「いや。そういうわけじゃなくて。」

俺たちとしても澄香にはまともになってほしいわけで。」

だから一時的っていつの？」

そっちの利加さんに預けたかったんだ。」

「…利加さんが？」

「…利加さんが言うには結城綺羅に治す力があるんだって。」

ってかどうなんだかね？って俺は思うけど。」

「…そんなんこつちが聞きたいですよ。」

「でもほら。利加さんが言うには結城綺羅はその顔でこの辺平気でうろつけるぐらい面が厚いからって。」

「…俺のは特殊メイクですけど?」

「だから良いらしいよ?」

利加さんきつと何かあるんだと思っけど。」

「……意味判んないですね。」

俺は釈然としなかつたけど。

ただ利加さんが澄香を拾ってきたのだけは判った。それは一時的に。

自傷行為の酷い澄香にきつと利加さんは何かを思ったのだろう。

それに利加さんは澄香は治るって言った。

化粧せずに済むって言ってたから。

俺は今はそのを信じたいと思う。

### 言葉の魔法 3

楽屋に帰ると。

利加さんがこっち向いたんだ。

俺ってばしばらく固まってそいで鼻血吹きそうになっただって

だってだっただって。

ヤバイヤバすぎ。利加さん。(涙)

その姿を見せるのは俺にだけにしてくれ~~~~っとな感じの恰好  
だったんだよ。実際。

利加さんいつものシャツにズボンなんだけど。

顔はちゃんと化粧してた。

それは俺たちヴィジュアル系がやる死に化粧じゃなくて。

いわゆるかわいいこアイドルがやる化粧だったから。

俺ってば固まった拳げ句利加さん抱きしめたんだ。

「なんっ!!何て格好してんですか!!利加さんは!!」

「えへへへvvvv」

「えへへじゃないです!!」

俺はもう嬉しいんだか悲しいんだか辛いんだか喜んでんだか判らない面  
で。

抱きしめた手を放さなかった。

「…澄香さんがね。僕の化粧やってみたって。

僕はマネージャーだからそんな勿体ないこと(化粧品が)しない

でって言ったんですけど。

澄香さんが心配しないでいいって自前使うからってされたのがコシなんです。」

「だからってあんたっ！！そんなことまで付き合う義理は無いだろう??？」

俺は声を荒げたんだ。

何か利加さんが汚された感じがして。

何か嫌だったんだ。

何でかわからないんだけど。

「…澄香さんね。きつと心が壊れてる。

何か判らないけど危うい感じがするんです。

見張つてないと何するか判らないって。

だから僕はそれぐらいならいいやって思ったんです。

僕にはヴィジュアル系の人たちが何で化粧してライブするのかとかさっぱりわからないけど。

でもきつと僕にはわからない何かがあるからでしょ？

だったら綺羅さんも怒らないって。

「ごめんなさい。ダメでしたか？」

利加さんは腕の中で俺を見上げた。

その仕草は確かに利加さんのものなんだけど。

確かに鼻血吹きそうに凶悪的に可愛いし。

他の奴に見せたくないし。

だけどそれを作り上げたのが澄香だって言うので俺は腹を立ててたんだ。

「…澄香さんね。リストカットの傷がきつとたくさんあります。」

俺を見上げたまま腕の中で利加さんは言った。

「…ふん。」

俺は頭の中で反芻した。

響が言ってたこと。

「舞台の上でのサドンデス」だって。

「…化粧をしてもらってるとき手首が嫌でも見えるでしょ？」

そこに見えないようにリストバンドしてるんだけど僕のアイライ  
ン入れてるとき。

リストバンドが汚れちゃって取ったとこ見ちゃって。

何か遣る瀬無くて。

何か…なんだろ。

判らないんですけど僕澄香さんを治してあげたいって思ったんで  
す。

僕の破綻っぷりも凄いけど澄香さんには負けるなって。」

俺は抱きしめてた腕を放して。

利加さんの前に座る。

そして言っただ。

「…響… DESTINYのリーダーね。」

うちに一時的に澄香預けるって言った。

利加さんが治してあげて返してあげるのが多分一番いいと思う。」

「…綺羅さん。」

「それで提案なんだけど。」

俺としては澄香をあのままマネージャー業だけをやらせるつもり  
は無いから。」

「えっ？」

「…あの化粧なら即席 R u c y p h e r でも十分できると思うし。アレンジなら利加さんと共同でやればいい。」

「綺羅さん…。それって。」

「だから俺たちのオンオフにずっといれば澄香だって徐々に化粧も落とせるかもしれないだろ？って話。」

俺は利加さんを引き寄せてキスを落としました。  
そして。

「……だから。早くクレンジングで化粧落として来い！！

俺の我慢も限界が来る！！」

俺は利加さんにクレンジングを渡して。  
鼻血が出そうになるのを堪えたんだ。

天下の結城綺羅が……（涙）

天下の結城綺羅が利加さんにだけは形無しだった。  
うつつ。利加さんにだけは敵わないんだ。

力で強いとか。

能力が勝ってるとか。

そんなんじゃないくて。

ただ利加さんに勝てないんだ。

苦手なんじゃなくて大好きでもうホント。

見上げられただけで鼻血吹きそうだもん。情けねえ。(涙)

「うわっ!!何してんの?利加さん。」

楽屋にどやどやと入ってきた翼と淳也が異口同音に驚きの声を上げて。

「何?新たな嫌がらせされたん?」

言うちに事欠いて淳也がそう言った。

「ってか利加さん似合いますぎっしょ?」

「ってか可愛すぎっ!!」

俺って歩がいなければ絶対狙ってる!!」

利加さんが俺が渡したクレンジングで顔を洗ってる間淳也の奴翼以上にかましかった。

確かに利加さんは可愛い。

可愛いのは認める。

だけどそれは俺のだ。(怒)

「利加さんもRucypherに入れば？」

「ちよつと異質で人気出るかも。」

翼がまた要らんことを言っただから俺はキレて。

顔を拭いてる利加さんにつかつか寄ってって。

抱きしめた。

案の定利加さんは派手に暴れて。

俺はエルボーを食らった。

ううう。痛い。

その時翼が言ったんだ。

「あの澄香ってやつ。

俺怖いんだけど？」

妙に真剣な声で俺に言う翼は。

でかい背にしては珍しく。

弱気な表情で。

俺と利加さんは翼を見つめて。

淳也が言葉を添えた。

「……ってか怖いってというのは語弊があるんだけど。

今さ。丁度Aスタが空いたからって一応利加さんの化粧が終わって暇そうにしてた澄香捕まえて。

まあRucypherはこんな感じでいつもやってるって見せようと思って連れて行ったんだ。

そしたら。」

そこからは翼が引き取って言った。

「そしたらあいつ綺羅より声が良いんだよ。」  
なぬ？

俺の不穏な空気を感じたのか翼は続ける。

「ってかまあそれは置いといて。」

あいつコード付きのマイクで自分の首締め始めたんだよ。  
歌いながら。

…あいつ自殺願望とかあるわけ？」

そこからは淳也が。

「それに俺今日気づいたんだけど。」

あいつDESTINYの前のバンドのローディしてて。

何かピアスを耳にヤバいぐらい付けて耳が聞こえなくなる寸前まで行ったとか？

それはローディやってたやつが教えてくれたの思い出して。

だからあいつ。考えてみれば綺羅がRucypherに入るの落としたんじゃない？」

「…澄香はサドンデスだって響が言ってた。」

俺は思わず呟いて。

利加さんは青ざめていた。

多分思ったより性質が悪くて。

思ったより難しい澄香だと。

「…でも！！」

利加さんが言った。

「…でも澄香さん優秀だし？」

「…利加さんがそう言ってもライブとかで首締めながら歌われるとちよつと…。」  
淳也が呟いた。

「…何とかありませんか？綺羅さん。」

利加さんは俺を見上げて。

俺に助けを求める。

俺としてもライブで死人が出るのはちよつといただけない。

だから「サドンデス」か。

今まで死ななかつたのが奇跡みたいなもんだとさつき響が言ったのが甦る。

でもね。俺は思ったんだ。

利加さんが死なせたくないと思ってるってことは。

俺はそれを助けないとならない義務がある。

それが利加さんを好きだってことで。

「…あのさ。提案なんだけど。」

俺は淳也と翼に向けて言葉を発した。

「出来るだけ澄香を1人にしないとか。

何か徹底的に自傷行為を邪魔してやるのはどう？

自傷行為してる暇も与えないぐらい仕事与えて。

歌わせてみて俺は一時的にならヴォーカル代わっても良い。」

俺がそう言つと。

「…いくら利加さんに頼まれてるからって綺羅。

それって公私混同しすぎなんじゃ？」

翼が言った。

「…だって!!このままじゃいつかってか近いうちに澄香さん死んじゃうんですよ?」

利加さんが珍しく声を張り上げた。

それを聞いて。

俺は頷いて。

「…重要だろ?関わっちゃったんだから?」

俺がそう言つと翼も淳也も黙りこんで。

死に急ぐ奴に少しでも関わって。

関わった拳げ句死んでしまわれたら胸糞悪いからと淳也が渋々言った。

それで俺は。

具体的に考えてたことを述べたんだ。

それは。

化粧バンドらしく澄香にメイクがやる仕事もやらせること。

唯一化粧のときだけ利加さん曰く澄香は楽しそうらしいから。

忙しいと自傷行為してる暇もないし。

あとヴォーカルをやらせて。

もちろんコードレスのマイクで歌わせて。

何なら縛りが似合う服着せて。

歌わせる。

両手をごんじがらめにすれば首も自分で絞められないだろ?

澄香の破綻具合は半端じゃないって利加さんは言ったけど。  
俺はそういう人よく知ってた。

…俺の親父だった。

I s t a n d a l o n e 2

I s t a n d a l o n e , a n d y o u s t a n d a l  
o n e , t o o .

聞いてたよね。いつもいつも。

僕の事愛してる？って。

僕はここに立っていつでもあなたを見守ってるってあなたは信じな  
かったの？

あなたの右手は僕の左手に。

あなたの左手は誰かの右手に。

繋がってる。息をする。

そして瞳を閉じて。

輪になるう。

例えもし僕とあなたを引き裂こうとしても。

僕の左手はあなたに繋がっていて。

大丈夫。

きっと会えるからって約束しよう。

俺の親父が昔歌った一枚のレコード。

それは斎藤エージェンシーを正式に継ぐ前。

お姉ちゃんの居る長男に生まれた親父は。

結構甘やかされ放題に育てられたって。

そして親父のすぐ下には俺を預かってくれた兄さん（利加さんは斎藤さんと呼ぶ利加さんの直属の上司にあたる）の父親がいる。

因みに兄さんの名前は斎藤柊一。

秋生まれだからだと美人の叔母は言った。

兄さんの父親つまり俺から見ると叔父にはとても世話になって。

俺は叔母に育てられたと言っても過言ではない。

だって実の母親由梨絵は俺を生んだと同時に具合が悪くなって。

よく予後が悪いとかいうけど。

そんなんじゃないとすぐに亡くなったって。

だから叔父と俺の親父とそして叔母とが3人で話をした結果。

性格破綻する率が高い片親教育は情操教育上よろしくないということとで親父とはほとんど暮らしたことが無い。

そして俺は叔父夫婦の下で育てられたんだ。

因みに親父は由梨絵に会ったところは比較的安定してたらしいんだけど。

性格破綻は血筋みたいで女グセは悪い。

誰かれ暴言で傷つける。

唯我独尊。

そのくせ繊細で自傷行為で叔父はよく警察にも厄介になったと言っていた。

親父を除けると案外上の伯母（これは今バレエダンサーとして世界を行ったり来たりしてる）と下の叔父はまともなただけ。

その上「黒のライブ」とやらに魅せられた親父はピアスはあけまくり。

リストカットは繰り返し。

化粧は厚すぎで下手な歌叫びまくって歌手気取りで。

首は自分で締めながら絶叫もよくあったとか。

そんな中親父はおふくろ由梨絵と出会って。

見上げたのは小さな光。

ただ一筋の小さな光。

でも親父にとっては大きな力強く眩しい光で。

これじゃいけないと親父はカウンセリングを受けに行ったんだ。

おふくろ由梨絵は傍らでいつも励ましていたらしい。

親父にとって大切なものが。

運命的に大切なものが生まれた瞬間だったんだ。

その時に歌ったただ一つのまともな曲。

俺が唯一好きだと言える昔のレコード。

I s t a n d a l o n e .

俺はそれを自室から引っ張り出して澄香に聞かせよう。

そう思ったんだ。

## I s t a n d a l o n e 3

そして俺は今度はそのレコードを持って社長室へ利加さんを伴い行ったんだ。

自室は俺の隠れ家で。

利加さんが来たことのあるマンションとは違うところにある。

それは利加さんでも内緒の場所。

親父と兄さん以外は知らない俺だけの場所。

多分俺は性格破綻してるから。

1人になれる場所をほしがり。

小さい頃に親父を困らせたらしい。

んで親父が俺に与えたその場所は。

おふくろ由梨絵が使ってた家事室。

大した大きさもないけど誰にも知られないで1人になれる場所。昔はミシンが置いてあり。

その音は母親を連想させた。

今は親父の私物と俺の学生時代の物置みだいになってるけど。

利加さんは俺を見たたん「どこへ行ってたんですか？」

そう当然の疑問を持った。

俺が適当にはぐらかすとちょっと悲しそうな表情を見せた。

だけどね。俺は利加さんを信じてるしこれからもきつと信じるけど。

やっぱり最後の砦は見せるのはまだ早いかかって思う。

もしかしたらってか絶対。

俺の運命の相手は利加さんじゃないから。

やっぱ子孫残すにはこれから先誰かと結婚しないといけないだろうし。

利加さんも言ってた。

「夢見るだけの時期は過ぎた」と。

一緒に仕事をして行くには悪くないパートナーだけど。パートナーとずっと一緒にずっと愛して。ずっとこのまま生きていく保証があればいいんだけど。

利加さんの杞憂はきつと当たる。

きつと間違いなく俺が利加さんの手を放すことがある。

利加さんはその時でさえもきつと綺麗に微笑むだけで何も言わないだろうけど。

「親父く。ちよつと内部パソコン借りるぞ。」

社長室にだけある内部パソコンの前に俺は利加さんを座らせた。

利加さんの手を引つ張つて社長室に向かう間。

俺は利加さんに問いかけた。

「利加さんは何か触れられたくないことってある？」

「え？」

「だから例えば俺にも言えないこととか。」

持ちかけてみると案外素直に利加さんは俺を見上げて。

「…そんなのあるに決まってるじゃないですか。」  
そう答えたんだ。

「じゃあ。俺がもしあんたに何も言えないで何か決断しても怒らな

い？」

漠然とし過ぎの言い方かもしれない。  
だけでもしその時。

この人はどれだけ傷つくだろうとか。  
考えると眠れなかったり。

「僕は秘密が無い人なんかいないと思ってます。  
利加さんは静かな俺の好きな声で言ったんだ。」

「僕には綺羅さんが何を思っ何を感じて僕にそんなことを聞い  
てるのか全然判らないし。」

「だけど僕はあなたが一番幸せになることを願ってます。」

何かを一人で決断したとしても僕には何も言うことは無いと思っ  
てます。

「まあ僕は優柔不断も甚だしいから黙ってはいただけませんがね。」

俺にとって。

今の俺にとってやっぱり一番の言葉をくれるのは利加さんだった。  
だから。

俺は思わず利加さん引き寄せたんだ。

「ちよっ！！どうしたんです？」

移動中でしょうと人の目を気にしながら柔らかく拒絶の意を示す利  
加さんに。

俺は耳元で囁いたんだ。

「やっぱ俺今はあんたが一番好きだわ。」

男なのになあとか。

不思議と今はそんなことどうでもよかった。

そして内部パソコンの前に利加さんを座らせて。  
俺はそこに手をつき画面と一緒に見る。

「利加さん。社員証のパス入れて？」

「はい。」

カタカタと利加さんの綺麗な指がキーボードをなぞり。

「澄香悟って入れて？」

俺は初めてそこで調べたい名前を言った。

内部パソコンはごく少数しか触れない中枢だった。

全ての社員の履歴から何から全部。

収めてあったから。

澄香悟。本名は非公表。

25歳。湊府出身。

ローディなどいろいろ経て2009年末よりRucypher付き  
人になる。

澄香のページにはそれしか書かれてなかった。  
ってか本名も非公表だった？  
有名人でもあるまいし？

俺と利加さんは顔を見合わせて。  
躍起になって他の情報を探したんだ。

俺たちが躍起になって澄香の情報を探していると親父の声がした。

「綺羅か？」

親父は心臓発作で倒れていつかあれも原因は飲みすぎだって言うから全くうちの親父ときたら社長の自覚あのかよ？とかいろいろ言いたいことはあったし。

だけど久しぶりに見る親父の顔に俺は聞いてみたくなった。

俺がまだチビのころ。

荒れてた親父はどうやってまともになったのかと。(ってかまともとは言い難いかもしれないけど)

親父はスーツで現れ。

年甲斐もなく50手前で金髪なんだもんな。

しかもロン毛。

俺もこんな怪しげなマフィアみたいに年をとるのかかと思うと何だか脱力というか。

「…ああ。この間の美人な利加さんも一緒か？」  
そう言った。

利加さんは立ち上がろうとしたのを俺は押しとどめ。

「そんなことより親父。」

振り向いて話をした。

「そんなことより親父。」

「どういってもりで澄香入れたんだよ？」

聞いてみたかったんだ。

親父とまとも話をする機会なんか無いし。  
俺は忙しいし親父も飛び回ってるから。

「…どういうつもりとは？」

親父はネクタイを締めながらパソコンの傍に来た。

「澄香はヤバい奴だつて。」

何で判つてたのに雇つてしかも俺のところで面倒見るだなんて!!」

「…別に仕事さえ出来ればいいんじゃないか？」

何で綺羅はそんなに拘ってる？」

冷たい言い草は俺もそっくりで。

空気は瞬時に凍る。

「あの。」

俺が腕で囲ったパソコン画面の前で利加さんが声を発した。

「あの!!」

「何？」

俺と親父の声が被った。

「…これ。澄香さんじゃないですか？」

その記事は今からさかのぼること5年前の小さな記事だった。

そこにはローディ時代の今とは別人のスピンの澄香が映つてて。

親父はため息をついて。

「昔の俺によく似てるから雇つたんだ。」

一時的にでも綺羅なら澄香を治せると思つて。」

親父は今でこそ化粧はしないけど。  
昔は相当してたらしいから。

全く利加さんにしる響にしるうちの親父にしる何の根拠があるって言うんだよ。

俺になら治せるって？

ってかホント意味判ないんだけど。

だって俺は化粧バンドだから面倒でもヴォーカルやる時は目立つためにあと趣旨変えしないように化粧してもらっけどその他なら真っ平なんですけど？

好きでしてるわけじゃない。

だってクレンジングどんだけ大変だと思ってるの？

「綺羅。SPICAってバンド知ってるか？」

親父がカフスをはめながら聞いてきた。

「いーや？」

俺は利加さんが動かすパソコン画面を見ながら言ったんだ。

「…今では珍しい女のヴォーカルのヴィジュアル系のバンドなんだけど。」

「…それが？」

「…澄香がスツピンでローディやってた頃のバンド名がそれなんだよ。」

「…それで？」

「5年前。丁度利加さんがここに入社したころSPICAは解散したんだけど。」

「…くつついたり離れたりは当たり前じゃねえの？」

「この世の中は。」

俺がそう言つて。

「そのこのギターの香ってやつ澄香の目の前で死んだんだよ。」

利加さんがパソコンの画面を激しく動かして出てきたのは一つの記事。

S P I C A の G 香死す。

武道館ライブの最中に天井より吊り下げてたミラーボールが落下。運悪く下にいたギターの香（鈴木香）とローディで付き人の弟悟（鈴木悟）が下敷きに。

悟は運良く一命を取り留めギターの香は搬送先の病院で死亡。香の死因は内臓圧迫による呼吸困難。

警察は任意で現場責任者に話を聞き故意による業務上致死と判断。尚 S P I C A は同年解散。

ヴォーカル沙紀（伊藤沙紀）は同年失踪。

一説には沙紀が香を故意に狙った犯罪だとも言われてる。

「…この鈴木悟って言うのが？」

「…澄香だ。」

「…でも。」

「それかららしいぞ？澄香が化粧をさせたの。」

香って言うのは澄香の実姉で S P I C A では一番人気だったらし

い。

それを妬んでヴォーカルの沙紀とやらが故意にミラーボールを落としてみたって。

澄香が化粧するのは一部では姉そっくりになって復讐するっていうのと。

自傷行為によって生きてる自分を責めてるっていうのと。

澄香と名乗ることによって絶対復讐心を忘れないっていうのと。」

それから。

俺は利加さんと連れだって社長室から楽屋へ帰った。

帰り道。

利加さんが言うんだ。

静かな声で。

「…復讐では何も生まないって僕は思うんですけどね。」

利加さんだって伊達に修羅場くぐってないの知ってるから俺は頷く。

「…ずっとそれに縛られて助けられなかったって悔いて。

誰か幸せになれるんでしょうか？」

「…幸せにはなれないだろうって思う。」

俺は振りむいて。

「…だけどその失踪したヴォーカルには結構なダメージなんじゃない？」

「…恐怖心煽って？」

植えつけて震えさせて。

それじゃあそのヴォーカルと澄香さんは変わらない。」

利加さんにとって許せないのは。

もちろん俺にとってでもあるけど。

「逃げてる奴」だった。

みんな必死で生きてるのに過去に捕らわれていつまでも。

澄香。

名前すら恨みによってできた名前だったなんて。

## 思い全て 1

「じゃあ。僕先に帰ってますね。」

利加さんがそういうことはこの頃は珍しくなかった。

何しろ俺の付き人もやってるから利加さんには荷が重すぎるわけで。たまに先に帰らせて休ませるようにしてるんだ。

四六時中一緒にいると倦怠期に入ったら嫌だし。

利加さんがそんな可愛いこと言ったから俺はもうそれだけでやられちゃって。

家で待つてるから。

とその日も先に帰ってたんだ。

だから。

俺は知らなかった。

その日が俺たちの重要な日になるだなんて。

夜も更けて。

俺はテレビの収録の仕事を終え。

24時回って25時に近くなってから利加さんちに帰ったんだ。

もちろん付き合ってるわけだからと強引にスペアキーももらった。

強引すぎるかと思っただけど利加さんは強引なぐらいがちょうどいいから。

スペアを指し込んで利加さんちの前で。

利加さんの叫び声が聞こえたんだ。

「あなたは!!!」

こんなことして救われるんですか!!!!!!」

その声は悲痛で泣きそうでした。

相手は判らなくて。

俺は頭に血が昇った。

…だって間に俺ですら聞いたことが無い利加さんの喘ぎ声でしたんだ。

スペアで開いたと思った利加さんちの玄関はチェーンに阻まれて。

俺は体当たりしたんだ。

暗くてよく判らないけど。

利加さんが滅多に使わないベッドの上に縛られて。

半裸で。

その上に……押し掛かっているのが澄香だったんだ。

## 思い全て 2

俺はその状況を見て。

自分が一番に何を感じたかって。

腹立たしさだったんだ。

一体何のために利加さんを俺は抱かずにいたのかとか。

一体何のために俺は自分を縛っていたのかとか。

悔しくて。辛くて。

「はっ！！良いとこで綺麗さんのお出ましかよっ！！」

澄香は悪びれた様子もなく。

手にはナイフを持って。

自分の手首を切りつける。

血は利加さんの半裸の腹に落ちて。

…綺麗だった。

欲情した自分がいて。

「澄香！！！！」

俺が叫ぶと。

澄香はナイフを今度は利加さんに近づけて。

「ああ。俺をあんま怒らせない方がいいよ？

あんたの大事な利加さんをキズものにしたくは無いだろっ？」

利加さんは一生懸命澄香を見上げて。

澄香は利加さんにナイフを突きつけたまま。  
口づけたんだ。

俺の頭には血が上って。

利加さんの自分以外の奴とのキスシーンなんか見たくなくて。

「まさかさ。自分が結城綺羅と張り合ってこの姫を好きになるなんて思わなかった。

笑えるって感じ？」

口づけて深く。

利加さんの呼吸さえも吸い取りそうな勢いで。

そしてあははと奇声をあげて。

澄香は利加さんから離れたんだ。

「まあ王子も帰ってきたとこだし？」

今日のところはこのへんにしといてやるよ。」

澄香は確かに狂ってた。

奇声を上げながら利加さんの部屋を出て行ったんだ。

…利加さんに駆け寄ると。

利加さんは半裸で。

いつものシャツは全部ボタンがはじけ飛んでて。  
腹にはさっきの澄香の血が流れていて。

利加さんは懸命に天井を向いていた。

「…利加さん。」

俺が声を掛けると。

うつすらこつちを向いて。

「…綺羅さん。早く寝ないといけませんね。」

何も言わなかった。

ただいつも通りの穏やかな声で。

「あんた!!!」

手は縛られて半裸で。何でそんなことしか言えねえんだよ!!!」

澄香がキスをした唇は赤くて。

ルージユを引いたわけでもないのに赤くて。

「俺だってあんたの体見たかったんだよ!!!」

言ってみて。

ハッと気づく。

利加さんが本気で怯えた表情を見せて。

「だって…自分が非力なのにですか?」

震える声で利加さんは俺を見つめた。

そこには俺の好きな強い光があった。

「綺羅さんも言ったでしょ?僕は非力だって。

成人男性に比べて力は劣るし細いしなよなよしてるしって言った

でしょ?

…僕だって好きでこんな風に生まれたわけじゃないって!!!

どうしろって言うんですか?」

手は交差させてベッドヘッドに括りつけられて。  
半裸の胸がのぞく。

俺は引き寄せられるようにキスを落とした。

…正確には落とそうとした。  
そしたら。

ここ最近見られなかった拒否をされてカッと来たんだ。

利加さんは俺がキスをしようとしたら懸命に避けて。  
身をよじって。

だから俺は乱暴に利加さんの顔を固定したんだ。

だって俺利加さん大好きなんだよ？

乱暴に利加さんの服をはぎ取って。

初めて見た利加さんの体に。

…利加さんはもう何も言ってくれなかった。

俺が途中から理性無くして。

好き勝手に女みたいに抱き始めたら。

ただ耐えるだけになった。

声も聞かせてくれなかった。

怒りにまかせて責め続けても。

何も言わなかった。

利加さんの薄い胸に口づけるとそれなりに反応はするけど。  
ただそれだけだった。

俺は。

利加さんに訴えられたらこれって強姦罪だろうか？とか。  
バカなことを思いながら。  
利加さんを責め続けたんだ。

…俺にかかれば男の利加さんだってメロメロにしてやるって。

そう思いながら。

…果てた。

利加さんの足の間から。  
自分自身を抜いて気づく。

利加さんは…気絶してたって。

それでも俺は欲情してる自分に  
気づくんだ。

利加さん中毒だって。

### 思い全て 3

可哀想な利加さんは。

手は固定されたままだとやっと俺も気づいた。

瞳は固く閉じていて。

頬には涙の痕が。

…もう俺に笑いかけてくれないんじゃないかとか。

酷いことをしてしまったという自覚だけはあるけど、でも謝る気になれなかった。

だっていつか。

そういつかは俺だって利加さん抱きたいって思ってたし。だけど我慢してたんだ。

利加さんの体への負担とかそんなの調べたら。

…容易なことではないことだけは判って。

…利加さんが身をよじるからいけないんだ。

俺はカツとなったんだ。

澄香にはキスさせたくせに。

俺にはさせないつもりかよとか。

潔癖なくせに無抵抗だったこととか。

あれだけ俺が強引にしようとしたら舌噛みますって言ってたくせに！！

澄香のキスだって多分舌入れられてたくせに何もしないだなんて！

！！

…俺がどれだけ悔しかったか。  
どれだけ腹が立ってめちゃくちゃにしてやりたかったか。  
利加さん判ってない。

「…泣いてるんですか？」  
気づけば利加さんを見下ろして。  
泣いてる自分がいて。

その涙が利加さんの頬に落ちたらしい。  
俺は利加さんの封じられた手をベッドヘッドから解いて  
自由にしてやった。

利加さんが気づいて。  
うつすら瞳を開けて。  
言った。

「…ごめんなさい。」

えっ？  
何の謝罪だよ？

謝らないといけないのはこっちの方で。  
…意味が判らなかつた。

「…ごめんなさい。こんなことになっちゃって。利加さんが起きあがるうとしたから。手を貸そうとしたら。」

その手は宙をかいて。静かに避けられた。

ベッドに起き上がった利加さんは。シーツを手繰り寄せて身を隠す。そして言うんだ。

「…この事は忘れてください。お願いします。静かに。でも強く。」

俺はそれを聞いて利加さんに避けられた手で利加さんの腕を掴んだんだ。

利加さんは怯えの表情を瞳に称えたけど構わずに引き寄せて。

「利加さん。あんた忘れろってどういうことだよ？」  
関を切ったかのように俺の口は言葉を紡いだ。

「俺は忘れない！！」

あんたがどれだけ色っぽかったかとか。

あんたがどれだけ喘いだかとか。

あんたがどれだけ…！！！！」

「やめっ！！！！」

利加さんは顔を背けて。

「…もう止めて。」  
懇願する。

俺は許せなかった。

向き合おうとしない利加さんに。  
腹立たしくて。

唇を寄せて。

俺は強引にまた利加さんをベッドに押し倒したんだ。  
利加さんは派手に抵抗する。  
だけど。

俺は強引に両手を片手で封じて。  
利加さんの薄い胸に口づけた。

「やだ!!! やっ!!!」  
利加さんは派手に暴れて。  
抵抗する。

その瞳に。

その声に。

その体に。

俺は欲情したんだ。

「…もういい加減観念しろよ。」

一回抱かれたんだから二回抱かれようがあんたにはあんまり関係

ないだろう?」

俺が口づけながらそう言つと。

利加さんは言つたんだ。

「違つつ!!」

僕はあなたにこんな後悔するようないふこととして欲しくないだけで!

「!!」

息は上がつて。

利加さんは俺を泣きそつな表情で見つめたんだ。

ヤバい。鼻血吹きそつ。

俺の欲情に火をつけて。

そんな表情で見上げてくるなんて。

反則だ。

俺は薄い胸に口づけながら。

「だつたら好きにさせて?」

無体な願いだと思ひながら言葉を紡いだ。

利加さんは案の定首を振つて嫌がる。

「嫌です!!放して!!!」

そんな利加さんを俺は苛めたくなくて。

言つたんだ。

「利加さんさ。俺があれだけで満足するとても思ってるわけ？」

「え？」

「俺さ。あんたには手加減してたわけ。

だからかなり溜まってるんだ。」

「~~~~っつっ!!!!」

「あんたさ。俺を好きだっけって言うてくれたときにいつかはこういう時が来るって判ってたはずだろ？」

判ってたくせに往生際悪すぎだろっけ!!

淳也にだっけって翼にだっけって容易にキスされてるくせに何で俺のときだけそんなに抵抗すわけ？」

利加さんは真っ赤になって。

無視に入っただから。

俺は更に問い詰めたんだ。

「そのくせあれだけ綺麗に喘いで。

俺には我慢しろっけか？」

ふざけんなよ!!」

俺は噛みつくように利加さんにキスをした。

「……っだから。」

利加さんが消え入りそうな声で。

キスの合間に何かを言った。

「何？」

俺はキスをするのは止めなかった。

「……っだから。」

キスする場所を変えて。

俺は首筋に移動して。  
キスを落とす。

「あっ！！」

ビクンと利加さんが震える。

そして意を決したように。  
言っただ。

「だって自分が怖かったです。」

俺はそれを聞いて。  
また酷くしたくなったんだ。

## 思い全て 4

俺ってば飢えてたんだな。

うっくん。鼻血吹きそうになりながらヤバい考えが頭をもたげる。

例えば利加さん縛りあげて。

この部屋に監禁して。

好きなだけ抱いて。

…抱いて抱いて抱きつくして。

利加さんの体全部俺で埋め尽くして。

もう嫌だと泣いても許さなくて。

そして。

服も着せない。

好きな時にやれるようにずっと服なんか着せない。

ヤバい。また吹きそう。

天下の結城綺羅が男なのに利加さんの体にだけこんなに反応するなんて。

ずっと裸で居させてうふふふ。

ああ。ヤバい。

俺は頭を振って。

流石にそれは犯罪だと理性の声を聞く。

そして。

俺が力任せにねじり上げた利加さんの腕を放したんだ。  
そしてキスした。

初めはついはむように。

そして深く。

舌を入れて蹂躪して。

利加さんが苦しくて俺を叩くまで。

「…もうやめっ！…！」

利加さんは必死で。

俺を見上げて。

触れ合ったところから熱を感じた。

もう何でこんなにウブなんだよ。

俺ってば怒ってたし。

めっちゃめっちゃしてやりたいのに。

口づけただけでイッチャいそうで。

利加さんの薄い胸は。

綺麗なピンク色してて。

でも確かに判ったことは。  
俺はもう利加さんの味知っちゃったからますます離せなくなったこと。

そして。

利加さんが嫌がってもまた襲うだろうと思うことだった。

俺は利加さんをつぶさないようにやんわりと抱きしめて。

「…俺あんたのこと離せないかも。」

そう呟いたんだ。

利加さんが何を思ったか全く判らなかつたけど。

でも。

「でも愛してるから。」

そう呟いた。

利加さんは声を殺して泣き始めた。

「~~~~~っ。」

「…ごめん。怖がらせて。」

抱いたことに謝罪はしないけど。

だって俺別に悪くないもん。

だけど怖がらせたことについては謝罪したんだ。

「でも利加さん。」

俺は名前を呼んで。

視線を合わせた。

「…俺あんた抱いたこと後悔なんかしないから。  
あんたがどれだけ嫌がってもまた多分抱く。  
覚悟しろよ?」

「……なのに?」  
「うん? 聞こえない。」

「…僕なんか抱いても何もならないのに?」  
俺は利加さんの腰に手をまわしてやらしく触った。

「~~~~っ!! やめっ!!」  
すぐに息が上がる利加さんに。  
俺は薄笑いを浮かべて。

「何で? こんな感度良いのに?  
そこらへんの女より利加さんの方が感度よさそうだし?  
俺抱いてて楽しかったけど?」  
…強姦に近かったけど。

「止めてください!!」  
そんなの良いわけないじゃないですか!!」  
利加さんは俺の手を振り払おうとした。  
「…俺はあんただから抱きたいんだよ!!」

そう言うとまた利加さんが声を殺して泣きだしたんだ。

「俺は利加さんが好き。  
あんたを誰にも渡す気無いから。  
例え澄香にでも。絶対に触らせない!!」

利加さんの腰に手をまわしたまま俺は眠くなって泣いてる利加さんを宥めながら寝たらしい。

気づけばもう。  
昼前だった。

## 扉 1

寝過ぎでガンガンする頭を振って俺は起き上がって。  
そうだ。利加さん。

そう思ったんだ。

ふっを見ると。

共有の机にメモが乗ってた。

斜めのくせのある字は利加さんので。

綺羅さんへ。

おはようございます。

今日の収録は午後2時からだそうです。

先ほど澄香さんに連絡を入れてスケジュール調整をしてもらいました。

僕は今日は9時入りで翼さんのドラマの収録がありますので先に行きます。

利加

俺は回らない頭で読んで。

ハッとした。

誰にもやらないとか言いながら。

結局俺は利加さんを抱くだけ抱いて寝てしまつて。  
後始末もしないで。  
ちゃんと服も着せられていて。

…その意識もなくて。

犯された利加さんはきつと体だつて辛いはずで。  
それなのに俺を起ささずに先に行つて。

俺は時計を見る。

ヤバイ。

12時回つてんじゃん。

俺は昨日着てた黒い服に着替えてスペアで鍵を閉めた。

俺が蹴りを入れた玄関はチェーンが壊れて無残だつたけど。  
そんなのに構つてる場合じゃなかった。

Rucypherの収録をするAスタに着くと。

利加さんが翼の化粧直しをしてるところだった。

澄香も隣にいて。

相変わらず凄い化粧だったし。

しかも昨日あれだけ利加さん脅して酷いことしたくせに。  
つて俺が言える立場じゃないんだけど。  
つてか俺の方が酷いか…。

利加さんは翼に笑いかけて。

唇に黒いルージユを引く作業をしてた。  
淳也は澄香にアイライン入れられていて。

「ああ。綺羅。」

真っ先に俺を見つけたのは翼だった。

「…よう。」

利加さんは俺に視線を合わせなかった。  
ただ俺を見ないようにして。

「…綺羅さんも澄香さんに化粧してもらってください。

それから今日からRucypherは4人になりますのでよろしく  
お願いします。」

そう言った。

何気ない言葉なのに俺は避けられたと勝手に傷ついて。  
つてか避けられて当然のことしたんだけど。

だけど何か腹立たしくて。

「翼さん。どうです？」

も少し塗ってみます？」

鏡を見せて翼に微笑んで聞く利加さんの態度にも腹が立って。

「…これって歯も黒くなんの？」

そう言っつて利加さんを笑わせるしぐさの翼にも腹が立って。

「…利加さん。俺のメイクは？」

静かな声で聞いてみた。

「え？」

利加さんがやっところつちを向いた。

「だから俺のメイクは？  
利加さんがやるんだろ？」

「いや。今日は朱実さんが…。」

時間が無いから僕がやってる場合でもないんで。」

利加さんは俺を見ただけ。

その瞳に何も映してくれなかった。

それを聞いて俺はその辺にあつた椅子を蹴飛ばしたんだ。

自分でも何にイラついてるんだか判らなくて。

でも遣る瀬無くて。

「おいおい。綺羅。

何イラついてる？」

そう言う淳也にも腹が立って。

そして。

俺は利加さんの腕を掴みに行ったんだ。

利加さんは俺を見つめた。

一瞬鋭い眼差しを向けて。

だけど俺にはそんなのどうでもよかつた。

昨日の無かつたことにする利加さんに腹が立って。

そしてこれは嫉妬だつたんだ。

利加さんが翼に笑いかけるだけで。

死にそうなくらいムカついて。

「いい加減にしてください!!」  
利加さんの腕を強引に掴んだら。  
利加さんが大声を出した。

「…あなたは結城綺羅なんですよ？  
一体何考えてるんですか!!  
社会人の自覚は無いんですか!!  
澄香さんがどれだけ尽力してスケジュール調整に走ったか判つて  
るんですか!!」

俺は利加さんの両腕を掴んで。

「あんたこそ判つてんのかよ？」  
低い声で囁いた。

その時Aスタから声がかかって。  
淳也たちは澄香連れて収録現場に入って行ったんだ。

翼が言った。

「…俺たち先に行くから利加さんと綺羅で何とかメイクしてこいよ。」

…チツと利加さんが舌打ちをして。

「…すみません。翼さんたちなるべく早く綺羅さん合流させますので。」

そう言つて俺に両腕掴まれたまま利加さんは淳也たちを送り出したんだ。

俺は利加さんを掴んだまま。

怒りは収まらないし。  
放す気もなかったし。  
寧ろまた抱きたい衝動に駆られた。

「…利加さん。」

俺が呼びかけると利加さんは視線を合わせなかった。  
俺は頭に来て無理やり上を向かせたんだ。

「あなたは何を考えっ!!!」

利加さんは俺に上を向かされて。

俺は噛みつくようなキスをしたんだ。

「何を考えてるって?」

俺はムカついてムカついて。

どうしようもなくて。

「…利加さん。あんなのことだよ。」  
頬を歪めて。

俺はわざと凶悪な表情を作った。

「昨日のあなたは綺麗だったとか。

今だってその澄ました顔を汚してみたいとか。

その服の中破ってみてみたいとか?

あんなのアツイ中入ってみたいとか?

「止めてください!!!」

聞きたくないです!!!」

利加さんは俺の手から離れようとするから。

俺は逆に力を込めて。

「俺言っただろう？」

あんたを逃がさないって。

あんただって乗り気だったじゃん？

昨日はあんなに乱れていつもの澄ました利加さんはどこへやらで。

あんたその辺の女よりずっと色っぽかったし？」

「~~~~やめっ!!！」

∴ 酷いこと言ってるって自覚はあったんだ。

これはまさしく翼に対する嫉妬で。

利加さんが笑いかけたからで。

「∴ 俺あんたを放す気無いから。」

利加さんの細い腰に手を回すと。

利加さんはへナへナと座り込んだんだ。

そして言うんだ。

「∴ 僕にどうしろって言ってますか。」

僕に何にもするなって言いたいんですか？

そんなの不可能なことくらいあなただって判ってるでしょう？」

∴ 俺は。

崩れ落ちた利加さんにやっと理性が戻ってきた。

「判った。」

俺は利加さんの腰に手をまわしたまま。

「じゃあ。仕事が終わったらゆっくりと時間とってもらおう。」

それで今のところは手を打ってやる。」

ニヤリと笑うと。

「…何が手を打ってやるですか。

自覚持つてください！！」

利加さんは座り込んだまま俺を見上げたんだ。

利加さんが崩れ落ちて気づいた。

利加さんも体が辛いのが何となくわかったから。

だから俺は無体なことが出来なくなつて。

仕方がないから自分から妥協案を出したんだ。

メイクは朱実と利加さんの2人がかりでやられて。

俺はAスタに遅れること15分が入ったんだ。

## 扉 2

「結城綺羅さんはRucypherが4人になったことに依っての  
利点は？」

「つまらないMCが聞いてくる。」

俺は人の良い笑みで。

結城綺羅を演じる。

みんなの結城綺羅のイメージは。

誰かれ違わず仲良くできて。

仕事熱心で。

女グセ悪くて。軽くて。

でも綺麗で。

本心は絶対見せないし言わない。」

「澄香はローディやってたらしいから。」

俺は笑みを浮かべながら。

澄香を見る。

澄香よりヤバい思考なのは自分だと理性が呟く。

「利点はそうですね。」

「パート交換とか？出来るとことか？」

「澄香さんは裏DESTINYだったと聞いてますがその点に  
関しては？」

「…いやあ。手強いっすよ。」

俺もつかつかしているとRucypherのヴォーカルの座危うい

かも？（笑）  
「  
なんて返す。」

大体リハーサル通りで。

俺は片隅で見てる利加さんがハラハラしてる様子に気づいてた。  
俺がヤバいから。

俺の思考がヤバいから。

いつ澄香に掴みかかるかとか多分心配してるんだろっと思っ。

「では歌っていただきましょう。」

R u c y p h e r で D E S T I N Y ! ! ! ! !

俺らが4人になって初めての曲はDESTINYのカヴァーだった。  
途中で俺と澄香の立ち位置が変わり。  
澄香は澄香でDESTINY時代の歌い方で。  
俺はこのバンドの歌い方で。

歌うんだ。

澄香は上手かった。

俺には出来ない歌い方で観客を魅了する。  
それで気づく。

澄香の心は壊れていて。

利加さんが言うように破綻状態だけ。

治る余地があるって。

「…お疲れ様です〜。」

利加さんが楽屋に先に帰っていて。  
飲み物とか軽食を用意してた。

「良かったですよ。ってか久しぶりに3人そろって。  
澄香さん加えられて良かったです。  
久々感動しちゃいました。」

それは俺にじゃなくて淳也や翼や澄香に向けてだった。  
それすら腹立たしい俺ってやっぱ終わってる？

「利加さん。」

俺が呼びかけると。

一瞬嫌そうな瞳を向けて。

「…なんですか？」  
聞いてきた。

「…酒は無いの？」

俺は無性に飲みたくて。

多分欲求不満で。

多分嫉妬で。

「…はあ？」

利加さんは俺を見て。

「…冗談は休み休み言ってください。」

「何考えてるんです？ 仕事中でしょ？」  
嫌そうに言った。

「おいおい。 綺羅。 お前どうしたんだよ。」

酒って昼間っから飲んだらライブどうすんだよ？」

淳也が言った。

「綺羅さん。 どうしちゃったんです？」

俺が昨日キレた諸悪の根源澄香が口を挟むと。

俺はキレたんだ。

「てめえが入ったせいで俺は！！！！」

やつあたりだつて判ってるのに止まらなかった。

利加さんが笑いかけるのだって気に食わなかった。

「ヤバい思考でヤバい化粧して他人に頼るなんざお前最低だよ！！」  
違う。 最低なのは俺だった。

嫉妬はすべて澄香に向けて。

俺は言葉が止まらなかった。

「大体復讐心で化粧続けて。」

ヤバい思考で。

お前甘えてんだよ！！」

「綺羅さん！！！！」

大声で遮ろうとする利加さんにさえ俺は当たり前たくなって。

「利加さんだつて何考えてんだよ！！」

昨日あんなひどい目に遭ったくせに普通に接するなんてあんなホントは淫乱なんじゃねえの？」

…言うてから。

利加さんの表情に俺は。

息をのんだ。

ヤバいつて思つて。

遅かった。

バシッ！！！！

良い音がして。

俺は初めて利加さんに殴られたんだ。

利加さんは大粒の涙をためて。

その様子を見て澄香が楽屋を出て行ったんだ。

「澄香さん！！！！」

利加さんは俺を激しく見つめて。

「綺羅さん最低です！！！！」

そう静かに言って澄香を追いかけて行った。

「…綺羅。どうしちゃったんだよ。」

「綺羅って。」

「うるせえ!!」

俺は遣る瀬無くて。

ただ利加さんを好きだけなのに。

念願かなって抱けたのに。

何で。

何でこっぴどいされないんだ？

「…利加さんに淫乱って一番合わない形容して。

傷つけていったいどうしたんだよ。」

翼がため息をついたんだ。

俺は声を殺して泣いていた。

利加さんに殴られた頬が痛くて。

泣いていた。

「…好きすぎて辛いんだよ。」

腹立たしいんだよ。

俺以外に笑いかけんなって思うんだよ!!」

独りよがりの思いは。

辛くて。

辛くて死にそうだった。

「どこまで知ってるの？」

僕が追いかけて行って。

立ち止った澄香さんに後ろ向いたまま言われた。

「えっ？」

「だからどこまで知ってるの？って聞いてんの！..」

澄香さんは僕に掴みかかって。

振り向いて。

「だから何がですか？」

僕はスタンス崩しちゃいけないって思ったんだ。

「俺のこと笑ってるわけ？」

結城綺羅と2人で。

嘲笑って楽しい？

俺がどんなに。

どんなにか苦しいってのに？」

「何を笑うって言うんですか？」

あなたを僕が笑って傷つけて何か得ることはありませんか？」

…僕は。

だって僕は。

結城綺羅とは違う。

結城綺羅とは根本的に違う。

庶民だし恵まれてないし。

寧ろ自分に自信が無くて愛されてる保証なんか無いから。

「…昨日あれからどうしたの？」

「やっぱり手の早い結城綺羅はあんたをやっちゃった？」

「下卑た笑いを浮かべたまま。」

澄香さんは僕を掴んで言った。

「…俺はあんたをめちゃくちゃにしてやりたい。」

「あんたの幸せなんか壊してやりたい。」

「あんたなんか！！」

僕は動揺しまいと思った。

だって動揺して煽られたらきつと負けだ。

「…良いですよ。僕幸せなんかじゃないし。」

「あなたがそれで気が済むならやってみればいい。」

「そんなことで心が晴れるなら澄香さんおかしいでしょ？」

「本当は判ってるでしょ？」

人を羨んで。

復讐に燃えて。

それで済むならやってみたらいい。

僕は学んだんだ。

生きてきてずっと。

「自傷行為をいくらしたってだれも救われなくて。」

「寧ろ自分も人も傷つけるって判ってるでしょ？」

僕は首元を掴まれたまま視線を合わせた。

「…僕はあなたが今のは悪くないって知ってます。」  
静かに言ったんだ。

「え？」

「だから戻ってください。」

あなたは Rucypher の一員です。

これからずっと。」

「…だけど結城綺羅が…。」

「結城綺羅なんかには負けなideてください。」

僕はあなたがちゃんと立ち直れるって信じています。」  
息を吸って伝える。

今の僕には結城綺羅の方が判らなかつた。

あんな風にイライラして。

人に当たるような人じゃないはずなのに。

言ったらいけないことぐらい判ってる人だったはずなのに。

なのに澄香には言ったらいけないことを言った。

僕は混乱して。

判らないと呟いた。

僕は澄香を伴ってAスタの待合に戻ったんだ。

僕は手を握りしめて。

結城綺羅を見据えた。

「…澄香さん。夜のライブまでどれぐらい時間ありますか？」

利加さんが澄香を伴って帰ってきた。

俺はそれすら腹立たしくて。

椅子とか蹴飛ばしたい衝動に駆られた。

「あと2時間で入りだけど？」

それを聞いて利加さんが。

「綺羅さん。僕と話をする時間もらえますか？」

そう聞いてきたんだ。

淳也と翼に向けて利加さんはまた口を開く。

「…翼さんと淳也さんと澄香さんのヴォーカル以外の場所もアレンジしてほしいんですが。」

「…綺羅は？」

淳也が聞いた。

利加さんはそれを受けて。

「…結城綺羅さんはちょっと自覚を持ってもらわないといけないんで別行動です。」

「勝手に決めんなよ。」

俺は声高に言った。

「何なの？あんだ。」

俺の行動勝手に決めんじゃねえよ。」

「…ふざけんじゃねえ!!!」

初めて聞いた敬語じゃない利加さんの言葉に。  
俺と翼と淳也と固まったんだ。

「いちいちいちちやること為すことあなたは盾突いて。  
ご不満なら僕はすぐにでもこの仕事辞めますが？  
あなたは今日は口が過ぎました。  
だから今から叩き直そうと思ってます。」

利加さんは珍しく俺の腕を掴んだ。  
その仕草は当たり前前だけど男らしくて。

「放せよ!!!」  
「放しません!!!」

僕は今日はキレました。(怒)  
言うこと聞いてもらいます!!!」

その剣幕はすごくて。  
引っ張られるまま部屋を後にしたんだ。

淳也と翼は利加さんに言われたとおり澄香とアレンジをしまして。  
俺は利加さんに引っ張られて。

車に押し込まれた。

「さあ。今から2時間です。  
何が不満なのか僕は聞きたいんですけど?」

利加さんの手が離れて。  
俺は不服だった。

何が不服って利加さんが見当違いも良いとこだし。  
車に押し込まれてもここじゃやれないじゃん？なんて思っ

「…ここじゃ出来ないじゃん？」

俺は恥を忍んで言ったんだ。

「は？何をですか？」

疎い利加さんにはこんな言葉じゃわからない。

首を傾げる利加さんに。

俺は耳元で囁いたんだ。

「…あなたの事抱けないじゃん？」

「~~~~っ！！僕はそういう話を聞きたいんじゃない！！

あなたが何でイラついてるか聞きたいだけで！！！！」

「俺がイラついてる理由は！！

あんたが澄香にすら優しく笑いかけるからだよ！！」

「言ってることめっちゃくちゃです！！！！」

「判ってるよ！！そんなことは！！

だけどあんたを見ると欲情してる自分がいて。

我慢できないんだ！！！！」

俺は今度は利加さんの腕を掴んで車から出た。

「ちよっ！！！！どこへっ！！！！」

「あんたを抱ける場所。」

「~~~~っ！！！！」

「何考えてっ!!」

「あんたのこと考えてるよ。」

「どうやったら綺麗に喘ぐかとか。」

「どうやったらイクかとか。」

「~~~~~っ!! やっ!!」

「放して!!」

利加さんは派手に暴れる。

俺はそれをやすやす封じながら俺の隠れ家向かったんだ。

元々母親の家事部屋だから。

簡易のベッドと毛布はあつて。

俺は利加さん突いて部屋に押し込んだ。

本当はちゃんと話もしないといけないのに。

その理性は言ってるのに。

欲望が勝つて。

…部屋の鍵を閉めた。

利加さんは怯えの表情を見せて。

俺を見た。

「利加さん。あんた自分で俺のところに飛び込んできたんだよ？」

2 時間ももらってくれて。

3 回ぐらいは抱ける時間があるじゃん？」

俺が嫌な微笑みを浮かべると利加さんは後ずさって。

やっと事の重大さに気づいたみたいだった。

「…こんな事で？」

あなたはイラついて人に当たってたわけですか？」

怯えの瞳で俺を見て。

俺はぞくぞくする。

「最低です！！あなたの理性はどこに行っただんですか！！」  
虚勢を張るその声にうっとりして。

俺は利加さんの腕を掴んで押し倒した。

嫌がる表情とか。

仕草とか。

白い胸とか。

もうホント俺がやられる要素満載で。

キスしたら噛みつかれたんだけど。

余計に興奮しちゃって。

喘がせてキスして。

俺が果てる頃には利加さんは何も言わなくなってた。

ってか言いたくても俺がすぐにキスで塞ぐし。

常に酸欠状態みたいに喘ぐし。

また喘ぎ方が色っぽくて。

どこもかしこも俺で埋め尽くして。

俺しか感じないようにしてやりたいって思う。

ホント好きなんだよな。

俺。利加さんの体も。心も全部。

そして利加さんは失神した。

多分おこちゃまには刺激が強すぎの愛撫だったんだろうって思う。

俺はそれでも満たされなくて。

きっと利加さんに飽きることなんかないんだろうって。漠然と思っ  
たんだ。

利加さんの顔を見つめながら俺は思ったんだ。

俺は失神した利加さんを腕の中で抱きしめて。  
やっと気づく。

俺はおかしいって。

判ってるのに。

手放せないし。

嫉妬心だけ芽生えて。

抱けば抱くほどに利加さんの体も心も全部ほしいし。

「…あなたはこんなこと望んでたんですか？」

いつの間にか利加さんが気づいていて。

俺は腕の中の利加さんを見つめた。

「~~~~っ!!」

「大丈夫？」

俺が聞くのも変だけどころかなり無理させたとちよっと思っ

「…全く綺羅さんは。」

利加さんは少し微笑んで。

「…無理させてごめん。」

それは本当の気持ちだった。

「…もうこれっきりにしてください。」

僕はこんなんじゃないじゃ身が持ちません。」  
利加さんは真っ赤になって咳いた。

「！！」だけど。

俺あんたのこと大好きで体も心も全部ほしくて。」

「…だからって仕事に支障きたして僕はいただけませんか?」

そう言つて利加さんはため息をついて。

真剣なまなざしで俺を見た。

「…僕が綺羅さんを好きだつて言うだけでは足りませんか?  
信じてもらえないですか?」

「…信じてる。信じてるけど。」

俺は不安で。触れてないと確かめないとダメになりそうで…。」  
「…バカ。」

そつだよ。俺はバカだよ。

あんたに狂つてるよ。

「…仕方ないので僕からの提案聞いてくれますか?」

「…ん?」

「…明日がオフって判つてるときはあなたが好きにして構いません  
から。」

だからとにかく仕事に支障をきたすのだけはやめてください!!  
じゃないとホント結城綺羅も R u c y p h e r も破滅ですよ!!」  
利加さんはそう言つて俺に口づけた。

「え?え?」

えええ〜〜？マジで？

いいの？そんな言ったら利加さんオフの日は服すら着せないよん？」

「…じゃないですか！！」

利加さんは真っ赤になって。

「こんなところで強引に襲われるよりマシです！！」  
そう言ったんだ。

俺は何だかくすぶつてたのがウソみたいに晴れて。  
ルンルン っで感じて。

俺は。

「じゃあ仕事ちゃんとするから。

約束するから。」

そう言って口づけたんだ。

何があっても揺るがない証が俺は欲しくて。

俺は強引に利加さんに取り付けた証では。

満たされないけど。

でもそれでもいいって思えたんだ。

「…ここは離れですか？」  
利加さんが部屋を見回して言った。

「こんなところにこんな和室があるなんて知らなかったです。」  
利加さんは服を着ながら言う。

「…俺の母親の。」  
前使つてた家事室なんだ。」

「…お母さん？」  
「…そう。俺を生んですぐ死んじゃったけど。」

「…ごめんなさい。」  
「…何で謝るの？」  
俺別に気にしてないし。

それに俺まだあんたをここに連れてくる気無かったし。」  
「…？」

「だって隠れ家ぐらい持つときたいじゃん？」  
利加さんは俺を見て。  
時計を見て。

丁度さつきから一時間半経ったところで。  
ため息をついて言った。

「…じゃあ一人でライブの入りまでに来られますね？」  
念を押した。

「…??どういう意味？」

俺もジーンズ穿きながら。  
聞くと。

「…ちよつと体辛いから僕はシャワー室に行つてきますから。」  
顔を真っ赤にして言うんだ。

「…多分30分では無理だと思つから。  
良いですね？」

利加さんは立ち上がった。

折角のスーツもしわしわだった。

俺があれだけ乱暴にしたから。

ちよつとだけ自己嫌悪で。

それで駄々をこねたくなつた。

「ヤダ。」

「は？」

「俺もシャワー浴びに行く。」

「~~~~!!何考えてっ!!」

「…あと30分弱で現場にいればいいんだろ？」

「…そりゃそうですけど。」

「だったら利加さんとシャワー浴びに行く。」

「僕は嫌です!!」

どうしてもって言うなら僕はあなたとは違つところに行きます!

「!」

利加さんの警戒の仕方に俺はおかしくて。

「違つって。」

あんた何意識してんの？

ヤラし〜〜。」

「〜〜〜っっっ！！！」

俺がにやにや笑うと利加さんの腕をつかもつとしてた手をはねのけられた。

「だって利加さんふらふらだし。

俺としては心配なわけ。

あんたをシャワー室まで送ったらちゃんと現場に入るから。」

「〜〜〜っっ！！誰の所為だと思っつてっ！！！」

「はいはい。俺の所為ですな〜。」

あんたがシャワー浴びたいのもシャツがしわしわなのも全部俺の所為ですね。」

「変態！！スケベ！！サド！！！」

可愛くない言葉を紡ぐ口は塞いで。  
息も絡め取るぐらいのキスをして。

本格的に力が抜けるぐらい感じさせて。

俺はそれでも利加さんに飢えてた。

俺は利加さんを抱きしめて。

立たせた。

時計を見て流石にヤバい時間になってきたから。

手を引いて隠れ家を出た。

そして現場に行く道すがらの。

あんまり人が来ないシャワー室に利加さん連れ込んだんだ。

「ちゃんと鍵をかけて。」

利加さんの事俺心配だから!!」

俺はうるさいぐらいに利加さんに言ったんだ。

「それから。」

と付け加えた。

「はい?」

「…利加さんのその服利加さん襲われたのもろバレだからコレ着ておいて?」

俺は自分が着てた自前の服を渡した。

利加さんは受け取って。

「…タバコ臭い。」

そう言った。

「もう〜。それぐらい我慢して?」

俺はシャワー室に利加さん押し込んで。

流石にヤバい時間だとシャワー室後にしたんだ。

シャワーを浴び始めた音がして。

俺は何だか反応する自分に鞭を打ち。

泣く泣く現場に向かったんだ。



その日のライブは公使館ライブで。  
大体2時間前に現場に入って化粧をする。

7時開演だから5時からメイクをする。

澄香がメイクの朱実を手伝い一番厄介な俺のメイクを施していく。

その姿を見ると俺もむげにR u c y p h e rに入るなどか言えなくて。

仕方ないから俺は澄香に言ったんだ。

「澄香さんさ。」

「はい。」

俺は鏡の前で朱実にメイクをしてもらいながら澄香に言った。

「…俺別にDESTINYの歌い方に反対じゃないから。」

「え?」

「ってか。何て言うの?」

パート変わっても結構イケるとか思ったんだよね。この間。

だから淳也たちさえ良ければキーボードとかもやってみたらいい  
って思うんだけど?」

「…俺にやらせないくっって怒ってたんじゃないんですか?」

「ってかお前ヤバいんだもん。」

その化粧とか。やることとか。

でもちゃんと首つりとかリストカットとかしないって約束できるなら Rucypher にいたらいいって思うけど?」

「…それってホントですか?」

仕方ないじゃん。利加さんがそう言うんだもん。

その言葉は呑み込んで。

俺は頷いたんだ。

「すみません」。遅れました」。

その時そう言っただけでメイク室に利加さんが入ってきて。

その利加さんに澄香が抱きついたんだ。

「利加さん!!きいて!!」

今結城綺羅からお許しが出たんだ!!」

「…?」

利加さんはびっくりした様子で固まって。

「え?え?」

そう言っただけ。

「だから Rucypher に入っただけでいいって。」

満面の笑みで澄香は利加さんに抱きついて。

俺は鏡越しに腹立たしくて。

でも今剃刀で朱実が眉を整えてるところだから動けなくて。

「え」。良かったですね」。

利加さんはそう言っただけでやんわりと澄香の腕から抜けようとしているの

に。澄香はさらに力を込めて利加さん抱きしめる。

「…ちよつと苦しいんですけど?」  
利加さんがそう言つてやつと澄香が離れた。  
そして。

「…利加さんそれ私服?」  
澄香が聞いたんだ。

「は?」  
利加さんは俺が渡した服が大きかったのか何だか肩口が大きく開いてて。

「ああ。ちよつと借りものです。  
スーツぐちゃぐちゃになったもので。」  
「…つか利加さん。その方が似合ってるし」。

ヤラシイ(と俺には見えた)視線を利加さんに向けるな。(怒)  
利加さんは俺のだ。

「…はあ。そうですね?」  
利加さんは取り合わないで。  
「ところで澄香さん。  
立ち位置の件なんですけど。」

仕事の話を始めたんだ。  
ひと通りの打ち合わせは利加さんと澄香で済ませて。  
それから俺たちと打ち合わせをして。  
本番に臨むのがいつものパターンだから。

淳也たちもメイクが終わり合流する頃には本番30分前。

俺はライブハウスの移動のとき。  
利加さんに後ろから近づいて。  
耳打ちした。

「キスマーク見えてるよ。」  
って。

利加さんは俺をにらんで。  
知らんぷりした。

でも俺の服着させると何かホントに利加さんが自分のものになった  
ような気分になって。

ちよつと優越感だった。

軽いトランス状態って言うか。

あの服の下は全部俺のものだとか。

ヤバイ。また鼻血吹きそうになって。

でもそれもライブが始まる瞬間にはちゃんと消えて。

俺は結城綺羅を。

そしてRucypherを演じるんだ。

## 君への言葉 1

翼のドラマはやっと大詰めに向かって。

利加さんは何故か相手役の泉？とかいう女の役を買って出た。

ライブが終わったら俺はってか正式には俺と澄香は5日間のオフに入る。

それは歌手の命とも言える喉の使い過ぎにならないように強制的に休めと上からのお達しだった。

ポリープとか出来て手術とかになったら半端ないし。

んでギターの翼は関係ないからオフじゃないわけで。

淳也も関係ないんだよね。

楽屋は今度は翼のドラマ一色になったんだ。

ってか俺は面白くなかった。

だって利加さんが台本持って翼の相手役の女演じるんだもん。

俺はオフなのに楽屋に入り浸って。

面白くな〜〜いと駄々をこねた。

あともうひとつ面白くないことが今度は利加さんの口から発せられた。

「は〜〜〜?」

俺が素っ頓狂な声を上げると。

利加さんはコーヒを翼に渡しながら。  
俺に冷たい視線を送ったんだ。

「だから僕の家澄香さん今日から来ますから。」

「は〜〜？俺は絶対許さないからな。(怒)」「

俺は口をついてその言葉が出たんだ。

だってそんなんなら利加さんと出来ないじゃん？

「…だって仕方ないでしょう？」

澄香さん見張つとかないとヤバいですよ？」

利加さんが言うのはもっともで。

「でもあんた。あんな遠いところに通うってか？」

「…そんなのは我慢してもらいます。」

「じゃあ綺羅はどうなるわけ？」

ナイスだ。翼。

翼がそこで会話に加わってきたんだ。

「…どうって？」

「いや。だから利加さん。」

綺羅のことどう思ってるわけ？」

「…好きですけど？」

翼は利加さんを見つめて。

「…あのさ。俺にはよく判らないけど綺羅と利加さんは一応付き合  
ってるわけだろ？」

俺が頷くと。

「だったらもし俺が綺羅の立場で自分が付き合ってる相手がまあ勝

手に他の奴を居候させるとか聞いたら怒ると思う。」

「…あの。一つ良いですか？」

利加さんがそこで口をはさんだ。

「…それは重々承知なんです。

綺羅さんに相談しないとイケないのは判ってたんですが。

でも考えてください。僕は男ですよ？

みなさん失念してるようですけど。

綺羅さん以外に僕に何をするって言うんですか！！」

それを聞いた翼が目にも止まらない早技で。

利加さんに口づけたんだ。

つ~~~~ば~~~~さ~~~~ (怒)

殺す~~~~ (怒)

「なっ!!!」

利加さんは真っ赤になって口を押さえる。

「だから隙がありすぎなんだって。利加さん。

これ以上は綺羅に殺されると嫌だからやらないけどあんた結構その気が無い男でも誘ってるんだって。

雰囲気とか仕草で。」

「僕は誘ってなんかいません!!」

「だからそれが誘ってるって言うんだよ。」

利加さんは俺を向き直って。

「…僕誘ってませんよね？」

真剣に聞いてきたんだ。

俺は何だか充てられた感じがして。

「…誘ってんじゃないの？」

一言言っただけだ。

「だけど！仕方ないんですって！！」

澄香さんの面倒見るって決めたときから条件には入ってたんですよ？

ヤバいから見張ってないと死ぬかも知れないって。」

利加さんは殊の外真剣で。

そこには俺たちとは違うマネージャーの仕事内容にも通じるんだよなあとか。

思ったりなんかして。

でどうするか考えたんだ。

利加さんと2人には俺的にも出来ないし。

だからと言って俺が自分ちに澄香入れるのも願ひ下げだし。

って考えたら。

「…じゃあ前みたいに淳也…は無理だな。所帯持ちだし。

翼と俺と澄香で利加さんちに合宿するのは？」

「ああ。俺もそれ考えた。」

翼も結構乗り気だったから。

「お前麻実は？」

聞いてみた。

翼の今カノは麻実という女だったから。

「ああ。昨日別れたんだよね。」

あいつ。なんか俺の気持ちわからないとか？

意味判れないから今はフリーよん。

あいつも利加さんみたいなのウブだったらよかったのにホント長けてやんの。」

利加さんは俺を見て。

「…じゃあ翼さんと綺羅さんと澄香さんで僕の家だったらいいってことですね？」  
そう言ったんだ。

「見張るにもきつと丁度いいんじゃない？」

俺はそう言っただけ結構いい妥協案だったなあとほくそ笑んだ。

だって何かつて時は翼に澄香押し付けて利加さん連れ込めるし？

俺の嫌な笑いに利加さんは引いたらしく。

「…何か企んでます？」

警戒したんだ。

「いや？別に？」

俺はとぼけて知らんぷりを決め込んだ。

利加さん。あんたが悪いんだよ。

あんたが俺を夢中にさせるから歯止めが効かないんだ。

俺は利加さんを次に抱くときはどうしようかなあとかそんなことばっか考えてた。

多分この思考が利加さんにはれたら一生許してもらえないかもしれないけど。



## 君への言葉 2

「で。翼はどうなわけ？」

利加さんが監督の何とかがつてやつに呼ばれて楽屋を出て行った後。俺は翼に聞いてみた。

「どつって？」

「…麻実って結構いい女だったと思うけど？」

スタイル抜群だしモデル志望だけあったと思うけど？」

Rucypherの中でだったら俺と翼は女の趣味がとても似てるから。

胸がでかくて腰が細くて足が長くて。

背は自分よりヒール履いても小さくて。

そんな見かけが好きだった。

「…長けてるって何がさ？」

単刀直入に聞いてみたら。

翼は嫌な顔をして。

「…H。」

ただ一言そう言った。

「ってかあいつ。結城綺羅が1番好きで俺は2番だって言いやがるんだぜ？」

翼は露骨に嫌そうにして。

「俺Hの時にリードしてくる女は願い下げなんだよ。」

髪をかきあげて言うんだ。

「へえ？」

俺は興味深くて。

ってかまあ今は利加さん以外考えられないけど利加さんと出会ってなかったらきつと俺も翼と同じような感じだっただろうって思うし。合わないから速攻で別れるとか。

「ってか付き合ってどれぐらいだっけ？」

「…まだ1週間も経ってないって。」

俺結構あいつ好みだったんだよね〜。」「

「でも許せなかった？」

「ってか興ざめって言うか。」

やっぱり利加さんみたいにウブなのが良いつて思う。落とすの大変だろうけど。」「

「おいおい。利加さんは俺のだぞ？」

「…判ってるって。」

でも何かほら。今相手役に代役立ててやってるじゃん？

あの泉って役の女もろ俺好みなんだよね〜。」「

で。それを利加さんが演じてくれるから更に倍増？みたいな。

あんま俺も性別って関係ないんじゃないかねえ？とかこの頃思うわけよ。」「

「…フリーダムだな。」「

「…綺羅に言われたくないよ。」

お前俺よりよっぽどフリーダムじゃん？

だって抱いたんだろ？利加さん。

どうだったよ？良かった？」

翼はにやにやして聞いてきた。  
「つてか形勢逆転？」

俺はただ翼で暇つぶししようと思ったただけなのに。

「知らん。」

「…知らんつてお前。」

利加さん痛がらなかつた？」

「…そんなん聞いてどうするんだよ？」

「いや。参考のために。」

「…何の参考だよ。」

利加さんのは教えない。俺だけの秘密〜。」

「ええ？教えるよ〜。」

「嫌なこつた。利加さんは俺のだもん。」

「つてか利加さんつて感じやすそうだよなあ？」

「そうそう。もう女じゃないのにヤバいつて感じ〜？」

そこで利加さんが戻ってきて。

俺と翼の会話が聞こえたらしい。

「…綺羅さん（怒）」

何がヤバいんです？」

氷河期みたいになって怒つて入ってきた。

俺は流石にヤバいなあと思いながら口は止まらなかつた。

「ああ。利加さんの感じることかの話。」

翼に教えてたんだ。」

「…翼さんまで（怒）

何考えてるんです（怒）」

「だつて〜〜。利加さん女じゃないのに色っぽいって言うから〜」。

綺羅がこれだけ夢中になるなんてどんなテクでメロメロにしたか気になるじゃん？」

翼が応戦して。

俺は利加さんの腕を引っ張って座らせた。

「ちよっ!!!」

利加さんは不意打ちを食らい俺の隣に腰を下ろした。

「何なんですか!!!」

利加さんは声を荒げたけど俺は翼に煽られて。

キスぐらいしないと収まらなくなっていたんだ。

### 君への言葉 3

「~~~~~!!!」  
利加さんが避けるしぐさをしたから俺カッとなって。  
無理やりキスした。

利加さんはホント生来受けなんだよな。

唇を放して聞いてみる。

「利加さん。こんなんであんた女抱けんの？」  
余計なお世話だろうけど。

「~~~~~っ!!関係ないでしょう(怒)」  
利加さんは息が上がって。  
色っぽくて。

抵抗も弱くて。  
ホントやられた感じ。

「いいよな〜。綺羅は。  
利加さん一人占め出来て。」  
「よくないっ!!」

利加さんは声を張り上げて。  
「何で僕だけこんな目に〜」。  
そう嘆いた。

俺はニヤリと笑って。

「…仕方ないじゃん？あんた俺に出会っちゃったんだし。もう観念しなつて。」

でも結城綺羅に愛してるって言われるなんて結構貴重だと思うけど？」

「…変態。スケベ。鬼畜。サド。」

利加さんは可愛くない言葉を吐いて。俺は利加さんを抱きしめたんだ。

翼は笑いながら。

「ところで利加さん。」  
話を変えた。

「あいつ。澄香の事だけど。」  
「はい。」

「あいつ病院いなくていいの？  
今神経外来とかよく聞くじゃん？」

「…ああ。そのことなんですけど。」  
利加さんが口を開いた。

「…僕明日有休取つて澄香さん連れて行くことと思ってるんです。  
多分カウンセリングが必要だから。」

「…何で利加さんがそこまで澄香にする必要があるの？」  
俺は面白くないで。  
つてか利加さんとられそうだから嫌で。

「…だって何か判るんです。  
僕だって誤認逮捕受けた身としては何か。」

何て言うのかって聞かれると言葉にしがたいんですが。

凍てついた心はそのままでも綺羅さんや翼さんたちのお陰で僕はまだ自分で立っていられるって思っんです。

澄香さんはきつと自分で立ってられないとき自傷行為するんだと思っんです。

極度のプレッシャーだったり緊張だったり。

だから。」

「でもあんた。忘れてないか？

あいつあんたをモノにするって言っただだるうが？

俺と張り合う気満々だぞ。あいつ。」

俺はそれが面白くなかったんだ。

澄香を許せない理由。

それは利加さんを好きだっけ言っただから。

…単なる焼き餅でしかないのか。

「…何？澄香ってそんなこと言っただの？」

翼がにやにやして。

「…綺羅もマジで澄香の言っただこと気にしてるわけ？」

そう言っただんだ。

「…綺羅さん。揺るがない気持ちっただけではまた足りませんか？」

利加さんは真剣に俺を見つめて。

必死だった。

きつとそれ以上に澄香を病院に連れていくのは大変なんだとは思っけど。

「…綺羅さ。お前ちょっと束縛し過ぎだと俺は思っけど？」

翼が言っただ。

「だっけ利加さんそれじゃあ何にも出来ないよ？」

綺羅が束縛してるうちはきつと息苦しくなって逃げ出してしまっ  
よ？そのうち。」

「…綺羅さん？」

利加さんの手は温かくて。

頷かないといけない空気になって。

渋々俺は頷いたんだ。

澄香なんか大嫌いだ〜〜（怒）

結局その日。

利加さんちに俺と翼と澄香で集合して。

合宿が始まったんだ。

## 静かな嵐 1

金のない利加さんは。

いつも通りというか閉店間近のスーパーに立ち寄る。

俺は利加さんにきつく言われてるから。

それを眺めてることしかできないんだけど。

1 回利加さんについてスーパーに入ったら女に囲まれた。

結城綺羅だつて〜。

口々に上がる悲鳴に近い声で俺は気分が悪くなり。

キレそうになつたんだ。

そこで気づく。

自分が結城綺羅だつて。

いつもは結城綺羅だつて思ってるのに。

利加さんという和本名の斎藤綺羅が顔を出す。

それは。

それはきつと。

利加さんには斜に構えないで自然体でいいんだつて思えてるつてこと  
となんだらうけど。

だけど同時にさびしかった。

利加さんとどこかへ出かけるのも一苦勞だつてことで。

利加さんは何も望まないしむしろ与えてくれるだけだけど。

でも俺にはわがまま何も言わないんだ。

女じゃないから面倒なこと言わないのには感謝さえしてるけど。だけどやっぱりどこかで俺には頼りたくないんじゃないかとか。疑念が頭をもたげてくることがあった。

そうなるとネガティブ思考でもない俺が。ぐるぐるぐるぐる考え込むんだ。

利加さん前言ってたんだ。

「僕とは話が5分も持たないってよく言われるんですよ。」  
俺はそうは思わなかった。  
寧ろ興味がありすぎて。  
何から聞けばいいかとかいろいろ考えて。

だけどその時はあんまり聞けなかったように思う。

「…どうかしましたか？」  
気づいたら目の前に利加さんが立っていた。  
「…いや。」

「何か美人さんとかいました？」  
クスクス笑いながら利加さんはそう言う。  
「…何かそんな感じで店の中見てみたいだから結城綺羅の視線を集める美人さんがいたのかなって思って。」

「…いや。利加さんと初めて話した時のこと考えてたんだ。」  
「…そうですね。」

印象最悪でしょ？ってかそれは今も変わらないか？」  
利加さんは軽い口調で言った。

「俺は利加さん初めて見たとき男とは思わなかったよ？  
だって擦れてないし。」

何ての？欲望とは無縁の感じだし。」

「それは綺羅さんの大きな勘違いですね。」

僕は欲望の塊ですよ。」

あれもほしい。これもほしい。」

「だけど自分の力が足りないから大切なものまで逃がしてしまうんだ。」

「…俺が言ってるのは性欲の事だけ？」

「ってか俺ってばやっぱ聞いてみたくて。」

ホントのところ。」

利加さんの本当に自分が初めてだったかどうかが。」

「やっぱ気になるじゃん？」

「~~~~~!!」

「何でそういうふうになるのか僕にはわからないんですけど？」

「だって利加さんウブだから女抱いたことあるのかなあとか。」

「めっちゃ興味あるし。」

利加さんは顔を真っ赤にして。」

「…それにこたえる義理は僕には無いと思うので答えたくありません。」

「そう言ったんだ。」

「もうめっちゃ可愛い。」

「俺は利加さんが歩く前に回って。」

「利加さん!!!俺めっちゃ嬉しいんだけど。」

そう言ったらまた顔を真っ赤にして。

「もう止めてくださいって!!」

セクハラも大概にしてくださいって!!」

「利加さん。可愛すぎ。」

「~~~~~っ!!」

俺は利加さんを引き寄せて抱きしめた。

細い肩も細い腰も女のそれとは違うけど。

俺を唯一慰めてくれる存在だから。

そして耳元で囁いた。

「…ところで今度はいつやらせてくれるの?」

「は?」

「利加さん言ったじゃん。」

俺がオフの時にやらせてくれるって。」

「…それは。」

「…俺あんたのオフのときにやるのが一番だと思っからあんなのオフ調べとくね。」

利加さんは俺をにらんで。

でも力なく。

律儀だから。

こくんと頷いた。

利加さんには俺みたいに強引な奴が丁度いいんだ。

## 静かな嵐 2

利加さんちに帰ってみたら。  
なぜか翼と澄香が意気投合してた。

確かに俺の携帯には翼が利加さんちに入っとくね〜というメール  
よこしたし。

利加さんには別口で澄香から連絡があったと聞いた。  
けど！！

何なんだ。一体。この盛り上がりようは！！  
酒も入ってないはずなのに。  
とか思っつて俺は利加さんと顔を見合わせて。

「翼。なに盛り上がってるの？」  
そう聞いたんだ。

翼は俺を見て。  
「ああ。綺羅も見てみなよ。」  
そう言った。

翼の視線の先には多分澄香所有のポータブルプレイヤー。  
そして画面には。

音声は一切流れないDVD。

利加さんは隣で固まってるから。  
一体何事かと画面を見つめると。

小さい頃の利加さんが満面の笑みで映ったんだ。

ブツ！！！

可愛い。

可愛すぎる！！

俺は思わず吹きそうになって。

「~~~~~！！！」

あなた方は何してんですか~~~~~（怒）

利加さんは怒声を上げたけど。

俺は利加さんを後ろから羽交い絞めにして。

画面を食い入るように見つめたんだ。

ヌードでも何でもないただの成長記録なのに俺ってばなに興奮してんの？とか思うけど。

そこらのAVよりヤバかった。

「ちよっ！！綺羅さん！！

離してください！！」

「ヤダ。澄香それ音声でねえの？」

「いや。今解析してるんだけど昔のだから難しいみたい。」

「ああああ。運動会じゃん？」

「うわっ！！利加さんちいさっ！！！」

利加さんは派手に俺が捕まえてる腕の中でもがく。

「もう！！止めてくださいって！！恥ずかしい！！！」

そこから利加さんは画面上で中学生になり高校生になり。声変わりして。

大学生になって。

就職おめでとうってとこまでが映ってた。

俺はそれを見て。

ああ。利加さんは愛されてるんだなって。

思ってたんだ。

俺とは違う。

愛情受けて育ったんだって。

でも成長過程でどこも擦れてないんだ。

ウブなまま大人になった利加さんが判った気がしたんだ。

大きな瞳と細い体で。

それは昔から変わってない。

「いやあ。利加さんってば昔から美人さんなんだな。」

翼が見終わって感想を一言言った。  
俺もそう思う。

その時だった。

澄香がつかつか寄ってきて。

利加さんの耳元で囁いたんだ。

利加さんは顔を真っ赤にして。  
俺を見上げた。

「…綺羅さん。放してください。」

そう言って。

俺が手を放すと。

澄香引き寄せてキスしたんだ。  
利加さん自ら。

俺は目を疑ったよ。

ええええええええええええ！？って感じ？

### 静かな嵐 3

「返してください。澄香さん。」

利加さんは唇を放してそう言った。

澄香は。

「ちっ！！残念。」

もっと嫌がるって思ったのに。」

そう言っつて封筒を利加さんの手に乗せたんだ。

「…それ何なの？」

俺は胸糞悪くて低い声で利加さんに聞いた。

「…僕の写真です。」

「は？写真？」

「…だから写真です。澄香さん僕がいない間に見つけたって。」

代償としてキス一つ。」

「そういうこと。」

翼がそこに加わってきて。

翼も何か封筒持ってた。

「わ〜〜っ！！翼さんまでですか！！！」

利加さんは嫌そうな表情でまた翼にキスを落とした。

俺は利加さんの手から離れた封筒を見る。

そこには。

文化祭と思われる写真が。

ってか今流行りのメイドカフェ？

利加さんが映ってたんだ。

何かゴスロリの服着せられて。

俺はまた吹きそうになった。

ヤバい。

ってかこれは見られるとかなり恥ずかしいし。

しかも全然似合ってないし。

利加さんの綺麗さって着飾るとダメな感じ？

よっぽどいつものスーツの方がそるんですけど。

「これ。どうしたわけ？」

俺が利加さんに問うと。

「…じゃんけん負けで着せられたんです。

何かよくわかんないけど。」

利加さんは膨れて。

かなり怒ってた。

「もう……！要らんことしないで早くシャワー浴びて寝てください！！」

明日早いですよ?」

利加さんが怒りだして。

その日はお開きになった。

だけど利加さんはやっぱり散々セクハラに遭っただけあって警戒がすごくて。

俺が促しても絶対にシャワー先に浴びようとしなかった。

澄香と翼はお先に……と浴びて。

俺は利加さんと入りたかったけど利加さんにそんな持ちかけられる雰囲気じゃなかったから。

仕方なしにシャワー先に浴びたんだ。

利加さんは相変わらず律儀で。

シャワー浴びる間でさえも鍵を閉める。

ってかやっぱり警戒すぎなんじゃないかって思うんですけど。

「でさ。綺羅。」

翼が言った。

「…利加さんとはホントのとこどうなの?」

「ああ。それ俺も聞きたい。」

澄香まで集まってきて。

「どうもこうもないけど？」  
俺はそっけなく答えたんだ。

「嘘ばっか。鬼畜の綺羅がそのまま利加さんに接するわけないじゃん？」

散々泣かせた挙げ句縛りあげて懇願させてって抱き方してるからあんな警戒するんだらう？」

…うっう。

あながち外れてないから。

俺は答えに詰まった。

ここであんまりバカなこと言つとまた利加さんにシカト食らうわけで。

「俺だけの秘密〜。教えない〜。もったいないから。」  
俺はそう逃げた。

そしたらバカの澄香が。

シャワーから上がって頭拭いてる利加さんに雪崩れかかったんだ。

ああ。バカと思った時は時すでに遅し。

「利加さん。」

「…はい。」

利加さんは流石に警戒してた。

すっごい嫌そうに澄香を見て。

まあ当たり前なんだけど。

「利加さんって綺羅さんに抱かれたとき感じた？」

単刀直入すぎて利加さんは聞き返した。

「は？」

「だ〜か〜ら〜。」

利加さん感度よさそうだけど男なのにホントなのかなって。」

びしっつて空気が凍るような音がして。

つかつか寄ってきた利加さんに俺は容赦なく張っ倒されたんだ。

俺は張っ倒されてから。

澄香に怒ったんだ。

澄香の疫病神〜〜（怒）

## 静かな嵐 4

その日は寝る場所にも揉めたわけで。

俺は当然利加さんの隣って思ってたのに。

利加さん警戒しすぎて。

怒って許してくれなかった。

シングルが二つあって。

いつも俺が来た時は俺は本当は利加さんと寝たいけど利加さんは寝るときは仕方なしに隣にいるけど。

起きた時はいつもいない。

まあ利加さんだってそんなに背が低い方じゃないし。

確かに窮屈なんだけど抱きしめて眠るには丁度いいとか。

俺は思ってたんだけど。

利加さんはいつまでも利加さんの隣は俺だと揉める俺たちに業を濁して。

「…綺羅さんと澄香さんはそのこのベッドで寝てください!!」  
怒鳴られた。

そして。

利加さんは翼に声をかけた。

「翼さんは嫌でしょうけど僕と一緒に寝てください。」

「ええ?良いの?」

翼はどぎまぎして俺を見た。

「ってか何で赤くなるんです？僕は熟慮したつもりですけど？」  
利加さんは翼に言ったんだ。

「…僕は今日はちゃんと眠りたいんです。」  
ため息をついて利加さんは言った。

「…綺羅さんとじゃ絶対眠らせてくれないだろうし澄香さんも何か  
僕身の危険感じますし。」

そう考えると翼さんが1番ヘテロでしょ？」

翼が俺に気を遣って。

「いや。でも綺羅が多分許さないんじゃないかなあって思うんだけど？」

利加さんがそう決めても。」

困った顔で俺を見る。

「…綺羅さん。」

利加さんがこちらを向いた。

それは睨んでるに近い眼差しで。

俺はちよつとふざけ過ぎたかなって反省して。

「…判った。翼。利加さんに変なことすんなよ？」

俺は了承するしか無かったんだ。（泣）

ここで揉めたらそれでなくても今日はセクハラのしすぎで怒ってる  
のにホント口きいてくれなるかもと危惧したんだ。

俺はベッドに横になって。

電気を消しても。

利加さんたちが気になったんだ。

「翼さん。もう少しこつち来ても大丈夫ですよ？」  
とか。

「利加さん寒いからこれもう少し着なよ。」  
とか。

「利加さんの髪いいにおいする。」  
とか。

聞こえてきて腹が立って。

うつつ。俺は唸りながら眠ろうと努力したんだ。

そういえば澄香はシャワー浴びても素颜にならなかった。  
いつも通り派手な化粧のまま眠ったんだ。

俺はそれにようやく気づいて。

こいつはヤバいなって思ったんだ。

そういえば利加さんは明日は澄香を連れて病院とか言った。  
俺も行こうかとか。

うつつすら思いながら眠りについたみたいだった。

静かな嵐 5 for rika

夜中目覚めると。

ベッドでうなされてる澄香さんに気付いた。

綺羅さんも翼さんも寝入ってて。

時間を見たら4時を回ったところで。

僕はため息をついて澄香さんの所に行ったんだ。

うなされ方は尋常じゃないし。

何か汗かいてる気がする。

「澄香さん。大丈夫ですか？」

余計なお世話かもしれないけど僕は声を静かにかけた。

そのうなされ方は僕が誤認逮捕の時によく警察署の独房で経験した感じのうなされ方だった。

「澄香さん。」

こういつ時って枕もとですっと声をかけ続けて。

辛抱強く目覚めるまで待つこと。

僕はそうされた。

「…俺好きだったんだよ。」

唯一聞き取れた言葉はそれだった。

「澄香さん。大丈夫ですよ。」

判ってますから。」

そう声をかけた時突然抱きつかれて押し倒されたんだ。

「わっ！！！」

くるっと反転して僕の視線は天井を向いた。

「愛。こんなところにいたのか。」

澄香さんは意味がわからない言葉を言って。

僕を抱きしめた。

「澄香さん。大丈夫ですか？」

僕は利加です。」

僕は一生懸命澄香さんが焦点が合うまで待った。

そして手を伸ばして抱きしめ返したんだ。

きつと何かのトラウマで。

僕は催眠療法士の臯月さんに相談してたんだ。

今日はそこに澄香さんを連れていくつもりだけど。

眠るときにうなされてるはずだから夜中に起こしてあげなさいと。

そして何かあったとしても抱きしめ返してやりなさいと。

そう言われたから抵抗できなかった。

澄香さんは僕の胸に顔をうずめて。

「あれ？愛。」

あのでっかい胸は？」

そう言ったから。

僕は思わず澄香さんを突き飛ばしてしまった。(汗)

そこでどうも澄香さんは正気に戻ったらしい。

腕の中の僕を見て。

「…利加さん。おはよう。」

間抜けな挨拶が寝ぼけ眼から発せられた。

## 静かな嵐 6

利加さんはその日。

澄香について例の催眠療法所に向かったんだ。

俺は留守番しといてくださいと利加さんに言われ。

駄々をこねた。

「…結城綺羅さんが来たらパニックでしょうが!!」

そう言われても俺は利加さんについて行きたくて条件を出した。

「…利加さん賭けに負けたのに俺にそんな口きくわけ？」

そう言くと利加さんは。

背伸びして俺にキスしたんだ。

「…これで勘弁してください。」

俺は利加さんを離すわけないじゃん？

これでもかって腰が立たなくなるほどにキスしてやったんだ。

利加さんはまた泣き出して。

「…酷いです。」

そう言った。

そして俺は仕方なしに利加さんに免じて今日は翼の相手役を演じてやることにしたんだ。

「愛してるから帰ってきたら結婚しよう?」

翼の演技はなかなかだったんだけど。

俺は虫唾が走り。

翼に寄るなと蹴りを入れた。  
だって気色悪いじゃん？  
男に言い寄られるなんて。

翼も俺に言い寄るなんて気色悪いと言って。  
ってか当たり前なんだけど自分がヘテロだって気づく。

「やっぱ利加さんは例外なんだよなあ。」  
俺が言つと翼もうなずく。

「ってか何でお前までうなずいてるわけ？」  
俺は面白くなって翼に言つた。

「…惜しかったよなあ。利加さん。  
綺羅のじゃなければいたないとこなのに。」  
「お前。昨日利加さんに変なことしなかったよなあ？」  
俺は危惧を覚え聞く。

「当たり前じゃん。利加さんの髪はいいにおいだつたけどそれだけだよ。」

俺綺羅に殺されるの嫌だし。  
そこへ淳也が入ってきたんだ。

「お疲れ〜。綺羅と翼。」  
「おう。淳也。」

「…澄香のことだけどさ。俺少し調べてみたんだ。」  
淳也が自前のパソコンを持ってきた。  
「ちよつと来て。」

「…なに？」

翼と台本を持ったまま寄って行った。

「…SPICAの失踪したヴォーカルさ。」

何か澄香が関係してるみたいなんだ。」

「…というと？」

「…失踪時期と澄香が澄香と名乗りだした時期と重なって、辿っていくと何かどんどんヤバい感じになってきて。」

「…簡単に言えよ。」

翼が言った。

「…だから澄香は…犯罪者かもしれない。」

それは薄々思ってた。

あの化粧とあの奇抜さは尋常じゃないって。

嵐の予感 1 for rika

「僕は乗り越えてほしいと思います。」

僕は催眠療法所でそう澄香さんに言った。

「悪いと思っただけどデータベースで調べました。」

あなたのこと。」

待合で待ちながら僕は澄香さんに言ったんだ。だつてフェアじゃないから。

「僕はあなたがダークブルーの爪をしてるの見て変だつて思ったんです。」

「へえ？普通の人は見ても振りするもんだよ？」

澄香さんは嫌な笑いを浮かべた。

僕は嫌な感じがしたけど口を開いた。

「僕はあいにく普通の人じゃないみたいでフェアじゃないことは好きじゃないんです。」

「利加さん難儀な性格してるな。」

「ええ。学生時代から言われています。」

僕はへなちよこのくせに絶対人のいうことかかない頑固者だつて言われています。」

「へえ？」

「愛つて誰ですか？」

今朝あなたうなされてたんですけど？」

「知らない。」

「でも。うなされ方が尋常じゃなかったから。」

何か心配になったんですよ。

…僕も嫌なうなされ方したことあるんで。」

僕は息をついて。

「…結城綺羅なら救えるって僕も思いました。

あなたのこと。

だってあなたみたいに破綻してるから。」

「…破綻？」

「…僕もあなたと同じように心は凍てついて。

気を抜くと死にたくなる。」

「…利加さんが？」

「…僕愛されてないですし？」

判ってるんです。何が悪いとかか。」

「…結城綺羅はそう思っていないみたいだけど？

あんなのこと離さないじゃん？」

「…あんなの演技でできますよ？」

だって結城綺羅ですよ？愛してるふりなんかお茶の子さいさいでしよ？」

僕が嫌な笑いを故意に浮かべると。

澄香は真面目な顔で僕を見た。

「…そんなん言ったら結城綺羅は本気かもしれないのに可哀想じゃないの？」

俺は愛にはせめて嘘つきたくないって思うけど？」

言ってから澄香は口を押さえて。

「…利加さん。誘導訊問したな。」

そこで気づいたみたいだった。

「…ばれました？あなたみたいなタイプは相談持ちかけるのが1番かなって思いました。」  
僕は見つめて。

「…大切な人がいるなら僕は徐々にでいいからその自傷行為を止めてほしいって思うんです。」

「…化粧止めるじゃないの？」

僕は首を振って。

「いいえ？それで澄香さんが安心するならそれでいいと思いますし。ただライブで首絞めるとかリストカットするとか徐々にでいいんで止めましょう？」

「…利加さん。」

その時だった。

僕に声を掛けてきた人がいたんだ。

僕には知り合いも友達もあんまりいないし。

声をかけてくるのって仕事関係ぐらいしかないし。

しかも挨拶ぐらいだしって思って振り向いたら立ってたのは僕には見覚えのない男だったんだ。

## 嵐の予感 2 for rika

「利加じゃん。久しぶり〜。」

「…お久しぶりです。」

僕は頭の中を巡らせたけど名前は出てこなかった。

隣で澄香の雰囲気が変わる。

「何？俺のこと忘れちゃった？」

俺利加に結構世話やいてあげたはずだけど？」

「…すみません。」

僕はどうやってこの場を去ろうかそればっか考えてて。

「…利加さん。俺席外そうか？」

澄香が立ち上がったけど澄香を一人にしとくわけにはいかないし。だから僕は首を振って。

「…忘れちゃってすみません。」

それじゃ。」

澄香を追いかけて立ち上がろうとしたら。

その男に僕は引っ張られたんだ。

「なななっ！！何するんですか！！」

僕が声を上げると。

「利加も結構無礼になったんだな。」

お前人のこと忘れておいて忘れたままどっか行こうなんてどうしたんだよ？」

僕はカチンときて。

「あの。離してもらえますか？」

強く言った。

目の前の男より今の僕には澄香が大事で。記憶の彼方のやつを思い出すより澄香の今のほうが気になるのは当たり前じゃない？

目の前の男は僕の腕をつかんだまま言ったんだ。

「…利加って学生時代よりずっときれいになったよな。」  
「は？」

「…お前は知らないだろうけど高校と大学とでお前に手を出さないって協定があつたんだよ。」

「だから何なんですか？  
放してください！！」

「…俺白井っていうんだ。  
お前知らないだろうけど俺お前のことずっと見てたんだ。」

僕はゾツとして。  
声を荒げた。

「…僕仕事なんですからけど？」

「…催眠療養所で？」

「ええ。僕病気なんです。」

さっきの彼についてきてもらったんです。」

「へえ？奇遇だな。」

俺はここで働いてるんだ。

催眠療法士として。」

…言っんじゃないなかったって後悔しても遅くて。

「じゃあ利加の面倒は俺が見てやるよ。」  
そう言ったんだ。

僕は身の危険を感じた。

結城綺羅とも澄香とも違う。

あの蛇のような視線にゾツとして。

ヤバいところに澄香を連れてきてしまったと後悔しても遅くて。

澄香を守るため。

僕は自分が人身御供にならないといけないかもと覚悟したんだ。

「……じゃあまたな。利加。」  
名前呼ばれるだけで悪寒が走る。  
これまでで1番嫌な感じで。

僕は澄香を追いかけた。

病院の玄関前で澄香を見つけて。  
僕は思わず抱きついたんだ。

「澄香さん。」

「……利加さん。どうしたの？」

化粧してても自傷行為があっても澄香がまともに見える。

「…怖かったです。」

僕は言葉がついて出てしまった。

嵐の予感 3 for rika

「…それって今流行りのストーカーってやつじゃないの？」

澄香が言ったんだ。

僕を抱きしめたまま。

「…利加さん？」

僕は震えが止まらなかった。

嫌な感じがずっとする。

今まで R u c y p h e r や結城綺羅に対して女の子からの嫌がらせはあつたけど。

僕自身が標的になるなんて考えたことなかったから。

「…ずっと見られてたとか気持ち悪くて。

僕は一般人ですよ？

それを…。」

「…でもたぶんみんな奇異な目で見る俺のことは大丈夫なんだろう？」  
澄香がそう言った。

「…僕はあなたを怖いとか思ったことないんです。

寧ろ痛々しいとかそんな表現になるんです。」

「…痛々しい…ね。」

俺も似たようなもんかもよ？」

「…それは違います。」

僕は顔をあげて澄香を見つめた。

「…愛つて失踪したヴォーカルの本名でしょ？」

「…何でそれを？」

「…ちよつとの勘です。」

だつて澄香さんには似合わないリングしてるし。

愛さんのこと本当はもう許してるんでしょ？

そして彼女は失踪じゃなくて故意に田舎に隠れたんでしょ？

あなたのこと好きだけどあなたのお姉さんのこと嫉妬心から殺しちゃったから。

それが事故でも。」

「…。」

「…それであなたはあなたそっくりのお姉さんを自分で化粧をすることによって作り出して。」

澄香つて名乗ることによってずっと恨みたいって思ってるけど。

でもそんなに恨みがましい性格じゃないって自分でも判ってるでしよ？

それでああなたは故意に自傷行為をして生きてることに罪の意識持ってる。

違いますか？」

「…利加さん。小説家になれるかもよ？」

苦笑いしながら澄香は僕を見つめて。

「…でも大体当たってるんだよな。」

そうつぶやいた。

その時僕は白井の視線を感じた。

どこからかわからないし自分の妄想かもしれないけど。

「澄香さん。悪いんですけどここで解散です。」

「え？」

「…なんか標的が僕みたいなんであなたに迷惑がかかると困るし。

何せRucypherの人だから。

怪我されると困るので。」

「…それで利加さんは？」

「…僕も適当に巻いて帰りますから楽屋で会いましょう。」

「…でも利加さん。非力じゃん？」

澄香が言うのはもっともだったんだけど。

僕は奥の手を使おうと思った。

「…さつき怖いって抱きついてきたし。

置いてはいけないし。」

「…ごめんなさい。澄香さん。」

僕甘えが出ました。

怖いけど大丈夫です。何かあったらちゃんと連絡しますから。」

「でも。」

「…ほら。行つてください。」

僕は単なるマネージャーだから大丈夫です。

さつき澄香さん僕が非力だって言っただけで僕一応力は人並みにあると思いますよ?。」

泣く澄香を駅のほうへ押しやってから。

僕は駅とは反対方向に歩きだしたんだ。

案の定嫌な足音が僕の後ろから聞こえてきた。

…予測通りの行動で。

僕は半分笑えたんだ。



## 嵐の予感 4 for rika

僕は気付かないふりをして歩く。

幸い以前仕事を一緒にした泉野真理の事務所が歩いても近いところにあるものだから。

情けないけど僕は携帯で泉野を呼び出したんだ。

「はい。泉野です。」

僕は早足で。

「…利加です。お久しぶりです。」

きつと切羽詰まった感じは泉野にその一言で伝わったんだと思う。

「…利加さん。どうかした？」

聡い泉野はすぐに何かを感じたよう。

僕は小声で助けを求めた。

「…何かストーカー？っていうんでしょうか。

何か尾けられてるんです。

今催眠療養所を出たんですが。」

「…今どの辺にいるの？」

「…あなたの事務所の近くの橋にさしかかるとこなんです。」

「判った。私1人出てもいいけどどうする？」

大人数のほうがいい？」

利加さんの会社装ったほうがいいんだよね？」

「…ごめんなさい。売れっ子なのに呼び出したりして。」

「うっっん。どうしょっか？」

利加さんうちのマネージャーにしちゃおうか？  
それか私が投げ飛ばしてもいいよ？そいつのこと。」

「…それは任せますのですみませんがよろしくお願いします。  
僕が電話を切るうとすると。」

泉野が待つてと言った。

「切ったらだめだよ。利加さん。  
ずっと話してるふりして？私が行くまで。」

判った？」

「はい。」

「綺羅さんとはその後どうですか？」

「…いや。別に何も進展は。」

進展あつたら困るんですけどね。」

…僕は嘘をついた。

泉野に。

だけど男のくせに2回も抱かれたなんて言えなかった。  
しかもずつとさびしいだなんて言えなかった。

…自分がこんなにも嫌な人間で。

こんなにも独占欲が強い奴だなんて知りたくなかった。

「…でも私はあなたを軽蔑はしませんよ？」

「え。」

「…何かあつたんじやないですか？  
結城綺羅と。」

「何で？」

「……だって私に連絡くれるなんておかしいって思っんです。何かあるって思うでしょ?」  
泉野はくすくす電話越しに笑った。

「……ったんです。」  
「……すみません。よく聞こえなかったんですが。」

僕の弱さが露呈した瞬間だった。

「……抱かれました。」

僕はひとり言のように電話越しの泉野につばやいた。

……嘘を吐き通せなかった。

「……だったら余計に怖いですね。そのストーカー。」  
僕は思わず座り込みそうだった。

「だって利加さん。めったに人に頼らないでしょ?」

私ね。あなたがそんなに怖がってるの判ったような気がします。

……結城綺羅に抱かれて怖かったんですね。」

僕が声もなくうなずくと。

泉野と他数名の人が真正面に見えた。

その時だった。

後ろから羽交い絞めにされたんだ。

「利加さん。左手を引いて。」  
泉野の声が響いて。

僕は携帯を持った左手を引いた。

「利加。お前芸能プロダクションに勤めてるんだ？  
ああ。だからお前結城綺羅とドラマやってたんだな？」  
後ろから白井の息が耳元にかかりゾツとした。

僕の首元には細いワイヤーが巻かれて。

「…動くと危ないぞ？」

ワイヤー引いたらお前は死ぬ。」

泉野が近付いてきて。

その様子を見て。

「…利加さん？」

思わず駆け寄りそうになった泉野を真田が止めに入った。

「真理。やばいぞ？」

あいつ。利加さんの首にワイヤー巻いてる。」

…本当にこれまで。

僕は。

自分の非力をこんなにも呪ったことはなかったんだ。

白井は後ろから僕の首に口づけてきて。

何か虫が這ってるような嫌な感じで。

ゾツとして。

だけと言ったんだ。

僕は。

「…引けばいい。」

僕は別に死んだっていい。」

「!!!!!!」

白井の動きが止まる。

「…元々僕なんか生きてたって死んでたって大して差はないんだから。」

僕の声は思いのほか低かった。

「…ただあなたに殺されるのもあなたに好きにされるのも我慢できないんだ。」

僕は指が切れるのも構わずワイヤーを引いたんだ。

指が切れるほうが首が絞まるよりずっといいから。

やさしい盾 1

「性格破綻は昔から変わってないんだな。利加。」  
僕が暴れると白井はワイヤーを引っ張る。

僕は息がつけなくなって。

両手をワイヤーにかけたまま失神しそうになった。

よく言うじゃない？

落とすっていうの？

落ちるっていうの？

「俺お前を死なせるつもりはないよ？」

まだ手を出してもいないのにそんな勿体ない事はしない。」  
グツと息が詰まって。

僕は喘ぐ。

目の前の泉野が怒鳴る。

「うちのマネージャーを放せ。」

白井がくつと笑った。

「芸能人に会えるとは思わなかった。」

「ただとお前。泉野のことは関係ないだろ？」

「結城綺羅じゃん？利加の飼い主は。」

「目の前が真っ暗になった気がした。」

「その体だって好きにさせてるんだろ？」

結城綺羅に。」

泉野は唇を噛んで。

僕は。

僕はうんざりだった。

こんなことで結城綺羅を傷つけるわけにいかないから。

こんなことでもう充分巻き込んでしまった泉野真理に申し訳なくて。

僕は渾身の力でワイヤーを引っ張ったんだ。

引っ張ったと同時に僕は体を反転させた。

白井と向き合った。

そして。

掌は血だらけだったから。

頭突きを食らわせたんだ。

…僕は背が高くないから仕方ないんだけど。

白井の胸元に思いつきり頭突きを食らわせたんだ。

白井が怯んだ隙に。

泉野が飛びかかってくれた。

有段者って良いな。  
ホントそう思ったんだ。

ゲホゲホとせき込み。  
僕は座り込んだ。

「利加。お前普通に生きようなんて無理だよ。」  
羽交い絞めにされた白井は立ち上がった。  
僕を睨んで言った。

「俺みたいにお前昔から狙ってるやつは結構いるんだぜ？  
お前それで少しはまともにな食ったように見せてるけど。  
本当のところは何も変わってない。  
学生時代の利加と何ら変わらないで。  
俺お前みたいなのが1番許せないんだよ。」

「…利加さんがあんたの何を逆なでしたか知らないけど。」  
泉野が僕の前に立ち。  
「…利加さんはあんたとは違って少なくとも毎日真剣に生きてるよ。  
働いてるよ。  
少なくともあんたには言われる筋合いはない。」

そう言いきってくれた。

「…泉野さん。」

「…言いたいことがあるんなら面と向かって胸張って言ってみろ。振られたらすっぱり諦める。それがどうしてできない？」

その姿はまぶしくて。

僕を照らしてくれる小さな光。

「…出たら絶対利加なんかこの手でつぶしてやる。」  
「…そう言い残して白井は連れて行かれた。」

僕は怖くて。

震えていた。

血だらけの手は痛くて。

泉野が僕に視線を合わせて。

「…利加さん。大丈夫？」

聞いてくれて。

それが最後。

僕の記憶はそこからなかった。

## やさしい盾 2

俺がその連絡を受けたのは。  
ライブのリハの最中だった。

澄香が帰ってきた時だった。

「あれ？利加さんは？」

澄香は俺に頭をいきなり下げたんだ。

「…ごめん。綺羅さん。」

「…どうしたんだよ？」

淳也がピアノ弾く手をとめた。

「利加さん何か療養所でヤバい奴に会って。

俺を逃がしてくれたんだ。」

澄香が言う概要はこうだった。

利加さんは澄香に付いて療養所で待ってたら。  
男が現れて。

どうも話の内容では学生時代からの知り合いみたいだったと。  
そして利加さんはものすごく怖がっていたと。

だけど自分や R u c y p h e r に迷惑かけるのは嫌だからと澄香は  
自分は帰ってきたと言った。

俺はそれを聞いて利加さんらしいなって思った。

あの人は強いから。  
あの人は肝が据わってるから。  
例え怖がってたとしても自分で何とかしなくちゃと思ったんだらう  
と容易に判る。

「それで利加さんは？」

「…俺と正反対の方向に行ったんだけど。」

「…連絡ないですか？」

澄香の表情は。

今までの人形みたいな表情ではなく。

生気がやっとな戻ったような感じがした。

俺が首を振ると。

翼が鳴った携帯に出たんだ。

「はい。R u c y p h e r 翼です。」

俺は澄香に。

「…勝算があるからたぶん利加さんはお前帰したんだらうって思う  
んだけど。」

「だからお前がそんなに気に病むことないって。」  
そう言ったんだ。

怒鳴ることも。

怒ることも。

泣くことだってできるけど。

俺は利加さんを信じてるから。  
深いところで。

「綺羅。利加さんから。」

翼が自分の携帯を俺に投げた。

俺はおかしいなって思っ

何で利加さんが直接俺にかけてこないのかなって思っ  
不審に思っ

「…結城綺羅さん？泉野です。」

「…はい？泉野さん？」

声の主は利加さんじゃなくて泉野で。

「…っつか何であなたが利加さんの携帯持つてるんです？  
思わず聞いてしまった。」

「…何から話したらいいかわからないんですが。  
珍しく泉野が言い淀み真田に替わって。」

「すみません。真田です。」

うちの泉野が要領を得なくてすみません。」

「…どうかしたんですか？利加さんは？」

「…実は今病院なんです。」

利加さんちよつと今は話せない状態で。」

「え？」

「…大したことはないんですがちよつと危なかつたもので。」

俺と泉野で病院に来てるんです。

ちよつと今オフなんですよ。」

良かったです。利加さんに連絡いただいた時出られる状況にあっ

て。

あのままだったらきつと監禁か何かされてたかもしれないです。」

「あの。何の話をされてるんです？」

俺は焦れて。

「これから病院に来られませんか？」

その言葉で俺は飛び出しそうになったんだけど。よく考えたらもうすぐまたライブが始まるから。

無理だった。

俺が言い淀んでると。

「…あの。」

その時だった。

俺の袖をつかむ澄香がいて。

「…あの俺行ってきたいんですけど。」

そう言ったんだ。

「…あの真田さん。」

俺は携帯を握りしめて。

「…うちの新メンバーの澄香ってやつ行かせます。」

俺がホントは行ければいいんですけど今日これからライブで。

澄香は出たり入ったりなので影響は出ないので。」

「…結城綺羅さん。」

その時向こうが真田から泉野に替わって。

「…はい。」

「…利加さん大丈夫ですよ。」

ただ落ちたってどうか。

専門用語で言うよ。

ちよっと休まないと話せないと思うんです。

澄香さん？でしたっけ？

来るの待ってるので来てくださいね。」

泉野はそう言って病院の住所を言い携帯を切った。

俺の頭の中は利加さんでいっぱい。

ライブなんかどうでもいいぐらいに手がつかなくて。

だけ。

そういうわけにもいなくて。

俺は澄香に利加さんを託したんだ。

それが結果的に澄香の自傷行為を治すきっかけになるなんて思わなかったけど。

「利加さん。気づいたの？」

僕が気づいたら白い天井が見えて。  
点滴を受けてる感じがして。

見渡すと声の主は澄香だった。

「…澄香さん。何でここへ？」

声を出すと首が痛かった。

「ああ。話さないほうがいいって。

医者が言ってた。」

「…でも。」

「大体聞いたよ。

真田さんってあの泉野真理のバンドの人から。

利加さん大変だったね？」

手も首も包帯が巻かれていて。

「…なんか大掛かりになっちゃいましたね。」

そう言ったら咳込んだ。

「大丈夫？」

手を貸してくれようとした澄香の手が怖くて。  
僕は思わず振り払ってしまった。

「…利加さん？」

「…ごめんなさっ！！！！！」

自分の行動が信じられなくて包帯を巻いた手を見た。

「…ちよつと怖くて。」

何か判らないんですけど。

何て言うのかな。自分より大きい人が怖いみたいで。」

恐怖心は消えない。

ただ怖いとしか思えなくて。

「利加さん？」

澄香が呼ぶ声すら怖くて。

こんなに怖いならいつそのこと死んだほうがマシだぐらいに思っ  
て何だろ。

ちゃんと説明しないといけないのに口は重くて。

…ワイヤーで絞められた跡も痛くて。  
掌も痛くて。

またふつと気が遠くなったんだ。

やさしい盾 4 for sumika

利加さんが目の前でまた気を失って。

俺は正直手を出すことがためらわれた。

俺は振り払われて正直かなりショックで。

つてかあんまり振り払われたことないから。

利加さんが初めてかもしれない。

泉野の話によれば俺だけじゃなく。

病院の男の先生にさえ利加さんは拒否反応を示したらしい。

怪我の程度と手当とは仕方がないので看護師さんがしてくれたらしい。

俺の心は壊れていて。

外に出るのもスッピンだと怖いし。

人に注目されたいから自傷行為は止められないし。  
だけど。

だけど振り払われて思ったんだ。

利加さんの心が壊れて。

接触恐怖症になってるって。

特に自分より大きい男が苦手だって。

心が壊れるとそういう人の気持ちがわかるんだよ。  
弱さを抱えて生きてるから。

泉野も俺を見たとき何か奇異な目で見るだろうって覚悟してたんだ。  
俺爪も青いし化粧しまくりのヴィジュアル系が服着て歩いてるよっ  
なもんだから。  
きつと芸能人とは言えど変な目で見て。  
くすくす笑うだろうって思ってた。

でも泉野真理は違ったんだ。  
俺を見て。

何て言っただと思う？

「…利加さんが心配して帰した人ですね。」  
そう言っただんだ。

ああ。俺はそういう言葉がほしかったんだって気づいたんだ。  
ただ認めてほしかったんだ。  
化粧が濃いか。

普通じゃないとかでくすくす笑うんじゃない。

確かに利加さん追いつめて襲撃未遂しちゃったけど。  
俺はその時やさぐれていたから。

悪かったと思ってるよ。  
だって利加さん。可愛いんだもん。

何かストーカーの気持ちもわかるんだよ。俺って。

利加さんを手に入れてめちゃうかにしてやりたいとも思っつて。それもわかる気がする。

「…接触恐怖症？」

俺は利加さんの病室で心配して連絡を待ってる結城綺羅に電話したんだ。

「…たぶん。」

これは俺の推測なんですけど。

泉野の話によれば利加さんはストーカーに羽交い絞めにされてワイヤーで首絞められるところだったらしいです。」

電話越しに結城綺羅が息をのんだ。

「利加さんの精神がたぶんその時の恐怖で極限状態で。」

だから今接触障害として発症したんだと思います。

特に男がダメみたいで。」

「…治りそうなのかな？」

「…俺もそうですけど多分こんなのって治るとか治らないとか本人じゃないとわからないんだと思うんです。」

俺も化粧ぐらい止められたらっていつも思うのに。

無理なんですもん。

でも俺利加さんの首元の傷見て思っただんです。

心が痛かったんです。傷跡見て。」

「……………」

「…何て言うのかな。やっぱり悲しいんだって。」

自分でつけた傷だろうが傷つけられた傷であることが。

やっと判ったんです。

俺の傷見て悲しんでくれる人が1人でもいるんなら傷つけちゃい

けないって。」

「…それは利加さんも言ってたぞ。」

「…そうですね。綺羅さんは利加さんが好きになるだけありますもんね?」

「…まあな。」

それで澄香お前明日の夕方までそこに待機できるか?」

「…良いですけどどうして?」

「…和久田のやつが仕事入れやがったんだよ。」

俺ら3人で明日の夕方まで軟禁状態。

それから俺と澄香が交替してジョイントするって。」

「…ライブはどうでしたか?」

「久しぶりのライブで澄香がいないってお客さんが口々に言ってたから妬けたけど?」

お前もうRucypherになってるから。」

結城綺羅は優しかった。

俺の頬に何年ぶりかの涙が伝った。

化粧が崩れるからって泣きたくないのに。

こんなにもあふれて止まらなかった。

おまえはもうRucypherだよ。

それがこんなにも俺の気持ちをやしてくれるなんて思わなかったんだ。

そして。

俺は誓う。

全力で利加さんを癒すって。

僕が君を思う夜 1 for sumika

俺はずっとその日は眠らずに利加さんの枕もとにいたんだ。  
時々うなされる利加さんを安心させるためにずっと眠らなかった。

それはね。

利加さんが以前そうしてくれただから。

初めて利加さんちで淳也さん除く4人で合宿した日。

その日も俺は翼さんと悪ふざけが過ぎて利加さんに怒られた。

だって利加さん同じ男とは思えないくらい写真もかわいくて。

俺と翼さんは見入ったんだ。

別に変な意味じゃないよ？

ただ可愛いって俺ロリコンじゃないもん。

俺はそれまで夜が怖くて。

万年寝不足。

目を閉じると姉が俺をかばって下敷きになった夢を見る。

そして愛してたはずのヴォーカルを憎んだ。

仕組まれた事故だったから。

姉の性格をよく知ってたとも言えるんだけど。

きっと姉は俺をかばうって知ってたって言える。

だからか。

その日から外に出るのが怖くなって。

化粧をしたら鏡の中の自分が姉そっくりで。

安心できた。

鏡の中だけでは姉はまだ死んでないって思えたから。

化粧でも足りない時に自傷行為にところ構わず走ったら。

俺は気づいたら1人になってしまった。

DESTINYの響さんに拾われて。

やっと少し立ち直りかけたら今度は俺が自傷行為したのがばれてしまつてファンが騒ぎ出して。

やむなく休止に追い込まれたんだ。

響さんも忍も言ってくれた。

ちゃんと自傷行為を治して帰つて来いつて。

次に拾ってくれたのが利加さんだった。

利加さんつては男のくせに言つたら失礼か。

きれいなんだ。可愛いんだよ。

それはきつと俺がほしい言葉をくれるから。

ああ。ホント惜しいつて思う。

女だったら絶対一生傍にいてほしいつて思うのに。

壊したい。

泣かせたい。

だけど守りたくて。

笑顔が見たい。

でも抱きたくて。  
だけど泣かせたくなくて。

相反する感情が俺の中でうごめいた。

大好き。

だけど大嫌い。清らかだから。

自分でもおかしいって思うけど。

だけどね。

…結城綺羅が利加さんを男なのに傍に置きたい気が判った気がするんだ。

利加さんは白い顔で眠ってる。

さつき睡眠剤が打たれた。

あまりにうなされるから精神上良くないとのことだった。

見張ってないと舌でも噛みそうだって。

俺は思ったんだ。

利加さんが傷つくのはもう嫌だって。

「…ねえ。利加さん。」

俺は静かな声で問いかけた。

「…俺さ。あんたが悲しむからもつ自傷行為しないから。  
だから還っておいでよ。」

辛かったのも判るからさ。」

俺はその日化粧直しにも行かなかった。  
行かないで済んだ夜なんて初めてだった。

僕が君を思う夜 2 for rika

「利加さん？大丈夫？」

声が聞こえて。

僕が目を開けると澄香が僕の顔を覗き込んでた。

「わ~~~~~!!!」

僕は思わず起き上がって大声をあげてしまった。  
そして澄香の顔を押しつけてしまった。

それから気づく。

えらいことをしてしまったって。

「ちよっ!!利加さん。

痛いって。」

澄香は怒ることもなく。

ただ苦笑いしただけだった。

僕が強い力で押しつけたのに。

その拍子に澄香の眼に付いていたつけ睫毛が片方落ちて。  
僕はあわてて。

「ごめんなさい!!」

そう言ったんだ。

「ああ。良いつて。気にしないで。」

「…でも!!」

「…聞いてよ。俺。」

利加さんここで看てる間1回も化粧直しに行かないで済んだんだよ?」

「…それならもう行って大丈夫でっ!!」

澄香は首を振って。

「違うよ。利加さん。」

あなたのことがすごく心配でそうなたら自分の化粧なんか崩れようがなにしようが良いって思えたんだよ。」

「…え?」

「利加さん。」

澄香の手が僕に触れようとしたから。

僕は思わず怖くて後ずさった。

「…あなた接触嫌悪症だった。」

「…え?」

「…あなた覚えてないかもしれないけど泉野が言った。」

あなた医者にすら触らせなかったって。

すっごい勢いで拒否反応示したって。」

「…僕がですか?」

「…特にあなたより大きい男に拒否反応示すって。」

あなた眠らされてたんだよ。

舌噛む勢いだったから。」

「…すみません。ご迷惑おかけして。」

僕はせき込んだ。

だってそれしか言えなかった。

震えが止まらないし。  
変な汗かくし。

気分は良くないし。

「…あの。もうお仕事戻って大丈夫ですよ。

あなたは Rucypher なんだから。

僕なんか時間割くなんて無駄なことしちやいけないです。」  
本当に心からそう思ったから。  
そう言ったら。

澄香に怒鳴られた。

「…あんたの悪いところさ。

我慢しなくてもいいような時にも我慢して。  
人の好意ちゃんと受けられないんだな。」

「…!!」

「あんたさ。判ってるの？」

俺が言うのもおかしいけどあんたみんなに心配かけてんだよ?」

「…だからごめんなさいって。

もういいですって言うてるじゃないですか!!」

「だからそれが可愛くないんだよ!!」

あんななんか折れそうに細くて耐久力も何もなくて自分の許  
容量越えて。

問題抱え込んで倒れて。

病気になるって。それでまた我慢して。

本当に死ぬ気かよ?」

激昂する澄香が怖くて。

僕は後ずさった。

「…だってもう僕死ぬだったって覚悟したんです。」  
包帯の手は痛くて。

自分がまさかストーカー被害にあうなんて思わないし。  
僕なんかストーカーしたって何の得にもならないのに。

それなのに起こってしまった。

僕の心は凍てついたままならこんなにもつらくはなかったかもしれ  
ないけど。

僕は結城綺羅に出会ってしまった。  
人を愛してしまったから。

だから。

自分の身ぐらい自分で守りたかったんだ。

僕が君を思う夜 3 for rika

だって僕思ってた。

あのとき。

後ろから羽交い絞めにされて首にワイヤー巻かれて思ったことは。今まで綺羅さんをかばって刺されたり。何かいろいろあったけど。

…人のことで怪我したりなら耐えられるけど。

標的が自分だってわかったとたん。力が抜けて。

…怖くて。

僕は耐えられないって思った。

ただこんなところで死ねないって思ったけど。

本当は。

本当はそうじゃなくて。

僕は白井に普通に生きていけるわけがないって言われたことがショックで。

たぶん性格破綻してるから結城綺羅が男なのに好きになってしまったんだって心のどこかで思ってた。

それは認める。だけ。

僕が感じてた違和感が判ったことだったんだ。

僕の心をうち砕いた原因は。

学生時代から浮いてた自覚はあるけど。  
だけど。

まさか自分が白井が言うつようにストーカー被害にあうような奴だと思っ  
てなかつたから。

その事実が判つてから。

僕は自分より大きい男が怖くなった。

自意識過剰だと笑われるかもしれないけど。  
今回白井に首を絞められて思った。

…力じゃ敵わないって。

このままじゃ自分の生きてきた道とか。  
全部踏みにじられるって怖くなつたんだ。

「…利加さん。」

澄香が僕の額に手を伸ばしてきた。

僕は怖くなってその手を振り払った。

振り払って気づく。  
無意識だつて。

「利加さん。大丈夫だから。」

また澄香が手を伸ばす。

僕がはたき落とす。

それを何回か繰り返して。

「…何回拒否してもいいから。」

「馴れる練習しよう?」

「え?」

「…だって利加さん俺の病気治そうとしてくれたでしょ?」

「今度は俺の番だよ。」

「利加さんが今まで俺にかけてくれた言葉全部覚えてるから。」

澄香は今まで見たことのない穏やかな顔で笑った。

「…そんな迷惑はかけられないです。」

「僕は1人で大丈夫だから。」

「心配かけてごめんなさい。」

僕は自分の包帯を巻かれた手をつかんで。

目を閉じた。

すがりつきたいのにすがりつくのが怖い。

相反する気持ちはたぶん癒せないから。」

「…利加さん。接触嫌悪症って治すのなら触れるのを我慢しなきゃ。」

「だって利加さん結城綺羅を好きなんでしょ?」

澄香は真剣なまなざしで僕を見つめて。

僕は言ったんだ。

「…この機会に別れようと思ってます。」

「は?」

「結城綺羅さんのお付き合いもう止めようと思って。」

僕はもともとキャパシティも広くないから。

僕の病気が接触嫌悪症なら尚更いい。

男なのに好きになって悪いってホント思ってるんですよ。」

「…利加さん。本気で？」

「…本気です。僕は元々人を好きになんかなれない人間なんだ。それをなぜか好きになってしまったからこんなに苦しくてだから。別れるならもう今しかないって思うんです。」

…僕はホントに思ってた。

白井からも結城綺羅をそしてRucypherも守りたいし。もう開放してあげないと結城綺羅がかわいそう過ぎる。

「…だから治らなくていいんです。」

僕の役目はあなたの自傷行為が治ればそれで終わりだし。

あなたがRucypherの一員になってくれて。

マネージャーもやってくれたら僕なんかいらないじゃん？」

澄香は泣いていた。

僕を見て痛々しそうに顔をゆがめて。

「…澄香さん。」

あなたに泣いてもらう価値なんか僕には無いです。

だから泣かないでください。」

澄香は立ち上がった。

なにも言わずに病室を出て行った。

僕は目を閉じる。

心が壊れてるから涙すら出ない。

ああ。これからどうしようか。

窓から空を見上げ考える。

許されない恋をした報いだなんて思う。  
ただあなたを好きだけなのに。

…消える準備をしなくっちゃ。  
そう思ったんだ。

僕が君を思う夜 4 for sumika

目の前にいる利加さんに何て声をかけたらいいかなんて  
全く判らなかつたから。

俺は泣いてた。

そして同じ空気を利加さんと吸ってるのが痛くて。  
思わず外に出たんだ。

かける優しい言葉も見つからなかった。

利加さんは痛々しくて。

本気だった。

俺の時はポロポロ泣いたのに。  
涙すら見せなかった。

ただ一点を見つめて。

結城綺羅と別れるという。

もう自分の仕事も終わってたって。

たぶん結城綺羅と利加さんは付き合ってたというからそれなりの交  
渉があつただろうと思う。

利加さんの潔癖さからしてそんなのがあるようには見えないけど。  
結城綺羅が手を出してないわけがないし。

でもたぶんだから。

利加さんは思いつめた表情で俺に言ったんだろうと思う。

結城綺羅さんとは別れるから引き継ぎを俺に頼むって。  
マネージャー業とRucypherの両立を。

その時携帯が鳴った。

「…はい。澄香です。」

「結城綺羅ですけど。澄香？」

「利加さんの調子はどう？」

「…はあ。」

「…たく和久田のやつ鬼畜かつーの。」

「何だあれは。淳也も淳也であの仕事量を徹夜でしろってか？」

電話向こうで結城綺羅がぶつぶつ何かを言ってる。

その時だった。

利加さんが病室から着替えて荷物を持って出てきたんだ。

「…利加さん??？」

俺は思わず電話を切って。

利加さんを追いかけたんだ。

「利加さん!!どこ行くんだよ？」

「……。」

利加さんは目はうつろで。

着替えは中途半端だった。

だって普通は利加さんはきっちりスーツ着て。  
肌蹴てることなんかあり得ないから。

「…寝てなきやだめだつて!!!」

利加さん病人なんだよ？」

「…えなきや。」

「え？」

「…消えなきや。」

僕なんか消えなきや。」

利加さんはいつものきれいな感じは何一つなくて。

ただうつろな瞳で。

ただつぶやき。

俺が手を貸そうとしたら引っぱたかれた。

「やつ!! 触らないで!!」

「…利加さん？」

「…僕。お母さんのところに行く。」

そしたらもう苦しまないうで済むから。」

口調もおかしくて。

利加さんらしくなくて。

俺は信じられなくて。

「利加さん!!! 俺を見ろよ!!!」

俺は無理やりこつちを向かせたんだ。

うつろな瞳には何も映さず。

ただ嫌がった。派手に。

「利加さん！俺があんたを死なせない！！  
死なせたりするもんか！！」  
まさか自分が人助けに回るなんて思ったことなかったけど。

こんなにも辛いことなんて思わなかった。

一瞬微笑んだ利加さんは。  
舌を噛んだんだ。  
俺はヤバいと思って。

ホント咄嗟だった。  
咄嗟に利加さんの口の中に右手を入れたんだ。

ギリツと思いつきり噛みつかれて痛かったけど。  
…俺は悲しくて。  
そして。俺も利加さんをこんなに悲しませてたのだろうかと思うと。

痛くても助けられて良かったって思ったんだ。

僕が君を思う夜 5 for rika

「~~~~~っ!!!」

血の味がして僕は正気に戻った。

目の前で僕の口に手を突っ込んで澄香が抱きしめてくれていた。

「っ!!!」

「…利加さん。今からゆっくり俺の手外すからもう舌噛んじゃだめだよ?」

澄香がゆっくりと僕の口から右手を放し。

血だらけの右手は僕の歯形がくつきりと付いていて。

「…ごめん。」

「ごめんなさい。」

僕はそれしか言えなかった。

「…大丈夫だよ。利加さん。」

俺の手って結構強いから。

何せほら。自傷行為にも耐えられる手だから。」

「ごめっ!!!」

僕は泣いていた。

酷いことをしてしまったという気持ちと。

情けない気持ちで。

「…大丈夫。利加さん。」

俺は弱いのがよくわかるから。

大丈夫。利加さん。」

ダイジョウブ。  
よく母に言われた。

「…あの手当てを。」

「…ここ病院だから利加さんがする必要はないよ。」  
優しく澄香は言った。

「でも。」

「…利加さん。とにかく病室に帰ろう。」

ほら。」

僕は促されて。

病室に戻ったんだ。

「…どうして僕が舌を噛むってわかったんですか？」

僕はいたたまれなくて聞いたんだ。

そしたら澄香が。

「俺ね。前科者だから大体判るんだ。」

弱さ抱えて生きてるからね。」

血だらけの右手をティッシュで拭いながら澄香は言った。

「DESTINYの響さんがね。」

俺拾ってくれた時同じことあったんだ。

俺が舌噛んだとき響さんが同じことを俺にしてくれて。

…その時死んじゃだめなんだって思ったんだよ。これでも。

それでも自傷行為は治らなかつたけどね。

まさか自分が病気なのに人を助けるなんて思わなかつたよ。今  
ま  
で。

だけど思った。

利加さん見ていて。

傷つかないでほしいって思う。」

病室のベッドに澄香が僕を寝かせてくれて。

「…もうすぐ綺羅さん来るから。

そしたらボタンタッチするね。」

そう言ってくれて。

僕は申し訳なくて。

「…あの。」

「…いいから寝て？」

「…あの。」

「…何？」

「…あのありがとっございます。」

僕がそう言つと。

澄香は盛大に笑つて。

「…利加さんもう大丈夫だよ。

ちゃんと普通の利加さんに戻つた。」

そう言ってくれたんだ。

その日。

夜遅くに結城綺羅とボタンタッチした澄香は、その足でレコーディングに行ったって聞いた。

僕は寝てて知らなかったんだけど。

僕が君を思う夜 6

「おはよ。」

俺は何て声を掛けていいかわからなくて  
間抜けな声で利加さんに声をかけた。

「おはようございます。」

「僕寝てたんですか？」

まぶしい朝日は目にしみる。

俺が頷くと利加さんは布団をかぶって。

「ごめんなさい。」

そう静かな声で言った。

「何で謝るんだよ。」

俺は澄香に聞いたことによれば。

相当だったって。

澄香の判断が正しければ接触恐怖症はたぶん治らない。

「だけど。」

「利加さん別に悪くないじゃん？」

泉野に助け求めたのもいいと思うけど？

俺強くないし仕事中だったし距離はあるし。」

「でも。」

「後悔してんの？」

「判りません。ただ迷惑をたくさんかけてしまっ  
て自己嫌悪なんです。」

僕なんか自分でホントは切り抜けなきゃいけ  
ないのに泉野さんに

助け求めて心配かけて。」

「…だけど泉野も言ってたけど。」

「ストーカー被害って大して珍しくないって。」

「だけど僕は一般人でまさか自分がその標的になるなんて思わなかったし。」

「僕を狙った白井って人ホント記憶にないんです。」

「だけど本人は僕のこと知ってて気味が悪くて。」

「震えが止まらなくて。」

俺は利加さんの手を握ろうとした。

包帯でぐるぐる巻きの手。

そしたら振り払われて。

ぎよつとした利加さんがものすごく悪そうな顔をして。

「…ごめんなさい。ちょっと…怖くて。」

接触嫌悪症ってこれか。

俺は納得して。

利加さんはまた布団を引き寄せて。

ギユツとその手を握りしめた。

「…澄香が言ってたけど利加さん男が怖くなったって?」

「…いや。そうじゃなくて。」

「自分より背の高い人が怖いみたいで。」

「…泉野さんも僕より若干高いから振り払ってしまっただけ。」

「…ふっふん。俺も怖いわけ?」

利加さんは何も言わずにうなずいた。

「…だから別れるってか？」

俺は核心に触れた。

実は澄香から聞いて頭に来てたんだ。

だって利加さんは勝手に決めすぎるから。

俺がいつそんなの言った？

そう思うし。

澄香が止めてくれなかったらきつと利加さんはあの世に行ってたと思う。

まさかホントに舌噛むなんて思わないでしょ？

澄香が苦笑い気味に俺に言ったんだ。

そして。

「…綺羅さんと別れるって。」

その方が良いつて利加さん言っていました。」

そう聞いて。

「~~~~!!それは。」

「マジでかよ？」

俺はつかみかかりたいのを我慢して聞いた。

「理由は？」

俺のこと嫌いになったわけ？愛想尽かしたってわけ？」

「違います!!」

「じゃあ何で？」

「…だって!!僕また舌噛むかもしれない。」

それで綺羅さんたち傷つけるの嫌なんです!!」

理由を聞いて。

利加さんらしいって思ったんだ。

人のことしか考えない利加さんらしいって思ったんだ。

「…それにたぶんあの約束も守れないです。もう。」

そのあと消え入りそうな声で利加さんが呟いて。

「え？」

聞き返すと。

「…ごめんなさい。もう無理です。」

あの…この間休みになつたら云々って話も無理です。

たぶんまた僕舌嚙んじゃいます。

接触嫌悪症だから。」

今度休みになつたらいいですよ。

確かに利加さんに言われた。

「…そんなこと気にしてたのかよ？」

俺は思わず言ってしまった。

「…だって!!何もできない僕と一緒にいても綺羅さん苦しむんですよ？」

言つてたじゃないですか!!

抱けないなら一緒にいる意味ないじゃん?って。」

「…それは。」

「だからそれなら。」

この機会に別れて。

あなたならきれいな彼女がすぐにできて

どう考えても僕との関係は許されないし。

あなたには我慢だけ強いて。

デメリットしかないんですよ？」

利加さんは真剣だった。

俺は笑い飛ばすことができなくて。

「利加さん。」

呼びかけたんだ。

## 瞳を離さない 1

「…俺さ。利加さんが女だったらって思ったこと1度もないよ？」  
「え？」

俺は利加さんに視線を合わせた。

「…だけど。綺羅さん言ってたじゃないですか。  
女だったら籍入れてるって。」

「…だからそれは！！」

「それは何ですか？」

真摯な瞳で俺を見上げてくる利加さんに。

俺はため息をついて。

この可哀想なぐらい人のことしか考えない人に。  
どうやったたらわかってもらえるかって。

「…だってそんなのはあり得ないんです。

僕は厳然として男で。富貴砂菜ちゃんじゃない！！！！」

「…へえ？よく覚えてたんだ？」

「全部覚えてますよ。あなたのことなら全部。」

「…そうだな。確かに。」

俺は区切って。

「確かにあんたは富貴砂菜じゃない。

だけど俺は富貴砂菜とあんたを比べたことなんか1回もないよ？」

「…それは。」

「どうせあんたは自分が男だからこの関係はおかしいって。」

そう言っただけなら俺は傷つかないで済むとか思ってるんだろ？俺がどんなに。

どんなにそれであんたのその行動で傷つくかなんて考えたこともないんだろ？」

「…そんな傷はすぐに癒えます。」

「だったらあんたは？」

「一人で立ってるつもりでいるわけ？」

「周りがどんなにあんたのこと心配してるかなんて考えたことないだろ？」

「…心配なんかするわけじゃないですか！！」

「僕は身寄りもないから誰も心配なんかしないし。」

「周りの人は一時的な心配はしてくれるかもしれないけど。」

「…じゃあお前を止めた澄香は？」

「淳也は？翼は？…俺は？」

「…それは感謝してます。」

「だからもう心配しないでいいように僕は消えようと思ってて。」

「独りよがりもいい加減にしろよ！！！！」

「俺はそこでさすがにキレたんだ。」

「確かに利加さんは人のことを思うあまりだと思っただけ。」

「でもそれじゃあ利加さんの幸せはないじゃないかって。」

「あんたさ。消えたらそれで終わりでも思ってるわけ？」

「え？」

「…あんたの行動なんか絶対把握してやるって判ってないわけ？俺執念深いんだけど？」

「…そんなのするわけないっ！！！！」

「言い切れるのかよ？」

俺は低い声で言った。

利加さんが息をのんで。

「俺あんたが消えたら絶対探し出して襲うかもよ？」

「またくく冗談を。」

「マジだけど？」

俺利加さんがもし何も言わずに消えたら絶対探して。

監禁したいぐらいなんだけど？」

「…そんなの犯罪じゃないですか!!！」

「そうだよ。あんたに俺は狂ってる。

じゃなきゃ男にこんな言い寄るかよ!!！」

「くくくっ!!！」

「…あんたは俺を犯罪者にしたいわけだ。

見出しはこつ。

結城綺羅男のマネージャーに狂って監禁容疑と強姦未遂で逮捕。

どう？」

俺は勝ったと思った。

「…そんなの僕が許しません!!！」

「…だけどあんた消えるんだろ？」

じゃあ俺は近いうちに逮捕されるってわけだ。」

「くくくくっ!!！止めてください!!！」

「でもあんたは消えるんなら俺に犯罪者になれって言ってるのと一緒のようなもんだぜ？」

「…判った。判りましたからもう止めてください!!」  
利加さんは自分を抱きしめながらそう言った。  
俺の本気はこんなもんじゃない。  
やっとなんか判ったかよ?

「利加さんさ。徐々でいいから嫌悪症治す練習しよう?  
俺も協力するからさ。」  
利加さんはうつむいたままうなずいた。

利加さんが怖いのも判るんだけどね。  
だってやっぱ男に言い寄られるのは気分いいもんじゃないし。  
でも離すのは無理なんだよな。  
利加さんきれいだし。  
もうホントヤバイ感じ。

遅かれ早かれたぶん利加さんにはこんなこと起こるだろうって思っ  
てはいたんだけど。  
ストーリーの性質が悪すぎた。

これからはもつと利加さんから目を放さないでいなと。  
俺はそう思ったんだ。

## 瞳を離さない 2

翌々日利加さんに退院の許可が出た。

それは泉野が医者に言ってくれたらしい。

病院にいるより仕事した方が治りが早いって。

ただ舌をかむ癖が…と医者は渋ったらしいけど。

何かあつたら泉野が自分が責任を持つと言ってくれて。

利加さんは退院できた。

そして俺は呼び出しをくらったんだ。

泉野に。

泉野とは真田プロダクションのラウンジで会ったんだけど。

何せ俺も泉野も有名人なもんだから泉野は人妻だし。

不倫騒動とか勃発したら大変なもんだから会うのにも気を遣う。

利加さんは翼と澄香に迎えに行ってもらった。

本当は俺が直接行きたかったんだけど。

精神病院に結城綺羅が…って記事がなぜか今日発売の週刊誌に載ってしまつたんだよね。

…それで淳也に怒られて自肅をくらった。

ってか何で俺の行動をみんな見てるわけ…（怒）  
仕方ないんだけどさ。

泉野には会った途端殴られたんだ。

有段者が容赦なく握ったこぶしはそこらのチンピラよりずっと重くて。

俺は吹っ飛んだ。

「…あなたは一体どれだけ利加さんを傷つけたら気が済むんですか！！」

泉野は殴ったすぐ後にそう言ったんだ。

俺は茫然としたね。

ってか殴られるようなことしたか？俺？って自問自答しても判らないし。

でもわからないなんて言ったらまた殴られそうだったから黙って泉野の真正面に座った。

「…いきなりの挨拶がそれですか？泉野さん。」

俺が殴られた頬をさすりながら言っと。

泉野は俺を睨んで。

「…利加さんをこれからどうするつもりなんですか。あなたは。静かな声で言った。

「…どうとは？」

「だから付き合いは止める気はないんですか？」

「は？意味がよくわからないんですが？」

「…惚けなくていいです。あなたが利加さんと付き合い合ってるの知ってますから。」

「…だったら俺からは何も言うことないと思えますか？」

「…あなたは利加さんを苦しめてるの判らないんですか？」

「…どうしてそう思うんです？」

俺は聞き返した。

だって腑に落ちないから。

「…どうしてって。」

「…俺が不誠実だから？」

俺が女にだらしないから？

俺が利加さん好きになるのが信じられないって言いたいんですか

？」

言いながら俺ってひどい奴だよなって痛感する。

「ええ。そうですよ。」

利加さんあなたのせいで心が壊れたんでしょう？」

…凶星なんだけどね。

判ってるんだよ。

俺が諸悪の根源で。

俺と出会わなければ利加さんはきっと平穩に生きて行けただろうし。だだけど。

「…だけど利加さんは俺に体さえ明け渡してくれたんです。」

あの潔癖な利加さんが。

俺はこの人だけは裏切っちゃいけないって思ったんです。」

「…あなたは本気なんですか？」

何でいばらの道に行くの？あなたなら普通に生きていけるでしょ？」

「…そんなの楽しくないでしょ？」

平坦の道なんかつまらないよ。

俺は利加さんと這い上がる道ぐらいがスリルがあって好きです。」

泉野は俺を見つめて。

「…そっか。」

そう言った。

「…そうです。これが俺の行く道です。」

泉野はため息をついて。

「…ごめんね。少しいじめたくなっちゃって。

あなたの本心聞きたかったんだ。

本気なのかって。

私は利加さんにも言ったけど本気なら応援するつもりだから。」

「…元ヤンキーの泉野さんからしたらきつとこんなの気の迷いだと思っんでしょ？」

俺だって利加さん以外考えられないもん。

ってか男に言い寄られるなんて願ひ下げだし。」

「…これからどうするつもりですか？」

泉野は俺を見つめた。

「…これから？」

「そう。これから。」

「…これから。俺はずっと利加さんに傍にいてもらうつもりです。」

「…へえ？」

「…結城綺羅としては仕事は今以上にするけどスキャンダル起こさないように気をつけますよ。」

利加さんが泣くから。」

「…私ね。あなたのこと大嫌いですよ。今でも。」

だってちゃらちゃらしてるし人を傷つけても平気だし。」

女にだらしないし。人気はあるし。  
かつこいいのも認めるけど大嫌い。」

「それはひどいですね。  
でも俺も泉野さんみたいに元ヤンキー姉ちゃんは嫌いです。  
俺に背が近いつて言うのも腹立つし。  
きれいなのも認めるけどでかい女は嫌いです。」

にっこり笑って応戦したら。

泉野が吹き出した。

「…ドローですね？」

その時真田が声をかけてきた。

「真理。」

「ああ。一矢。」

「話は？」

「ああ。もうあらかた済んだとこ。」

「…あの。」

俺は頭を下げた。

「利加さんのことありがとうございます。」って。  
だって。

俺はそれが伝えたくてここに泉野に会いに来たんだから。

「…感謝してよね？」

結構大変だったんだから。

有段者でもブランクあるから筋肉痛だよ。ホント。」

そついう泉野に真田が割って入った。

「…嘘ばっか。腕がなまるからって俺相手に投げ飛ばすくせに。」

「それはいいの!!! 一矢は旦那だから。」

俺が引いてると。

「… 結城綺羅さん!!!」  
名前を呼ばれた。

「はい。」

「ちゃんと利加さんを見てあげてね？」

約束だよ。」

「…はい。」

「泣かしちゃだめだよ。」

「…もちろん。」

「私あんたを信じるから!!!」

「はい!!!」

殴られた頬は痛かったけど。

気分は晴れ晴れとしてたんだ。

… 利加さんをもう泣かせないから。

泣かせたくないから。

利加さんには悪いと思ってるよ。マジで。だって利加さんの体の負担考えたら俺ならゾツとする。

その日は午後からまた弁明の記者会見があつて。

それは俺の昔の発言に対しての謝罪と何で精神病院にいたかを説明しなければならなかつた。

昔なら鼻でせせら笑つて無視を決め込むとこなんだけど。

利加さんがきつとまた傷つくから。

だから俺は受けたんだ。

淳也に珍しいとえらく驚かれたけど。

結城綺羅じゃないみたいだなんて抜かしやがつたし。

昔俺は精神科にかかる奴なんか生きてても仕方ないって言った覚えがあるんだよね。

確かそういうドラマの役柄についてだったと思うんだけど。

俺はその医者でそのナースと恋におちるといふありきたりのドラマなんだけど。

その時のリアルすぎる患者役に俺が吐いた言葉に対してだった。

「精神科なんかにあんたかかつて。

生きてる価値ないんじゃないの?」

思えば酷い言葉で。

空気は凍りついた。

それはセリフなんだけど世間はそれでは許してくれなかったんだ。あたかも結城綺羅が好き好んで吐いた言葉だと。でもそれは結城綺羅らしいと擁護する声も大きくて当時の俺はそれについて反省の弁を述べたことはなかった。

利加さんに出会って思ったこと。

自分がいかに浅はかに人を傷つける人間かということだった。

「結城綺羅さんにお聞きしますが。」

マスコミの声が響く。

いつものAスタジオで。

記者会見が始まった。

まだ利加さんは本調子じゃないから俺は澄香に利加さんを頼んで。Rucypherとして会見に臨んだ。

「…今回の病院にいらっしやったのはマネージャーの方のためだとお聞きしましたが。」

それは私利私欲のためですか？」

「私利私欲とは？」

「…結城綺羅さんは差別をよくされる方ですよね。」

たとえば身障者の方に優しくする必要はないとか。

精神持つてる方にそれは甘えだと突きつけると聞きましたが。」

淳也が俺を制して。

「…関井です。」

今回結城綺羅が病院に行った件ですがRucypherのマネージャーがちよっと怪我をしまして。

俺と水城と珍しくドラマ収録が重なってまして。

珍しくオフだった結城綺羅が俺たちの分まで見舞いに行ったんですがそれが何か問題なのでしょうか？」

あのまま淳也に制されなかったら俺はまた要らないこと言ってもしかしたら利加さんを傷つけたかもしれない。」

「…その通りです。珍しく俺はドラマ収録なかったので行った次第です。」

俺は淳也が言ったことを反芻した。

「その行った先が精神病院でもちよっとした怪我に該当するんじゃないか？」

インタビュアーはしつこかった。

「…心が壊れかけても血は流しませんからね？」  
そこで翼が口を開いた。

「あの。すいませんけどマスコミの方々。」

翼が立ち上がって言った。

「…俺たちをはめたいんですか？」

それとも結城綺羅を蹴落としたいんですか？」

何が聞きたいのかさっぱり主旨が判らないんですが。」

翼はマスコミを睨んだ。

「われわれマスコミは結城綺羅さんがかつて仰ったことばの撤回を願いたいんですが。」

俺はそれを聞いて立ち上がった。

何を言っても不利なら頭下げちゃって。

翼が何か言いかける前に俺は口を開いた。

「…今までの俺が足りないばかりにいろんな方を傷つけたことを深く反省します。」

「ごめんなさい。」

俺甘ちゃんなんで自分の言動がどれだけの人を傷つけるかなんて考えたことなかったんです。

ホントバカでした。

本当に心から謝ります。ごめんなさい。」

翼と淳也も俺にならって頭を下げてくれた。  
俺は仲間に本当に感謝したんだ。

マスコミはもう何も言えなくなってる。

会見は無事終了した。

俺は芸能人だってこと。

ちゃんと頭に置かなくちゃ。

そう思った。

誤解 1 for rika

「利加さん。見てよ。」

結城綺羅が頭下げてるよ?」

その様子は僕たちが待機してる控室のテレビにも映っていた。

後にも先にも結城綺羅がマスコミ相手に頭下げてるのなんか見たことなくて。

僕は食い入るように見てしまった。

「利加さん。」

澄香が声をかけてきた。

「はい。」

僕は視線をそらさないで。

澄香に返事をした。

「利加さん。俺今から利加さんを触るよ?」

「え?」

「言ってからじゃないとまた噛みつかれたらたまったもんじゃないから。」

まあ利加さんが噛んだときのために俺もうマニキュアしてないんだけどさ。」

そう言っつて澄香は僕に手を見せた。

意外にきれいな手をしてて。

それがダークブルーの爪のせいで判らなかつたんだなっつて思う。

「それはごめんなさい。だけど。」

「…っつか何で僕を触るんですか?」

「抱きしめさせて？」

「え？」

「いいじゃん。減るもんじゃないし。

俺利加さんを好きなんだけど？」

「えええええ？」

「…俺言っただと思うけど？」

澄香はふくれ面で僕を見た。

「…利加さん可愛いんだもん。」

「…何言ってるんですか！！」

可愛くなんかありません。第一僕はもう30手前ですよ？

そんな男が可愛いなんてありえ…！！！！」

「俺だってそう思ってたよ。」

「ただどああなたの弱さも嫌みじゃないんだよ。」

「…え？」

妙な真剣さに僕はたじろいで。

動悸はするし。

「…怖くないからさ。」

お願い。抱き締めさせて？

あんたのりハビリにもなるし。」

「ちよっ！！ちよっと待って…！！」

僕は両腕で抱きかかえようとする澄香を制した。

「前からガバッと来ないでください…！！」

「じゃあどうすればいいんだよ。」

澄香はもう抱きしめる前提で話が進んでいて。  
僕是否定しても無駄だと気づいて。

澄香と距離をとって。

「…ゆつくりなら良いですから。」  
自分が恐怖を覚えないようにゆつくりと澄香を制したんだ。

ゆつくりゆつくり抱きしめられて。

不思議と恐怖を覚えなかった。

「ねえ。利加さん。」

「はい。」

「…何で結城綺羅が好きなの？」

耳元でささやく。

同じ痛みを抱えてる澄香は優しくて。

「…たぶん僕はあの人を好きになるのが運命だったんだと思います。」

「…男なのに？」

「…僕は母親しかいなかったからきつと強い人に憧れてたんだと思います。」

「…でも淳也さんや翼さんじゃなくてなんで寄りにも寄って結城綺羅を？」

「…僕趣味悪いんですよ。」

「顔だけ良い人にきつと心持ってかれたんだと思います。」

きっと理由はなくて。  
でもたぶんそれは必然で。  
だけど一緒に隣を歩く人は違っていて知ってるから。  
ずっと辛い。

「俺なら結城綺羅なんかよりずっと利加さん大事にするのに。」  
「…何言ってるんですか。」  
「愛さんがいるでしょ？」  
「…愛は。」

「連絡とりましたか？」  
「澄香は首を振った。」  
「…じゃあ連絡とらないと。」  
「僕応援してますから!!」

その時だった。  
楽屋のドアが音もなく開いて。

結城綺羅が鬼のような形相で立っていたのが見えた。

## 誤解 2

利加さんを怖がらせるとか。  
頭になかった。

ただ目の前で抱き合ってる澄香に嫉妬して。

利加さんをめちゃくちやにしてやりたい衝動に駆られた。

「あんたは！！！」

俺の地を這うような声で。

利加さんが顔をあげた。

「…綺羅さん。」

「…綺羅さん。」

澄香と利加さんはほとんど同時に声をあげ俺の名前を呼んだ。

「…澄香。とつとと利加さんから離れる！！！」

俺の怒りを含んだ声に澄香は驚いて利加さんを離れた。

「…ってか何で？」

「今記者会見じゃ？」

利加さんが俺を見上げ言った。

「お生憎さまで。」

「あれ追っかけ生っていうんだよ。」

「…ライブって出てるのに？」

「…そういうこと。」

「…あの綺羅さん？」

澄香が声をかけてくるのがうっとうしくて。

「澄香。てめえ人のもんとるんじゃないやねえよ!!!」  
口汚く罵った。

澄香は俺を悲しそうに見つめた。

「…あの。綺羅さん。」

利加さんが弁明しようとしたから俺はキレた。

「…何なの？あんたは!!!」

俺はあんたここで待機させたのは澄香といちゃつくためじゃない  
!!!

あんたが不安定そうだから仕方なしに置いて行っただけだろうが  
!!!」

利加さんは俺の剣幕に押され。  
後ずさった。

俺はそれすら気に入らなくて。

「あんたは!!!」

澄香といちゃついて感じちゃったわけ？

淫乱だから？」

酷いこと言ってるって自分でも判ってたのに。

止まらなかった。

利加さんの顔が真っ赤に染まり。

俺はそれでも止まらなかった。

「あんたは俺のことを女ぐせが悪いつて言っけどあんたはもっと性  
質悪いじゃん？

男誘ってるじゃん？

あなたの母親だってホントはお水の人間だったんじゃないの？  
だから淫乱の血をひいてるとか？  
だってあなた誰の子か判んねえじゃん？  
あなたの父親が医者だって証拠もないし？」

パンと良い音がして。

俺は利加さんに叩かれた。

利加さんは泣きながら怒ってた。  
それでも俺は止まらなかった。

決定的に言わないと気が済まなくて。

「あんた俺を変態だっていうけどあんただって充分変態だよ。

自分の母親に欲情するなんて最低だよ！！

俺にはさっぱり判らない。

まああんたは俺に抱かれて感じてるからなあ？」

…嫉妬心が。

独占欲がこんなにも俺の中に渦巻いてるのかって怖くなるぐらいに。  
俺は利加さんを傷つけても飽き足らなくて。

でも利加さん微笑んだんだ。

さっきまで怒ってたのに。

「…澄香さん。愛さんと幸せに。」

利加さんは澄香を促して。

楽屋から出した。

そして。

俺を向き直って。

「だから僕なんか止めた方がいいって言ったでしょう？」  
きれいに微笑みながらそう言ったんだ。

「だからって何だよ？」

「…淫乱で母親を好きな変態の僕は。

人を愛する資格なんかないって僕はこの前も言ったと思いますけど？」

「…それは。」

「あなたに抱かれて感じてる僕は確かに変態なんでしょう。それは認めます。

あなたが僕を淫乱だというならそうなんでしょう。

だから言ったじゃないですか。

僕なんか捨ててしまった方があなたも楽だって！！」

利加さんは俺が苦し紛れに提供した下世話な話題にもちゃんと答えて。

「…だけど。」

僕は母親をあなたにだけは販されなくなかったです。」

まっすぐ俺を見据え。

利加さんは言った。

心が離れてしまったとか。  
そんな言葉では言えないぐらいに冷たい表情になってしまった利加さんは。

「利加さん。ごめん。」

俺はその時初めて言っただけならならぬことを口に出してしまったと気づいて。

あわてて謝ったけど。

初めて会った時のように利加さんは冷たい表情を浮かべて。

「…もう良いです。」

だけど僕にはもう手に負えないです。

担当替わってもらいますから。」

「なっ！！あんた本気で言ってるのか？」

俺が声を荒げると。

それ以上に冷たい声で。

「…って言ってもたぶんあなたは御曹司ですから無理だろうけど。

人事権握ってらっしゃいますもんね？

だったら個人的なお付き合いを止めさせてもらいます。

それぐらいは僕の好きなようになるでしょ？」

「…あんたは！！！」

俺がつかみかかると。

利加さんは一瞬震えて。

「…淫乱な僕はあなたに抱かれて流されて。

泣かされて。それであなたは満足ですか？」

そう言ったんだ。

俺はつかみかかった手を下して。

「…利加さん。」

そっと抱き寄せたかった。

「…止めてください。舌嚙みますよ?」

そう言われて止まる。

利加さんの態度は強固だった。

それだけ俺が怒らせたってことなんだけど。

俺には為す術がなくて。

ただ好きなだけなのに。

本当にただ好きなだけなのに。

俺は本当に。

悲しくて。

楽屋を後にしたんだ。

こんなに徹底的に俺を凹ませるのは利加さん以外にいない。  
なのに俺は当初感じてた怒りはどこへやらで。  
ただ悲しくて。

喪失感だけが胸に降りてきた。

## 誤解 2 (後書き)

画像悪いですがブログに利加を載せました。  
興味があればどうぞ。

m e g u m i - g r a c e . j u g e m . j p

## 裏切り 1

利加さんに出会って。

本当に初めて俺は女を抱きたくなった。  
それが裏切りといわれてもいい。

もう本格的に愛想尽かされたから。

俺は自暴自棄になっていた。

ただ利加さんに会いたくて。  
声が聞きたくて。

… 本当は抱きたくて。

キスしたくて。  
体を持て余した。

「綺羅？」

途中で翼とすれ違って。

何か呼ばれた気がしたけど。

俺は聞こえなかったふりをした。

… 利加さんを知ってる奴に会ったら俺は泣きそう。  
本格的に泣いてしまいそうで。

だから無理やり歯を食いしばって事務所を出たんだ。

今回の喧嘩は派手で。

たぶん修復は難しい。

だって俺は言っではならないこと言ってしまったし。  
利加さんは舌を噛むと言った。

それは脅しても何でもないこと澄香に聞いて知ってるから。

喧嘩っていうか。

本当は一方的に俺が傷つけられたっていうのが正しいんだけど。

何で俺は利加さんなんか好きなんだろう？

そう思うと。

胸が痛くて。

だって好きだし。理由はなかった。

外の空気を吸うと少し落ち着いて。

そこで同じ事務所の芳賀悠里っていう女優に会った。

芳賀悠里は俺と同年の女優で。

美人だった。

面識だけはあって。

向こうは向こうで結城綺羅と親しくなりたいたいという思いが全開で。  
悪くなかった。

結局俺はその日は利加さんちに帰らず。

… 芳賀悠里と近くのホテルにしけこんだ。

昔みたいに女遊びすると俺ってばノーマルなんだなって思うし。  
利加さんなんか何が良いんだって思うし。  
ちゃんと俺は女抱けるじゃんって再確認して。

…それが裏切りだと言われても。  
今の俺にはどうでもよかった。

…もちろん避妊はしたよ？  
あたりまえだけど俺は責任取るようなことになると思嫌だからさ。

芳賀悠里はまあまあだった。  
つまみ食いするぐらい悪くないって。  
利加さんがきつと絶対許してくれないような感情を持って。  
芳賀悠里を抱いたんだ。

でも何で。  
俺は罪悪感だけ持ってるんだらう？  
それが知りたかった。

## 裏切り 2 for rika

「…利加さん？何かあった？」

僕に声をかけながら楽屋に入ってきたのは翼だった。

「…どうしてです？」

僕は感情を悟られないようになるべく平坦に答えた。

「…いや。今綺羅にそこで会ったんだけど何かすごい形相で出て行ったから。」

呼び止めたんだけど聞こえなかったみたいで真正面睨んでたから。

「

「…何もありませんよ？」

何か用でもあったんじゃないですか？」

「…綺羅が？」

利加さんに会わずになんてまずあり得ねえって思うけど？」

僕は微笑みを顔に張り付けて。

「…そんなことないでしょ？」

綺羅さんだってプライベートの何かあるはずですよ。

僕にべつたりはそれこそおかしいでしょ？」

「…だけど。今そこで澄香とも会ったけど澄香は澄香で泣いて電話してるし。」

何かRucypherヤバくない？

このまま自然消滅とか俺は嫌だよ？」

「…大丈夫ですよ。綺羅さんも澄香さんも自覚は持ってますって。」

僕には自信はなかったけど。

そう言い切ってみた。

「…利加さんがそう言うなら信じてもいいのかな。」  
単純な翼は僕が言ったことを聞いてそう言ってくれたから。  
僕は胸をなでおろした。

今の今まで結城綺羅とは言い争って。  
こんなにも辛いつてばれなくて良かったと。

だけどその日。  
結城綺羅は僕の家に戻ってこなかった。

まああれだけ僕も言ったからあれで平然と帰ってこれるなんて思っ  
てなかったけど。  
僕は少し信じたかったんだ。  
結城綺羅を。

本当に僕を好きでいてくれるならもう少し足搔いてほしかったって。

だけど僕はその日の夜のこと。  
1週間遅れで知ることになる。

週間遅れの週刊誌にでかでかと結城綺羅とうちの女優芳賀悠里との  
密会の写真が撮られて。

僕は打ちのめされた。

あんなにひどいこと言う人なのに。

まだ好きで。

未練たらしくて。

笑えてきた。

「はははは。」

乾いた笑いは僕のうちじゅうに響き。

誰もいない時でよかったと胸をなでおろした。

… 結城綺羅と言い争いをしてから。

一言も口をきいていない。

正式には澄香伝手で僕は用件を伝え。

翼伝手で戻ってくるのがこのごろの日課で。

澄香は僕たちの騒動に巻き込まれた形だけ。

何か感じてるらしく拒否らない。

僕はそれを良いことにずっと結城綺羅とは口をきくつもりはなかった。

「お前ら！！おかしいよ！！」

その導世がキレるまで。

### 裏切り 3

「お前ら！！いい加減にしろよ！！」

淳也が眉根を上げて怒るのはもつともで。

俺はその様子を部外者面で見えた。

「まず利加さん！！」

あんたマネージャーの自覚あんの？

翼と澄香を介して綺羅と話をつけるだなんてあんた仕事舐めてんじゃねえの？」

俺の心にはもう利加さんに対する憎しみしかなかった。

派手な声を上げて怒鳴る淳也をおかしくて見てたんだ。

「…いけませんか？」

出た！！鉄面皮！！

冷たい声の利加さんが応戦する。

「…僕はあくまでRucypherのマネージャーで結城綺羅のではありませんから。」

結城綺羅と話さないからって何で仕事舐めてるってことになるんですか？」

うっと詰まる淳也に翼が加勢をする。

「…でも利加さん。」

直接言わないといけないことだっと思ってあると思っけどっ。」

「…僕は無いと思います。」

僕なんかが意見を言えるほど結城綺羅さんは庶民的じゃないです

から。」

言うね。鉄面皮の利加さん。

俺ホント何であんたなんか好きだって思ってたか判らなくなったよ。

「だからって!!」

詰まりながら淳也の応戦は続く。

「だからってあんた!!」

板挟みになってる澄香のこと考えたことあるのかよ?」

出た〜。諸悪の根源〜。

「…それは。」

言い淀む鉄面皮利加さんに澄香が声を上げる。

「…俺は別に良いんだけど。」

「良くねえだろうが!!」

キレる淳也。

そして翼は部外者面して不敵に笑ってる俺に話を振ったんだ。

「…綺羅。何でお前何も言わねえの?」

俺は不敵な笑みを浮かべたまま。

「…別に?」

そう返したんだ。

そして利加さんを見た。

利加さんは冷たいまなざしで俺を見て。  
言ったんだ。

「…僕は用済みみたいだし。

だけど使い捨てだから辞令が降りるまで仕方ないんです。

結城綺羅さんがいくら僕を嫌がっても。

僕はこの仕事をやるしかないし。

だからと言って口もききたくないほどに嫌われた相手だから少しでも不愉快さを感じさせないためだったんです。」

鉄面皮の利加さんは。

感情が読めない顔つきで俺を見て。

そして視線をそらせた。

「…だからって澄香は。」

淳也が言いかけて口を噤む。

…澄香が人知れず泣いていたんだ。

この場面でお前が泣くか？って思ったけど。

淳也と翼は大騒ぎし始めた。

化粧が崩れるよ〜とか。

利加さんいるじゃん？とか。

わけの判らない慰め方をして。

利加さんは相変わらず鉄面皮で。

冷たいまなざしを澄香に向けて。

謝ったんだ。

「…澄香さん。巻き込んでしまつてごめんなさい。」と。

俺はその様子をやっぱり部外者面で見ってたんだ。

何か人の不幸見るのつてこんなに楽しいんだつて思えて。

俺は好き勝手生きてやるつてホント思つて。

人の感情なんか面倒で。

俺のことそんなに嫌なら辞めたらいいつて本気で思つて。

だつてやっぱ抱くなら女に限るつて今回痛感したんだ。

だつて芳賀悠里は良い女だつたし。

後腐れがなければなお良いし。

俺だつてちゃんと恋愛できるんだよ？

ゲームだけだ。

好きなふりをすれば女なんか一発で落ちてくれる。

鉄面皮の利加さんなんか手に入らないし。

潔癖だし。

俺が一番嫌つてたタイプの人間で。

まじめで潔癖で融通がきかなくて柔軟性がなくて。

優しく…なくて。

甘やかしてくれなくて。

綺麗だけど近寄りがたくて。

だから好きになつたつて思つた時。

ホントヤバいつて思つたんだ。

今のほうが何ほかラク。  
それを束縛というならそうかもしれないけど。

「結城綺羅さん。」

その時部外者面してた俺に。

鉄面皮利加さんが俺の名前を呼んだんだ。

1週間ぶりに。

俺が返事の代わりに視線を少し向けると。

「…あのひどい言葉をもう一回皆さんの前で言うてください。」  
そう言った。

「セリフだと思えば別にあなたは躊躇する理由もないでしょ?」

鉄面皮利加さんは俺にそう要求して。

自分は俺を睨みつけたまま。

離れたところに座ったんだ。

俺はため息をついて。

言った。

「何でしたっけ？」

淫乱な利加さんは血筋なんじゃないの？でしたっけ？

利加さんの母親だって実はお水の人でだから利加さん自身そんなに淫乱なんだ？でしたっけ？」

不敵に笑いながら心はもう痛まなかった。

「…それからこれは付け足しだけど。」

俺は笑いながら言ったんだ。

「…俺。利加さんのこと大嫌いだよ。」

今までが嘘みたいは何であんた好きだって言ったか自分で判んないぐらいにあんたが憎くて仕方がない。」

利加さんは綺麗に微笑んだ。

ほらね。

そう言う口元で。

淳也と翼はそついう利加さんを茫然と見つめていた。

「…綺麗。本気で？」

翼がやつと紡いだ言葉は俺には届かなかった。

だって俺は。

俺は泣いていたから。



## 裏切り 4

「嫌われる理由は数あれど好かれる理由は何一つない僕なんかに当初からおかしいって思ってたんですよ。」

俺が泣いてるところに利加さんの感情が読めない声が降りてくる。

「僕がいるからあなたはダメになる。」

ようやく気付いたんです。

あなたに言われて気づくなんて馬鹿すぎだけど。」

その声は平坦で。

俺はさらに追い打ちをかけられたように泣いた。

何で涙なんか演技でもないのに出るのか判らない。

なのに嗚咽も止まらなかった。

「利加さん？」

翼が声を上げた。

利加さんは声も出さず涙をためて。

「きつとみんな。結城綺羅さんが思うように僕のことと思ってたんですよ。」

昔から。

母親を恋愛対象のように愛す僕を気味悪がって。

おまけにこの容姿だからしかも名字もまともじゃないし。

だから気味悪がられるってどこかで思っていました。

まさか結城綺羅さんに淫乱で気色悪いって言われるまで気づかないなんて僕も焼きが回ったなって思ったけど。」

「ひどすぎるだろうが！！綺羅！！」

淳也が声を荒げる。

そして俺を見た。

俺は泣きながらくつと笑って。

「…事実だからそう言ったただけだろう？」

救いようがない言葉を吐いて。

俺はたぶん泣きながら凶悪な面をしてたと思う。

利加さんは純粹な気持ちで母親を慕ってたのは俺は承知のはずだった。

だけど止まらなかった。

愛しすぎて憎くて。

手に入らないのなら俺がこの手で壊してやるって思って。

「…酷くないですよ。淳也さん。」

結城綺羅さんは思ったことを口にしただけで僕が勝手に傷ついただけで。

この期に及んで冷たい声で利加さんは俺をかばう言葉を紡ぎ。

そして言った。

「ただ事実は事実でも僕はこの間も言ったけど結城綺羅さんにだけはその言葉を言ってほしくなかったんです。」

淫乱の変態って罵るだけならよかったのに話が僕の母親に及んで母親を貶したから僕はあなたを許せなくなっただ。

僕にとって母親はいつまでも聖域だったんだから。」

「ふ〜ん。マザコン。」  
俺は苦し紛れに茶々を入れた。  
その俺を利加さんは一瞥して。

「…マザコンで結構です。僕が何を思おうが自由だし。  
そんなの束縛される義理はないし。  
あなたに何を言われてももう何も感じません。」

瞳は感情を失い。

出会ったころのように俺を映さない。

俺はそれが悲しくて。

揺さぶりたい衝動に駆られて。

空気が重くて俺は飛び出たんだ。

「綺羅!!」

淳也の声が聞こえたけど止まらなかった。

…こんなの俺じゃない。

こんなに傷ついて心が痛いのも俺じゃない。

俺なんかたくさんの人に愛されて。

…愛されて。

それはまやかしで。

でも愛されてスターで。

…今じゃ抱かれない男ナンバーワンで。  
マルチに活躍してて。

テレビで見ない日は無いほどに売れっ子で。

俺が愛の言葉紡げば誰だって落ちるって。  
そう思ってた。

…空しくて。

俺の魅力が判らない奴はこっちから切ってやる。  
そう思ってるのに。

…利加さんにだけは勝てなかった。  
芳賀悠里を抱いても空しいだけで。  
憎くていとしくて。

憎すぎて判らなくなるぐらいに。

ちくしよっ!!!!

何で!!!!

何でこんなに!!!!

好きなんだよ!!

あんな鉄面皮こっちから願い下げだと言いたいの!!

決定打 1 for rika

「…利加さん。」  
翼が声をかけてきて。

「…綺羅追いかけてなくて良いの？」  
そう言ったから。  
僕は苦笑いを浮かべて。

「…どうしてです？」  
どうして僕が綺羅さん追いかけてなきゃならないんですか？」  
聞いてみた。

「…だって利加さん綺羅のこと本当は嫌ってないだろう？」  
淳也がそう続けたから。  
僕は。

「…だったら何だっていうんですか？」  
僕はとりつく島もない言い方で淳也の言葉をはねのけて。

「…そんな言い方利加さんらしくないですよ。」  
そこで割って入ってきた澄香の言葉にハツとした。  
「…そんな言い方しないでください!!」

澄香の化粧は涙で完璧に落ちて。  
ほぼ素顔のまま僕を見た。

「…利加さん痛すぎるよ。」

あんたみたいなのをこういうの知ってる？

自意識過剰で被害者面で一番みんなを傷つけてるのは結城綺羅じゃない。

あんただよ！！利加さん！！」

僕は怒鳴られて。

…何も言えなかった。

「…結城綺羅はあんたが一番傷つけたから女に走って。」

結城綺羅も俺も翼さんも淳也さんもあんたが自分が価値がないと生きてても仕方がないとそんな言葉吐くから傷ついて。

あんたが卑屈になるたびあんたのことが心配で。

只でさえあんたはストーカー被害に遭ったばかりだからみんな気を遣って言わなかったただけなんだよ？

その心配すらあんたはしないしてほしいと言う。

だったら俺たちは何なわけ？

あんたの支えにすらなれないって言うのかよ？」

「澄香止めるって。」

翼が止めに入るけど。

「…被害者面してあんたが一番Rucypherをダメにしてるじゃないか！！」

澄香は僕にそう言い切ったんだ。

…僕がRucypherをダメにする？

まさか！！

あり得ない。

自分で仕事つぶすなんてありえないって。  
言いたくて。

でものが詰まって言えなかった。

僕は微笑みを顔に張り付けて。  
言うしかなかった。

「…もう辞めます。  
全部辞めます。」

そう言ったんだ。

「利加さん俺らそんなことを言ってるんじゃないか…。」  
淳也が言葉を紡ごうとしても無理だった。

あんたが一番被害者面して!!  
あんたが一番人を傷つけてるじゃないか!!

澄香のその言葉はある意味真実に近かった。

ああそうかって。

僕は今まで結城綺羅にさえ許されてきたんだって。

存在を許してもらってたんだって昔ならそう思ってたのに。  
きつと傲慢になってたんだ。

結城綺羅を好きだって思ってから自分も偉くなった気がしてたんだ。

だから偉そうに僕のことなんか考えなくて良いだなんて傲慢なこと  
言えるようになってたんだ。

譲の良いところはただ一つ。

偉そうにふるまわないとこよ。

そう言われて育ってきたのにこのザマかって。

母親にも申し訳なくて。

僕は夢から覚めた気がした。

そして。

「……………ごめんなさい。」

わがままばかり言って。」

覚醒したと同時に僕はRucypherのマネージャーから消えな  
くちや。

そればかり思ってた。

仕事場から消えるんじゃないやなくて配置換えしてもらわなくちゃって思ってたんだ。

僕には内勤がよく似合うから。

人とかかわる仕事じゃなくて。

人のスケジュール調整する人に。

僕は外に出て。

人事課に行こうと思った。

もうきつと結城綺羅も何も言ってこないだろうから。

いつの間にか僕は人をたくさん傷つけて。

傲慢になってて。

ゾツとする。

分不相応な仕事をした末路がこれかと僕は改めて感じて。

僕なんかが好き嫌い言えるほどに結城綺羅たちは近しい人たちじゃなかったことに改めて気づいた。

思えば売れっ子の人と一般人の僕が相馴れるだなんておこがましかったんだ。

利加譲だなんて小さな人間は。

小さな世界に小さい両手で抱えられるだけのものさえ持っていればよかったのに。

分不相応なことに携わってしまっただけ。

…後悔してもきれない。

結城綺羅を好きだと思ったことも本当はおこがましかったんだ。

僕はその日。

自分の家に帰って。

母親の写真を握りしめた。

僕によく似たその人を一生愛すと誓ったのに。

愛されたいと願った罰だな。

## 決定打 2

「…綺羅。」

俺は飛び出して。

行くところがなくて。

しばらく経ってからロビーで座つてるところに翼に声をかけられた。俺は泣きはらした瞳で翼を見上げる。

「…決定打を澄香が利加さんに食らわせたよ。綺羅の代わりに。」  
そのため息をついて翼はジャンパーのポケットからコーヒーを取り出し。

俺に渡してくれた。

コーヒーの缶は温かくて。

「決定打？」

俺が問うと。

翼はコーヒーの缶を自分の分をあけて。

一口飲んで言った。

「そう。決定打。」

俗に言う形勢逆転ホームランってやつ？」

「……。」

「ってかき。綺羅はさ。」

「一体どうしたいわけ？」

「…どうしたいって何が？」

「…利加さんのこと。俺たちRucypherのこと。」

結城綺羅のこと。

…芳賀悠里のこと。

一体どうしたくて何がしたいんだ？」

「…俺は。」

口を開きかけてうつむく。

言っても何か意味がない気がして。

「利加さんは基本当初から俺は何も変わらないって思っただよね。」  
翼が口を開いた。

「え？」

「…澄香は昔から利加さんのこと知らないから決定打利加さんに食らわしちゃったけどさ。」

俺は利加さんが変わって傲慢になったとかは思わないんだよね？」

「…何の話？」

「いや。綺羅が出て行ってから澄香が言ったことなんだけどさ。」

澄香は俺たちの以前からは知らないから。

言うことは新鮮そのものなわけ。

利加さんの言動で俺たちみんな傷ついてるの判らないわけ？って  
利加さんに詰め寄ったんだよ。」

「…え？」

俺はあまりの展開にびっくりして。

「それで利加さんなんて言ったと思っ？」

俺が首を振ると。

「…お得意の諦めモードに入って話は終わって。俺的にはこんなのあり？って感じ？」

「ってか利加さんが人を傷つけて生きてるのなら俺らはどうなるのって感じでしょ？」

「少なくとも利加さんは誰に対しても真摯だよ？」

「綺羅だつて言ってたじゃん？」

「俺は仕方なくうなずいた。」

「…それで俺は聞きたいわけ。」

「綺羅の本心。」

「本当に利加さんをやめるのかって。」

「…俺？」

「…利加さんをやめるなら俺がもらつて言いに来たわけ。」

「言っただろうが。俺は結構利加さん好きだつて。」

「男だつていうのも省いても結構好きだよ？」

「…判らない。」

「だ〜か〜ら〜。一体何のつもりで芳賀悠里と寝たんだ？って聞いてんの。」

「翼は焦れて。」

「率直な言葉を紡いだ。」

「…それは。」

「…俺は単なる腹いせだと思ってるけど？」

「利加さんに対する。」

「え？」

「俺ってノーマルじゃん？とか確かめてみたかっただけじゃないの？  
それが芳賀悠里じゃなくてもお前は良かったんじゃないの？」

ただ相手が女で美人で利加さんじゃなければ誰でもよかったんじゃないの？」

翼はそう言っつて。

俺の胸ぐらをつかんだ。

「…俺が何を怒ってるか教えてやろうか？」

翼は顔を寄せて。俺を見た。

「…お前は一時的な感情で利加さんを傷つけたってことに俺は頭にきてんだよ。」

お前がそんなんだから利加さんは息もつけないで。

精神だつて癒されないんだろっつが！！

綺羅は確か言ったよな？利加さんに。

ゆっくり精神治していこうっつて。

そう言っつた矢先に何でお前は利加さんを傷つけるんだ？」

「…それは。」

「澄香に聞いたよ。澄香と抱き合っつてるときにお前が来て。」

勝手に浮気だと勘違いして綺羅自身は女と楽しくやっつたつて真相

はこれだろっつが！！」

息もつけず。

激昂する翼に俺は。

「…じゃあ俺はどうしたらよかつたんだよ…！」  
そう声を荒げたんだ。

「綺羅。お前は利加さんの何も見てないだろうが…！」

利加さんが平気で人と抱き合ってお前を裏切るようなこと  
でも思ってるのかよ？

あの人は潔癖で赤ちゃんのように純粹で  
性的に疎くて。

だけど。だからお前は好きになつたんじゃないのかよ？

長けてない利加さんがお前にとつてとても癒されてたんじゃない  
かつたのかよ？

それが聞きたくて俺は…！」

「だけど俺は…！」

きつともう許されない…。」

それは本心だった。

演技でも何でもないちつぽけな斎藤綺羅という1人の人間の本心。

ドロドロした思いを持たず。

大人の狡猾さを持ってない。

駆け引きが苦手な利加さんを。

俺は愛したんだ。

俺は早くに大人の世界に入ったから。

早くに性的にも長けて。

早くに人間の嫌なところを知ってしまったから。

だから利加さんに憧れた。

コンビニにもあまり行かない利加さんが愛しくて。

バカにしたんじゃない。

そうだ。

俺が利加さん好きだって思った理由。  
それは。

慎ましい生活にあったんだ。

今でこそコンビニにも行くし何かって言ったたらご飯は買ってくるようになったけど。

初めてあの人がご飯食べる様子見た時だった。

ご飯をお湯をかけてふやかして塩だけで食べる。

それでお腹は満ちるから。

あの人は確かにそう言って。

ゆっくりときれいに食べるんだ。

慎ましくて。

何も望まない。

そしてすぐに人に何でも譲れる物に執着しない姿に。  
俺は胸を打たれたんだ。

携帯だって持ってなくて。

テレビもなくて。

あるのは点字の機械だけ。

それだけは利加さんが生きるために必要だったから。

モノがあふれて育った俺には到底理解できない姿だったけど。  
愛されて育ったんだなってひと目で判るその姿に。  
俺は心奪われたんだった。

「…利加さんが淫乱なわけじゃないじゃん。

あの人が人を誘うのも苦手なあの人の方が浮気なんかするわけがないの  
に俺は…!!」

「…やっと判ったかよ?」

「え?」

「あのなあ。

利加さんが今辞めると俺も困るわけよ?

俺せつかく相手役り八で演じてもらってんのに。

まだ白夜のクランクアップ済んでないし。

しかも今度は淳也のドラマが始まるらしいじゃん?

利加さんが辞めると綺羅より俺たちのほうが困るんだって…!!」

「…翼。」

「だから…! 利加さんが動き出す前にお前が行ってちゃんと謝って  
こないと思って思っただけど?」

俺何か間違ってるか?」

「…翼。」

「…つたくこの御曹司は…!!」

どこまで俺たちに心配かけるかねえ?

俺と淳也は少なくともお前の味方だから…!!」

「…すまない。翼。」

「ああ。それから利加さんに会ったら伝えといて？  
淳也が今度はドラマ始まるから休んでる場合じゃないよって。」

俺は頷いて。

利加さんちに出向いたんだ。

利加さんが行くところなんか見当もつかなかったけど。

利加さんだから。

きつと真面目に帰ってるに違いないって信じて。

君には勝てない 1 for rika

呼び鈴がうるさくて。

僕の思考は中断した。

その日は早く上がってて。

あの言い争いは昼間の出来事だ。

夕方僕は5時にもならないうちに家に帰ってた。

正確には楽屋を飛び出してきたってというのが近い。

それから僕は家に帰って。

机に飾ってあった母の写真を見て物思いにふけてた。

「はい。」

僕が玄関を開けると。

結城綺羅が立ってたんだ。

僕は思わずワツと声を上げた。

っつかびっくりして。

だってまさか結城綺羅がまた僕の家に来るなんて思ってなかったから。

完璧心は離れたと思ってたから。

「…鍵持ってたんじゃないんですか？」

僕の第一声はそれだった。  
まあ可愛げのない言い方で。  
間抜けな言い方だったと思う。

結城綺羅は僕を見つめて。

「…入ってもいい？」

許可を求めてきたんだ。

珍しいこともあるもんだと僕は中へ入れるようにどいた。  
靴を揃えてから入る結城綺羅に僕は違和感を覚えて。

「…どうかしたんですか？」

思わず聞いたんだ。

僕の中で今日の出来事は終わったことになってたから。  
もう悩まないって決めてたから。

だから何で結城綺羅が訪ねてきたのかが理解できなかったんだ。

「…俺利加さんと真面目に話をしたいんだけど。」

結城綺羅は僕を見つめてそう静かな声で言った。

「…？はあ。」

我ながら間抜けな声で。

理解するのに数秒かかり。

「…真正面に座ってくれる？」

そう言う結城綺羅に僕は頷いた。

座るとまず結城綺羅が言ったことは。

「…週刊誌の芳賀悠里との密会で俺。

浮気しました。ごめんなさい!!」  
だった。

「え？」

僕は理解するのが遅れて聞き返したんだ。

「…だから浮気して。利加さん傷つけてまずごめんって謝りたくて。」  
僕は謎で。

「…僕にそれが何か関係ありますっけ？」  
思わず聞き返したんだ。

結城綺羅はさらに言葉を紡ぐ。

「…それからあなたの母親のこと淫乱だなんて言っでごめんなさい!!」

言いすぎだと思っし俺あなたの母親に嫉妬してたんだ。」  
「は？」

「だから俺が知らない利加さんをずっと知ってるだなんてずるいって思ったのがつい口に出て。」

酷い言葉になってあなたを傷つけて。」

「…母親に嫉妬？」

「そうだよ!!俺は利加さんが好きだから!!」

あなたのことなら全部知りたいって思うあまりつい…。

あんたが気にかけるものとか笑いかけるやつとか殺したいぐらい

に独占欲が強いんだ。」

「…そんな無茶な…。」

「でも！！俺本気で利加さんのこと好きで！！

好きすぎてヤバいぐらいに。

だから俺が怒ったのもあんたが浮気してたとかじゃなくて澄香と抱き合ってたから澄香に嫉妬して。

それが度を過ぎて要らないことまで言っちゃって…。」

そう言って凹む結城綺羅は僕には年相応に見えて。

…僕は何か怒るのも忘れて。

結城綺羅の声に聞き入ってたんだ。

「…利加さん！！ちゃんと聞いてくれる？」

僕が目を上げると真剣なまなざしの結城綺羅がいて。

「…はい。聞いてますよ。」

そう言った。

もう怒る気にもならなくて。

真摯に謝るその姿にほだされた自分があるのを認めざるを得なかった。

たぶん好きじゃないって叫んでも。

深層心理で結城綺羅を愛して。

たぶん認めたくないけど。

完敗だっと思っただらうと思う。

## 君には勝てない 2

許さないことのほうが許すことより楽だし。  
俺は謝りながらきつと。

冷たいまなざしで俺を見る利加さんに許されないだろうなって感じた。

いくら真摯に謝っても利加さんの聖域に踏み込んだ罪は重く。  
次いで潔癖な利加さんには俺が浮気をしたという事実を認めたくないだろうなって思う。

…しかも浮気したのに好きだってその口で言えるのかって詰め寄られたら俺は。

俺はもう何も言えなかった。

俺の言動一つで自分の思いさえ壊してしまうことがあるってこと。  
俺はこれまで気づかなかった。

「…相手の方はどう仰ってるんですか？」  
利加さんが初めて口をきいたのがそれだった。  
怒ってるのか何なのか判らないような不思議な口調で。

「…相手？」  
間抜けな俺は間抜けな声で聞き返した。

「…だから相手の女優さんは何て仰ってるんですか？」  
「え？」

ため息混じりの利加さんの声に俺はハツとして。

「…あれ以来相手とは会ってないんだ。」

「…マジですか？」

間髪いれず利加さんが声を荒げて。

「…すぐに相手の芳賀悠里さん？でしたっけ？」

謝罪の電話入れないと！！！！」

「…ってか何で？」

俺は利加さんの思考に付いていけずに間抜けに問う。

「…もうあなたって人は！！！！」

何考えてるんですか！！

何で僕のとこに来てるんですか！！！！

順番が違つてしょう！！！！」

「…順番って…。」

「あなたは！！！！！！」

利加さんがやっとな俺を見つめて。

怒つたんだ。

「あなたは酷いことを先方さんにしてるんですよ？」

何で僕に謝るより先に先方さんに謝れないんですか？

きつと慰謝料要求とかそんなところになると思いますけど。」

「…でも避妊したし…。」

「ばっ！！！！何考えてるんですか！！！！」

利加さんが大声で怒鳴った。

「…避妊すれば良いとでも言うんですか？」

芳賀悠里さんの貞操とかあなたは考えたことないんですか？」

「あのねえ。利加さん。」

「あつちも了解済みなんだけど?」

「俺は利加さんが言いたいことが大体判ったんだ。」

「…芳賀悠里は俺と寝れば箔がつくとか思ってるんだけど?」

「は?」

「全く利加さんは擦れてないというかなんというか。」

「だ〜か〜ら〜。」

「利加さんが思うほどに芳賀悠里は清纯でも何でもないんだって。」

「〜〜〜! だからってやりっぱなしですか?」

「…やりっぱなしって聞こえ悪い。」

「芳賀悠里は俺じゃなくて翼を好きなの。」

「その伏線として俺に近づいて俺と寝て。」

「コネを作って翼に近づくってセオリーなの!」

「利加さんはため息をついて。」

「…そんなことが…。」

「そうつぶやいた。」

「…そんなことだらけだよ。」

「この世界は汚れきってるからね。」

「誰も本気じゃないし使えるコネは全部使うし。」

「それで自分の体盾にしても名を売る方をみんな選ぶんじゃないかねえの?」

「純真で。」

純粹で。

人を信じる利加さんは。

きっとそんなの信じられないだろうと思う。

芳賀悠里とは仕事もしたことあるから利加さんだって面識はある。それに。

純真で清らかに見える芳賀悠里でさえ裏の顔は蓮っ葉な女だし。

それを信じたくないのも判る。

だけどこれが現実で。

だから俺は利加さんを好きになっただ。駆け引きが全く効かない相手だから。

「綺羅さんはそれで良いって思ってるんですか？」  
利加さんの問いに俺は詰まって。

「…えっと。」

「…僕のことともそう思ってるんですか？  
こんな相手チヨロイし騙されやすくってほだされやすくって飾りに連れて歩くにはもってこいだとか思ってるんですか？」  
利加さんは真剣だった。

俺はそれをきいて。

声を張り上げた。

「そんな理由で俺がリスク犯すかよ!!」  
自分でもびっくりの大声だった。

「連れて歩くんだっいたら女が良いに決まってるだろ？  
誰が好き好んで男連れて歩くかよ！！  
気色悪い！！！」

「…じゃあ。」

口を挟みかけた利加さんを俺は遮って。

「…利加さんだから俺はリスク犯してんだよ！！  
人気低迷につながりかねない恋愛してんだよ！！  
それでも良いって思えるほどにあんたのことが好きなんだよ！！！」

利加さんは。

その時精神患ってから初めて。

俺の手を握って泣いたんだ。

「…利加さん。」

自分から触る分には大丈夫みたいで。

俺は利加さんの体温を掌から感じてウツトリした。

「…泊っついていきませんか？」

利加さんが初めて誘いの言葉を口にしてくれて。

俺は有頂天で。

だけど。

そう思っって押しとどまる。

「…今日は止めとく。」

あんたのことひどく抱きそうだから。」

俺にしては理性の声を目いっぱい聞いたと思う。

「…そうですね。今日だけは僕も芳賀悠里に負けないように目いっぱい甘やかせてあげられそうだったんだけど？」  
可愛くない言葉を吐く利加さんに。

「…利加さん。そうやって誘うのやめてくれる？」  
へたりそうだった。

「…ってかさ。何か俺としても気が引けるわけ。  
あんたに酷い言葉吐いたし。

あんたの母親はあんたを生んでくれたのに感謝もしないで責めたし。」

「だったら。」

利加さんは近くにあった写真を手繰り寄せて。

「…謝ってください。母に。」  
俺に見せたその写真は。

利加さんと見まごう程によく似た女の人だった。

「…これが？」

「そう。僕が愛してやまない母です。」

「…判る気がする。」

俺は思わずつぶやいた。

利加さんとは違う笑顔で笑ってた。

「ごめんなさい。あなたは綺麗で利加さん生んでくれた人で。」

感謝してます。」  
俺がそう言つと利加さんは微笑んでくれた。

それで俺は聞いたんだ。

「じゃあ俺泊まってく。」

利加さんにも許してもらえたみたいだし。甘やかされたいし?」

話し合つてとても重要だと思う。

俺は今まで話し合わなかったからきつと大事な人傷つけたまま生きてきてるんだと思う。

振られる回数も並みじゃなかったし。

だから。

利加さんに出会つて。

ホントよかつたと思う。

利加さんにだけは俺は完敗だつて。

そう思える相手じゃないと俺は尊敬できないんだ。

## 新生 Rucypher 1

昨日の利加さん綺麗だったなあとか。  
腐れた頭で考えるとニンマリしてくる。

おかげで今日は仕事にならず淳也に蹴りだされた。(恥)

っていうかさ。だって男なのにありえんぐらいきれいなんだもん。  
ヤバいっしょ？あの色気は。

ヤバい。また吹きそうだ。

「ああ。綺羅さん。

こんなとこにいたんですか？」

そんな俺に声をかけてきたのは澄香だった。

「…このたびは済みませんでした。

俺がせがんで利加さんに抱きつきたかったです。

ってかあの人癒し系だから。」

俺は澄香の顔を見て思う。

「…お前。化粧は？」

「ああ。」

澄香は気づいたように言った。

「…もうだいぶ落ち着いたんです。

やっと姉の死も受け入れられるようになってきました。」

「…良かったな。利加さんのおかげ？」

「…つてか根本は俺。」

「綺羅さんだと思ってますよ?」

「…何で?俺何もしてないじゃん?」

「…でも入るの利加さんを介してでも許してくれたでしょう?」

俺は澄香が憎くて憎くて仕方がなかったはずなのに。

それとは関係なしに話せてる自分がいるのに驚いた。

もつと俺は執念深くて。

もつと恨みがましい奴だったはずなだけど。

「…俺ね。何で結城綺羅さんが人気があるのかってちょっと考えてみたんです。」

「へえ?かつこいいいから?」

「…自分で言いますかねえ?  
違いますよ。」

「…じゃあ何で?」

「…良い意味で個性がないんですよ。」

あくどくないんです。」

「…それって誉めてるのか?」

「…誉めてるじゃないですか。」

あなたは素顔のあなたが想像つかないぐらい個性殺してますもん。

クイズとか料理ショーとか。

全然あなたの素顔判りませんもん。」

「…それは結城綺羅がミステリアスだから?」

俺がそう言つと澄香は頷いた。

「でも会ってみて判ったんですけど。」

あなたみたいに普通の人がいません。

大体売れたら天狗になるか嫌な奴になっていくかどちらかなのに。

「何か誉められてる感じがしないんだけど……。」

俺はそう言っただけで澄香を見つめ。

「何か言いたいのならはっきり言えば？」  
そう促した。

「俺DESTINYに戻りたいんです。」  
言いにくそうに澄香がそう言った。

俺はそれを聞いて。  
何だって思ったんだ。

「戻ればいいじゃん？何遠慮してんの？」  
俺はことさら何でもないように続けた。

「……だつて。」  
「……だつてつて。」

元々澄香の居場所はRucypherじゃないだろ？

しかも響から預かっただけだからお前が戻れるほど回復した  
って思うんならそれでいいんじゃないか？って思うんだけど？」

「……今利加さんに会ってきたんですけど1番結城綺羅さんが悲しむ  
から先に言ってきた方が良いつて利加さんが言ったから。」

1番俺のこと考えてくれたのが綺羅さんだつて。」

「まったく利加さんめ。  
何で俺が弱いところつくんだ!!」

「…そうだよ。俺別れとか悲しいから。  
でもお前の場合は違う。」

「利加さん狙いは目障りだから早くどっか行けって思う。」

「じゃあ。俺はこれで。」

「…ってかお前マジでか？」

「まだ収録が残ってるだろうが!!」

「だってDESTINYのレコーディングと重なるんです。  
俺の代わりに利加さん使ってください。それじゃ!!」

「それが澄香を見た最後で。  
そのあと。」

「澄香はきつぱりさつぱり歌手の道をあきらめて。」

「『愛』さんと愛をはぐくんだったらいと利加さんづてで聞いた。」

「良かったな。澄香。」

「ホントよかった。」

「あのままじゃ悲しすぎるから。」

「初めて見たときの衝撃はすごかったもん。  
あの化粧は見たことないくらいだったから。」



## 新生 R u c y p h e r 2

そして利加さんは何だかんだ言いながら澄香の尻拭いをする羽目になり。

俺の目論みどおりになってきた。

俺の目論み？

それは利加さんがめったなことで辞めるって騒げないような立場に追いやることだった。

我ながら頭いいって思ってたんだけど？

だって喧嘩するたびにあの諦めモードで辞めるって騒がれると俺もかなり堪えるんだよね。  
マジで。

だから俺は考えたわけ。

澄香が出て行って澄香の分のレコーディングの部分にぼっかり穴が開いたわけで。

その部分を利加さんで代用するってそこまでは利加さんも澄香と話をして。

話についてはたからすんなり行ったんだけど。

そこから利加さんを落とすのはまあ大変だったわけ。

要は俺は利加さんがめったやたら辞めると騒げないようにしたいだけ。  
けで。

他意は無いんだけどさ。

「利加さん。」

俺は楽屋で利加さんに話しかけた。

利加さんはパソコンで何か打ち込みながら俺を見た。

「…はい。」

「利加さん。Rucypherになる気ない？」

利加さんは俺が紡いだ言葉をよく理解できなかったみたいで。

「は？」

聞き返してきた。

「だから。Rucypherに加わる気ない？」

澄香の後に。」

「ああ。僕は向かないので他あたらたらどうですか？」

取り付く島がないほどに冷静な声で利加さんは否定した。

「…っていうと思ったんだけど？」

俺が続けると訝しげなまなざしを利加さんは送り。

嫌そうに眉根を寄せた。

「…また何か企んでんですか？」

「…違うって。」

「…だったら何なんです？そのいやらしい微笑みは？」

「…ってかそれ酷くない？利加さん。俺は真面目に話してるのに？」

ちよつとふくれてみたら利加さんは単純だから俺を見て。

「…はいはい。判りました。」

何なんですか？」

やっそこつちを向いた。

「さつき淳也たちと話してたんだけど澄香入れて4人でやってたら4人のほうが動きやすかったりするんだよね。」

俺がそう言つと利加さんは頷いて。

「…それで。利加さんって名前も珍しいし。

スッピンでもきれいだし。

って話になつて澄香の後釜利加さんがしてくれたらいいなつて話になつたんだ。」

「…本人抜きで何話進めてるんですか！！あなたたちは！！」

「まあまあ。それで。

利加さんの仕事量は増えるかもしれないんだけど。

俺たちもできるだけ自分のマネージメントとかするようになるからな。」

一緒にRucypherになつてくれないかな？

ちよつとRucypherのラジオも始まつて4人じゃないとちよつときついんだよね。」

そこで翼が帰つてきて。

「何の話してんの？」と話に加わつてきた。

俺が概要を説明すると翼も乗り気で。

「つてか利加さんがいてくれたら頭脳派はお願いできんじゃないん？

俺馬鹿だから中卒だし？」

そう言われて利加さんは何か茫然としてた。

つてかもはや自分の意志とは関係ないところで話が進んでて。拒否権がほぼ無いことを悟つたんだと思う。

「因みに。」

俺が利加さんに指を向けて。

にやりと微笑むと利加さんはめっちゃ警戒した。

「因みに利加さんは歌わなくて良いし踊らなくて良いし。化粧も薄くしてお人形さんみたいに微笑んでたらいいから。あんたが舞台とかライブとか苦手なの知ってるし俺たちはそんなに無体なこと言わないから。」  
あからさまにホツとする利加さんに俺はでも意地悪したくなって。

「だけど利加さん休みは俺と一緒にとるからね？」  
ウィンクすると意味を理解した利加さんが声を上げる。

「なっ！！休みぐらい好きにさせてくださいよ！！」  
「…何眠たいこと言ってるの？」  
あんたはメディアに露出したらまた変な奴増えるだろうから俺が守ってやるって言ってんだよ。」

「ってか綺羅が言うこときいた方が良く？利加さん。  
また何かあったら俺らもう本格的に解散しちゃうし？」  
うっとうしく詰まる利加さんに。  
ナイスだ翼！！と俺は心の中でエールを送る。

「…もう好きにしてください。」  
何を言っても無駄だと悟ったのか。  
足掻くのが無駄だと思ったのか判らないけど小さい声で利加さんが白旗を上げた。

そこへ淳也が帰ってきて。

「利加さ〜ん。  
俺の相手役やって？」

「…はい。」

肩を落として利加さんは。

きつと何でこんなことに。と嘆いてるんだろっと思っつ。

だけど俺はそんなのは良いつて思った。

利加さんは俺に振り回されてたらいいんだって。

## 大好き

淳也が利加さん連れて楽屋出て行ってから。  
翼と2人になつて。

翼が至極真面目な声で俺の名前を呼んだ。

「綺羅つてさ。」

「ん？」

「綺羅がこの間噂になつた女名前なんだつたっけ？」

「…芳賀悠里？」

「そう。そいつ。」

「芳賀悠里がどうかした？」

俺は言いながら芳賀悠里が動き出したかなくなって思った。  
あいつ本気だつたから。翼のこと。

「…何か俺も今日言われたんだけど。」

白夜の相手役の女優が盲腸？になつたらしく次点で芳賀悠里が繰り上がったとか何とかで。

あの女自ら俺にあいさつに来たんだけど。」

「へえ？」

「…ってかあの女初対面に近いのにベタベタしてくるんだけど？」

「…ってか翼。」

お前芳賀悠里と仕事したことあんの？」

翼は嫌そうに俺を見て。

「…昔。R u c y p h e rに入る前だけどちよつと。」

そう言った。

俺は芳賀悠里は純愛なんだなって思った。  
その時からずっと翼を見てたんだ。

あの夜確かに芳賀悠里はそう言って俺に抱かれた。  
つながりがほしいとはっきりと。

翼につながるのであれば何でもすると。

「…翼。お前狙われてるんじゃないの？」

聞いてみれば。

肩を落として。

「…そうかも？」

そう言った。

俺はにやにや笑いながら。

「いいじゃん。付き合ってみれば？」

あの女結構いいかもよ？」

俺はそれとなく促した。

「綺羅〜〜〜（怒）」

人ごとだと思って〜〜〜（怒）」

翼はそう言いながらまんざらでもない表情をした。

俺には良く判るんだ。

だって俺と翼はタイプが似てるから。

振られる理由もいつも一緒だし。

何考えてるか判らないって。

その時ノックする音がして。

俺が声をかけるとは言ってきたのは噂の芳賀悠里だった。

「…翼さん。白夜の最後撮るらしいんでよろしくお願いします。」

翼はそれを聞いて立ち上がる。

俺はその様子を見て。

芳賀悠里に頑張れよって思ったんだ。

芳賀悠里に引っ張られるように翼は楽屋を出て行って。

入れ違いに利加さんが俺を呼びにきた。

「綺羅さん。ラジオが始まりますのでスタンバイお願いします〜」。

俺はその利加さんを引き寄せて耳元で囁いた。

「利加さん大好き。」  
「つて。」

利加さんは耳元まで真っ赤になって。

でも小さく答えてくれた。

「僕もです。」

ああ。俺はこの人が好きだって。

純粹で純情で。

駆け引きが通じないこの人が好きだって。

これからいろんなことがあると思うけど。  
乗り越えていきたいと思う。

利加さんを思う気持ちで。

終。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2602j/>

---

太陽は沈まない～結城綺羅ver.～

2010年10月8日12時10分発行